

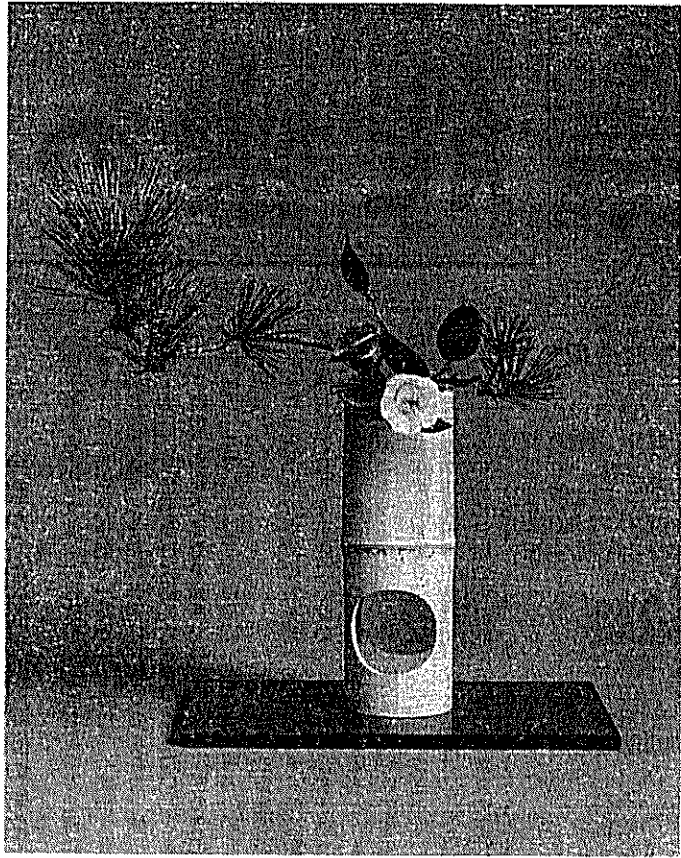
志月雅日記

(113)

日本の心を

えと文 二井栄逸

古代、立春の日に宮中の主水司(もいとりのつかさ)から、天皇



に奉った水のことを若水といったが、のちには元日の朝に始めて汲む水のことを若水というようになった。若水は、井華水(せいかすい)、初水、若井とも書かれ、井戸や泉などの上を鳥が渡る前に汲み上げた清浄な曉の水のことをいう。寅の刻(午前四時頃)、薄闇のなかを若水迎えに行くには、冷気肌をさすような寒さであるが、かえって眩暈を治し、心身の引きしまる思いがするのである。

や花人の家では、若水を大事にするしきたりが守られていた。清新の気に満ちた元日は、神と縁を結び、一年の招来のことごとく聖なる日であり、永遠の継承と繁栄を祈りつつ日本を確認する大きな節目となる。私も元日の朝、竹花器に初生けをして、清新の気を満たし、旅に出ることにしている。花器の丸玉垣は、七種の宝器の中の一つで、私の好きな竹花器である。本来は格花を生ける花器であるが、私は好んでこの花器に自然花を生ける。同じ竹でも、スカリとしたきれあじを見せる真竹(まだけ)は、孟宗竹より気品があつてよい。正月の花は、たくさんに花材をつかうより二種位にしばって生ける方が気がひきまらるものである。ちり一つない能舞台の上に、スラリと立った唐織姿のシテには打ちこむ隙もない。そのような厳しさが備わるのが日本のいけばなであらう。(平成三年一月元旦記)

このよう なしきたりには、先人が築き、磨き上げた日本の暮らしの心と折りが宿っている。私が若い頃、父は元朝注連飾りをした手桶に若水を汲み上げ、竹花器にうっして前夜に用意してあつた花を生けていたことを覚えていた。茶家

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話01137

平成3年1月・2月放送予定

◆ FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

(1月)

20日(日)宝生流「鞍馬天狗」 松本 忠宏
27日(日)観世流「源氏供養」 浦田 保利

(2月)

3日(日)宝生流「朝長」 渡辺 三郎
10日(日)観世流「百萬」 梅若 六郎
17日(日)高多流「田村」 栗谷 新太郎
24日(日)観世流「当麻」 観世 鉄丞

◆ 教育テレビ(午前9時~9時40分)

2月11日(祝)大蔵流狂言「二人大名」

茂山千五郎

能楽友の会三周年記念例会

囃子と謡の コミュニケーション

一月二十九日(火)午後一時半開演

熱田 神宮能楽殿

独吟(宝生流) 俊 寛 衣斐 正宜

独吟(観世流) 三 輪 梅田 邦久

独吟(高多流) 鶴 盛 長田 麟

独吟(金春流) 実 盛 本田 光洋

管独吟(観世流) 江 口 梅田 邦久

二唄(宝生流) 三 井 寺 衣斐 正宜

二唄(金春流) 郡 本田 光洋

一調(喜多流) 鳥 頭 長田 麟

一調(喜多流) 鳥 頭 大倉正之助

新年ご挨拶

観世流二十六世宗家

観世清和

清らかな気風に満ちた幸多き年
になりますように願いつつ、
新年の御挨拶とさせていただきます。

平成三年元旦

賀正
井上嘉久
(〒603)京都市北区紫野下鳥田町六

鳳鳴会
武田志房
積古場 京都市千種区今池四丁目
15-3 浅井ビル
電話(0)733-3736

名古屋淡交会

橋岡慈観
瀬戸三津子
福沢市福島町二ノ宮六 瀬戸方
電話(0)587-3388

財団法人 鎌倉能舞台

中森晶三
中森貫太
〒248 鎌倉市長谷三二五-13
電話(0)467-5557

名古屋観生会

野村四郎
東京都杉並区永福四一三〇-10
電話(0)333-2152
名古屋種古場
名古屋千種区日和町四ノ一〇
小鳩方 電話七五一八八〇番

春鶯会

梅若善高
〒565 豊中市新千里南町三丁目18-12
電話(0)683-1785
〒100 東京都立区綾瀬一丁目15-13
電話(0)336-0417

竹翠会 若松宏守
(〒662)西宮市平松町四一九
電話(0)798-2310

邦謡会
梅田邦久
須部一政
清沢美和
今田美融
本田

山本真賀
山本章弘
豊中市本町六丁目一〇一六

壺泉会

泉嘉夫
名古屋市昭和区山里町一〇三
電話八三二一三二
西宮市甲園園目山町三二二五
電話(0)798-2458

初陽会

武田宗和
種古場 名古屋千種区今池四丁目
15-3 浅井ビル
電話(0)733-3736

松音会

泉泰孝
泉雅一郎
東京都杉並区宮前四一九-14
電話(0)333-2188

名古屋橋岡会

名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

(株)大阪能楽会館
大西智久
〒560 豊中市北桜塚2-10-3

笙月会 中川雅章
長浜市地福寺町八ノ二九
電話(0)582-0630

生韻会
山中義滋
〒55 大阪市阿倍野区阪南町六十五-18
電話(0)6692-3825

下田雄三

雄謡会中部地区連合会
名古屋和石
一宮花
岐原雄
萩原雄
下原雄
高文之
倭山屋社
中

大垣浦声会

種古場 大垣市竹島町善念寺
住所 京都市左京区下鴨芝本町五八
浦田保利

名古屋修諷会

梅若修一

上田観正会能楽堂

上田観正会
上田観正会
上田拓貴
上田拓弘
神戸市長田区大塚町三丁目一ノ四
電話(0)78-691-1544

「尾張藩の能の歴史」の新しい文化創造の拠点として、名古屋に能楽堂を希望が高まっているが、能楽愛好者を中心に能楽師を一九とした、お城に能楽堂を作ろう会」では、この春から建設の請願に向けて署名運動をくりひろげる方針である。同会ではこの運動推進にあたり、地元で能楽研究者の協力により、地域文化の源流、能楽の歴史と発展について、いろいろな角度から執筆して頂き、建設要望の推進をめざして幅広い理解をひろげていきたいと期待している。本紙では今回、岐阜市立女子短期大学教授・辻宏一氏による「尾張藩の能の歴史」を掲載する。



辻 宏一氏

(辻宏一氏)昭和四十二年慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程修了。岐阜市立女子短期大学英文学科教授。

尾張藩の能の歴史

辻 宏一

徳川御三家の一つ尾張藩は、全国に諸藩の中でも、能楽の盛んなところであった。徳川家康が関ヶ原戦後、一六〇〇年十月(慶長五)、四男松平忠吉を、尾張清洲の地に封じ五十二万石を領知させたのが始まりである。ところが松平忠吉は、一六〇七年(慶長十二)病死し、嗣子がいなかったため、忠吉の弟で家康の九男徳川義直(後義直と改名)が、甲斐府中から清洲に移されて尾張一國を領した。一六二〇年(慶長十五)河川の氾濫の害を避けて清洲から名古屋に移ることになった。この義直を尾張藩の藩祖としている。

六日の項には、「尾張中納言義直の御邸に幽居あり。夜明程なく露地口よりならせらる。……猿楽御覽。御宴あり。猿楽は加茂。忠度。熊野。道成寺。狸々。乱なり。」とある。この翌日の後家康で、後代まで尾張藩仕方の代表格とされる、金春八左衛門家の初代安喜は、「山姥」を舞っていた。寛永二年以前に、尾張藩お抱えになっていたようである。(注3)

金春八左衛門は、金春安照の次男で、もとは、藤堂高虎に仕えていたが、後義直が懇望して、合力に罷成候故、八左衛門は、賜不為仕、仕手に取立申候。然処兄氏勝父に先立相果、甥七郎重勝幼少にて、父安照年寄、取立申事危御座候故、為相統八左衛門に家業、一子相伝并家之書物悉為写、安照加判仕、一事も不残伝授仕候。……以下長くなるので省略するが、金春本家とは、確執があったことが記されている。(注4)

寛永四年五月三日には、秀忠が義直の邸に御成になつては、その時申案が演じられては、同じ年の六月二十一日は、家光が御成になり、能は加茂、清経、源氏供養、卒都婆小町、道成寺、鶴、花月、能坂の八番、狂言は、唐角力、首引、暗尼、猿座頭の四番が演じられては、寛永五年六月十一日にも、秀忠が義直邸に御成をする。その時の能は、嵐山、頼政、井筒、天鼓、葵上、海士、鐘屋、狸々の八番である。同年八月九日には、家光の臨駕がある。その時も能を演じている。このように、大御所や将軍がしばしば御成になるたびに、能が演じられることになると、当然ながら、できるだけ良い能役者を召し抱えて、将軍に見せようとする傾向が生じる。

笛方藤田流の初代藤田清兵衛が召し抱えられたのは、寛永六年頃と言われる。その際、仲介の勞をとつたのが、江戸時代、観世流のワキとして、隆盛を誇った進藤流の創始者、進藤久右衛門である。進藤久右衛門が、藤田清兵衛宛に書いた、その間の事情を記す手紙が残っている。

寛永八年二月二十九日、秀忠が義直邸に、御成になる。その折の能は、玉井、八島、松風、是界、柳、春日龍神の六番で、特に秀忠の所望で、喜多七大夫が熊坂を舞っている。

寛永五年六月十一日にも、秀忠が義直邸に御成をする。その時の能は、嵐山、頼政、井筒、天鼓、葵上、海士、鐘屋、狸々の八番である。同年八月九日には、家光の臨駕がある。その時も能を演じている。このように、大御所や将軍がしばしば御成になるたびに、能が演じられることになると、当然ながら、できるだけ良い能役者を召し抱えて、将軍に見せようとする傾向が生じる。

義直は、大坂陣に勲功をたてたので、戦後加増により、一六三五年(寛永十二)には、六十三万三千石余に達したが、尾張藩では、一六七一年(寛文十一)元高六十一万九千五百石余として幕府に上申し、以後これが公称の知行高となった。

義直は、幼少の時から観世新九郎に小鼓を習い、舞は、義直の生母、相応院に仕えていた金春大夫の弟子にあたる女性の猿楽師、某という者に学ばれたと伝えられている。(注1)

徳川御三家が、能役者を抱えるようになった事情は、將軍秀忠が御三家に御成になるようになってからのようである。(注2)

「徳川実紀」元和六年閏十二月の項に、「この月尾張。紀伊。水戸三家。江戸の第宅落成し。臨駕のため管造せられし御成門等。結構花籃をつくされたり」とある。この頃屋敷内に、能舞台も造られたのかも知れない。

「徳川実紀」寛永二年二月二十

米二百石、後五百石で召抱えられたのである。竹田権兵衛広真から金春八郎へあてた書状などを参考に、その系譜を示すと、次のようになる。

二世金春安照(二世氏勝)
 安喜(金春八左衛門)
 氏記(大藏左衛門)
 女(金春右衛門)
 女(喜多七大夫妻)
 女(喜多七大夫妻)

竹田権兵衛広真の「先祖并菩提來之由緒帳」には、次のように書かれている。

「金春八左衛門安喜 法名浄元 尾張藩御合力現米貳百石被下候。外之役者に被下候とは違ひ、御知行之格にて被下候。金春大夫配知百五十石

金春大夫八郎安照次男、若名新五郎と申候。幼少之時、金春座脇師春藤源左衛門手前へ養子に遣候。源左衛門相果候後、春藤六右衛門金春座に加里、脇方頭取之儀に罷成候。八左衛門は、賜不為仕、仕手に取立申候。然処兄氏勝父に先立相果、甥七郎重勝幼少にて、父安照年寄、取立申事危御座候故、為相統八左衛門に家業、一子相伝并家之書物悉為写、安照加判仕、一事も不残伝授仕候。……以下長くなるので省略するが、金春本家とは、確執があったことが記されている。(注4)

寛永四年五月三日には、秀忠が義直の邸に御成になつては、その時申案が演じられては、同じ年の六月二十一日は、家光が御成になり、能は加茂、清経、源氏供養、卒都婆小町、道成寺、鶴、花月、能坂の八番、狂言は、唐角力、首引、暗尼、猿座頭の四番が演じられては、寛永五年六月十一日にも、秀忠が義直邸に御成をする。その時の能は、嵐山、頼政、井筒、天鼓、葵上、海士、鐘屋、狸々の八番である。同年八月九日には、家光の臨駕がある。その時も能を演じている。このように、大御所や将軍がしばしば御成になるたびに、能が演じられることになると、当然ながら、できるだけ良い能役者を召し抱えて、将軍に見せようとする傾向が生じる。

寛永五年六月十一日にも、秀忠が義直邸に御成をする。その時の能は、嵐山、頼政、井筒、天鼓、葵上、海士、鐘屋、狸々の八番である。同年八月九日には、家光の臨駕がある。その時も能を演じている。このように、大御所や将軍がしばしば御成になるたびに、能が演じられることになると、当然ながら、できるだけ良い能役者を召し抱えて、将軍に見せようとする傾向が生じる。

久田観正会 久田 徹二 大倉流小鼓 久田 舜一郎 松月会 久田 郁子 郁議会 前野 郁子 松認会 松山 幸親 馬場 信至 玉木 孝男

- 洗心会 奥村 富久子
- 芳韻会 稻生 芳雄
- 幸福会 近藤 幸江
- 猶惠会 熊沢 恵美子
- 水雲会 藤元 三
- 緑名会 田中 武
- 重陽会 菊池 重郷
- 賀水会 加賀 敏彦
- 中日文化センター 謡曲・仕舞教室 (名古屋栄) 岐阜・四日市 翠 謡曲会 生駒 里翠
- 三村 恵子
- 宝生 英雄
- 宝生 英照
- 名古屋異会 辰巳 孝
- 内藤 泰二
- 近藤 乾之助
- 正風会 衣斐 正宜
- 衣斐正宜後援会
- 菊扇会 廣田 泰三
- 後援会 廣田 泰三
- 豊嶋能の会 豊嶋 三春
- 佐野 由於
- 倉本 雅
- 吉田 俊彦
- 竹腰 勝一
- 司宝会 佐藤 耕司
- 金剛 永謹
- 金剛 巖
- 廣田後援会 廣田 陸一
- 廣田 幸稔

〔④面よりつづき〕
同年五月九日、家光が義直邸に御成になる。この時も能が演じられていたが、特に家光の所望で、喜多七大夫が熊坂を舞っている。喜多七大夫の名前が、最も高い頃であらうと思われる。
寛永八年の分限帳(「名古屋市史風俗編」所引)には、金春八左衛門(二百石)、藤田清兵衛(八十石)、太鼓、藤田清兵衛(八十石)、藤馬次左衛門(八十石)、役不明、山脇五郎左衛門(七十石)、狂言・丹坂善藏(六十石、役不明)、長命五左衛門(五十石、金剛

座地蔵か)、長命甚吉(五十石。役不明)、松本平次(同上)、林長兵衛(五十石、連)、藤馬権七(四十五石、役不明)、松本藤藏(同上)、田中惣十郎(四十石、役不明)、川口久五郎(三十石、役不明)、花井弥三右衛門(同上)、大原半平(同上)、大原五兵衛(同上)、その他、幸若の役者、幸若忠太夫(五十石)、幸若三助(三十石)、幸若善助(三十石)。以上、千石七十石、総数二十一人の能役者、幸若役者が召し抱えられている。(注6)

義直は、自分自身でも、寛永十二年七月十八日には、二九で、能を演じている。「徳川実紀」には、次のように書かれている。「十八日二九にて猿楽あり。尾張重相は善知鳥、紀伊重相は鐘鹿。水戸重相は芭蕉をつかよまつる。御感な、めならず」
注1 「名古屋市史風俗編」による。
注2 岩波講座「能・狂言」1「能楽の歴史」による。
注3 右の書「五」地方諸藩の能楽」による。

注4 野々村戒三著「近畿能楽記」による。
注5 「謡曲講座」三巻、藤田家系譜、野々村重舟下。川七左衛門より、家伝の名笛、青海波、諏訪丸、瓦落、千鳥、鶯の五管、及び「梅花集」と言う笛の伝書を与えられる。以上「名古屋市史風俗編」による。
注6 能役者については、岩波講座「能・狂言」一能楽の歴史も参考にした。

演 能 案 内

名古屋宝生会定式能(第卅五期)

平成三年二月三日(日)午後一時始

熱田 神宮 能楽 殿

番 組
辰巳 孝 馬塚富四夫 地謡 辰巳 孝 鬼頭 喜太郎
辰巳 孝 馬塚富四夫 地謡 辰巳 孝 鬼頭 喜太郎

通 小 町
大坪十喜雄 西村 欽也 寛井啓次郎 藤田六郎兵衛
後見 倉本 雅 富田正代司 衣斐 正宜
戸田 和 地謡 藤田 哲也 馬塚富四夫 喜男

藤
竹内 澄子 飯富 雅介 吉田 定男 鬼頭 喜太郎
後見 辰巳 孝 井上 祐一 後藤 孝一郎 鹿取 希世

竹生島 参 井上松次郎 井上 祐一 後見 大野 弘之

僧 正 直 能 高安 勝久 鬼頭 英二 助川 龍夫
間 大野 弘之 柳原富司忠 藤田六郎兵衛

附 祝 言
主 催 名 古 屋 宝 生 会
〔要員券〕 名古屋市昭和区山里町一三五
当日券 五千元 内藤泰二方 電話八三二一三四四九

名古屋観世会定式能

平成三年二月十日(日)十二時半開演

熱田 神宮 能楽 殿

番 組
小島 一英 祖父江修一 本田 敬二
久田 邦久 藤田 正邦

鶴 亀
西村 欽也 寛井啓次郎 鬼頭 喜太郎
飯富 雅介 藤田 哲也 馬塚富四夫 喜男

宝 の 笠 井上 祐一 井上松次郎 大野 弘之
後見 辰巳 孝 佐藤 友彦

梅 舟 慶 片山九郎右衛門 古橋 正邦
クセ 藤井 徳三 中川 雅章

田 村 山本 清 河村総一郎 藤田六郎兵衛
福王茂十郎 大倉源次郎

附 祝 言
主 催 名 古 屋 観 世 会
〔要員券〕 名古屋市瑞穂区東栄町三二二四
〔初回に限り当日券は発売されません〕



伊勢金春会
中 村 富 次
伊勢市宮町一四一七
電話(五五〇)二四五六番

金剛流 景雲会
松野 恭 憲
松野 洋 樹
〒116 京都市右京区鴨島泉殿町一八三
TEL(五五)四六二二二四八番
FAX(五五)四六一六〇九八番

国際能楽研究会(I.N.I.)
宇高通成後援会
〒606 京都市左京区高野泉町四〇
TEL(五五)七〇一〇七九三
名古屋事務所 前組英安方
TEL(五五)八五二二三二四

金 春 信 高
金 春 安 明
〒167 東京都杉並区南荻窪3-17-16
電話(三三三)二五七二番

金 春 欣 三
春 敲 会
東京都杉並区成田東四丁目35-20
電話(三三三)七三七八二番

金 春 穂 高
廣 瀬 瑞 弘
〒467 名古屋市瑞穂区東栄町三二二四
電話(五二)一八四一四七四五

本 田 光 洋
東京都中野区上高田二ノ二五〇二
電話(三三六)二六四一番

名古屋金春会
林 鉄 郎
近 藤 修 彦
渡 部 道 三

大阪喜多会
和 島 富 太 郎
〒665 宝塚市宝梅一丁目12-1
電話(〇七九)七八八三〇

二 井 栄 逸
松阪市殿町1412の3
電話(〇五九)二二一〇二六

長 田 驍 後 援 会
〒514-22 津市高野尾町三三五一四六
電話(五五)〇六九七番

能 楽 講 座
能と狂言に親しむ会
梅 田 邦 久
藤 田 六 郎 兵 衛

森 好 会
森 茂 好
〒151 東京都渋谷区代々木四一三八一二
電話(三三)3370-4609

喜多流 山 本 才
名古屋千種区北千種3-3-10
合同宿舎千種東住宅30号
電話(〇五二)七一二一五七四番

高 安 会
西 村 欽 也
高 安 勝 久
飯 富 雅 介
杉 江 元

福 王 茂 十 郎
〒662 西宮市名次町六番十二号
電話(〇七九)〇七七二

京 都 ・ 高 安 流
岡 次 郎 右 衛 門
向日市上植野町地田一ノ五四
電話(〇七三)九三三二四〇六

豊 嶋 十 郎
〒111 松戸市下矢切五五五
電話(〇四七)三〇一九八二

瞳 好 会
森 常 好

エンゲージリング 山田宝石 貴金属・時計・装飾品 名古屋・本山駅 電 762-2434代表

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社 名古屋市中区千種2丁目18-18 (郵便番号 464) 電話 (731) 7984 振替口座 名古屋 0-36393 購読料 1年1000円 郵送の場合 1年1500円 一 部 90円

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿) (3月) 2日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料) (番組①面) 3日(日) 大蔵狂言會 (来場歓迎) (番組①面) 10日(日) 三文會大善會 (来場歓迎) (番組②面) 17日(日) 武田道善會 (有料) (番組②面) 21日(祝) 梅泉會大 (有料) (番組③面) 24日(日) 登泉會大 (来場歓迎) (番組③面) (4月) 13日(土) 青陽會定期能 (有料) 14日(日) 觀世會定期能 (有料) (番組②面) 21日(日) 邦舞會 (来場歓迎) 27日(土) 能の正會 (有料) 28日(日) 久田會 (来場歓迎) 29日(祝) 幸友會春の會 (来場歓迎) (5月) 3日(祝) 中電力全社大會 (関係者) 5日(祝) 翼會大會 (来場歓迎) 6日(休) 朋會大會 (来場歓迎) 12日(日) 能楽と三曲の會 (来場歓迎) 18日(土) 觀世九奉會定期能 (有料) 19日(日) 狂言やるまい會 (有料) 26日(日) 名古屋観劇會大會 (来場歓迎) (6月) 2日(日) 大槻清韻會能 (有料) 5日(水) 熱田祭奉納能 (来場歓迎) 9日(日) 名古屋観世會定期能 (有料) 15日(土) 叶石會・一關會 (来場歓迎) 16日(日) 名古屋生會定期能 (有料) (演能変更の節はご了承下さい)

中日名匠鑑賞能

能「松風」「葵上」上演

4月6日愛知文化講堂で

中日新聞社主催、文化庁後援の重要無形文化財「中日名匠鑑賞能」は、四月六日(土)愛知文化講堂で催される。中日名匠鑑賞能は、今回で八回目、昭和五十八年まで二十八回を数えた中日五流能の伝統をひきつ

狂言共同社創立100周年

〈狂言その世界〉

3月21日 市民会館で記念公演

名古屋の和泉流狂言の伝統を守り活動している「狂言共同社」は明治二十四年(一八九一年)に創立されてからこととして丁度百周年にあたり、これを記念して、名古屋市市民会館と共催により、市民の劇場「日本の心シリーズ」狂言その世界」のテーマで記念狂言會が三月二十一日(祝)名古屋市民会館中ホールで開催される。

平成3年2月・3月放送予定

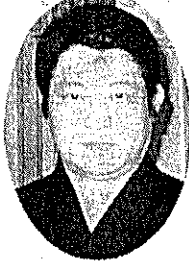
FM能楽鑑賞 (午前8時~9時) (2月) 24日(日) 觀世流「当麻」觀世鎮之丞 (3月) 3日(日) 觀世流「竹生」島梅若万紀夫 10日(日) 寶生流「羽島」朝倉原太 17日(日) 觀世流「屋島」木原康九 24日(日) 和泉流「扇理」三宅藤三 31日(日) 寶生流「葵上」宝野ひろ

ツレ武田宗和 狂言「観世」(茂山千之丞、茂山千五郎) 能「葵上」空之折(觀世元昭、ツレ小島一英) ほか舞踊子、仕舞など。 前売特別席九千五百円、A席八千五百円、B席七千円、C席五千円(全指定席) 取扱い|中日サビセンタール、中日新聞社文化事業部(電話〇五二二二二一〇七二九) デパートプレイガイド、能楽師宅。

平成2年度名古屋市芸術賞

觀世流 久田徹二氏 芸術奨励賞を受賞

名古屋市は二月五日、平成二年度名古屋市芸術奨励賞を授賞、芸術奨励賞に能楽師・久田徹二氏(四三)が選ばれた。



久田徹二氏

名古屋市芸術賞は昭和五十年に創設され、芸術特賞は長年に亘り優れた芸術活動を行い、芸術文化に大きな功績のあった個人又は団体、芸術奨励賞は継続的に活発な芸術活動を行い、今後とも芸術文化の振興に寄与することが期待される個人又は団体に授与される。今年度は芸術特賞にパレエ・佐々木恵子、日本舞踊・藤間勘章の両氏、芸術奨励賞は久田徹二氏とともに現代彫刻・黒磯社、演劇・西川好弥、テロ・渡辺真帆子の四氏が受賞した。

邦謡會能

3月23日 国立能楽堂で 邦謡會(梅田邦久師主宰)は、三月二十三日(土)東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂で「梅田邦久還暦記念・第十三回邦謡會能」を公演する。

名古屋能楽鑑賞會 (第3回)

三月二日(土)午後二時始 熱田神宮能楽殿 解説 能楽評論家 西 哲生 狂言 鈍 太郎 野村又三郎 後見 井上礼之助 近藤乾之助 宮 宝生 河村大 大倉源次郎 後見 野村又三郎 野村信行 後見 井上礼之助 藤田六郎 能野 間 野村又三郎 佐藤 耕司 田崎 隆三 後見 辰巳 孝 地福 鬼頭 壽一 佐野 隆三 衣斐 正宜 吉田 俊彦 水上 曜和

第21回 大蔵狂言會・なごや會

三月三日(日) 正午始 熱田神宮能楽殿 小舞 泰山府君 幼げしたる物 眞船 道明 大蔵 基誠 馬 雁 金 大蔵 太郎 狂言 花 争 中津 恵吉 大西 安春 昆 布 亮 村松 泰子 高橋 由里子 小舞 松 尽 新美 淑子 海 貝 人 高倉 昌子 貝 尽 高倉 昌子 中村 つや 上野 多佳子 福部 飛 龍 立川 一枝 福部 神 得本 道子 狂言 長 光 大塚 寿 小舞 山 伏 丹羽 節 小舞 鐘 の 喜賀 栄子 名 取 計盛 紘子 景 阿 日 河村 文子 景 弥 小野 加津子 景 清 岩田 栄 放 下 備 若林 得尊 法師 母 若林 邦昌 狂言 入 間 川 松川 佳澄 牛田 敏子 小舞 鳥 宮本 昇 大蔵 基誠 大蔵 吉次郎 大蔵 弥右衛門 (終了予定 四時二十分頃)

〔御来場歓迎〕 主催 大蔵 狂言會 事務所 名古屋市中区千種2丁目28番6 丹 羽 節 方 電話 (〇五二) 五二一三三七四

藩祖義直の頃の狂言師としては京都市の... 慶長十九年(一六一四)...

山脇和泉家は、元來は摂津猿樂鳥飼座の出で、京都で手猿楽狂言の一座を成していたと云われる。

山脇和泉家は、一流を樹立するに、山脇和泉家で、一流を樹立するに、山脇和泉家で、一流を樹立するに...

山脇和泉家の系譜を示すと、次による。流祖佐々木岳楽軒(江州坂本の隠士、室町前期)...

六世鳥飼和泉守元光(三世元純の次子。五郎左衛門、改姓山脇道西。元光が鳥飼から叔父の氏で...

山脇和泉家は、十七世元照(明治二十年八八八七)大正五年八一九一六の時、中絶し、和泉は宝生流家に預けられた。

山脇和泉家は、十七世元照(明治二十年八八八七)大正五年八一九一六の時、中絶し、和泉は宝生流家に預けられた。

山脇和泉家は、十七世元照(明治二十年八八八七)大正五年八一九一六の時、中絶し、和泉は宝生流家に預けられた。

尾張藩の能の歴史(三)

辻 宏 一

と称していたが、後に和泉と、受領名を変更している。尾張家の中に、「石見」あるいは、「石見守」と称する人がいて、まぎらわしいので、「和泉」と名を替えたようである。

○に尾張藩の能の歴史(三)の続き。尾張藩の能の歴史(三)の続き。尾張藩の能の歴史(三)の続き。

面打教室

於名古屋・栄 朝日神社 毎週木曜日及び土曜日(それぞれ月四回) 教室の見学・能面お求めに方お気願におこし下さい

日本能面巧芸会 会長 林 龍 雲 事務局 名古屋市中区錦一丁目三三三一九番ビル3F

名古屋梅猶会定期能

Table listing performances for the Nagoya Utsunokuni-ji regular performance. Columns include play titles (e.g., 葛城, 狂言禁), actors, and dates.

名古屋観世会定式能(二回)

Table listing performances for the Nagoya Kanzei-e formal performance. Columns include play titles (e.g., 能屋鳥, 能経), actors, and dates.

紅梅記

一年末年始

平成三年、元旦の月は満月であつた。冬の月が荒々しく動く地球をみおろす。丸い月は珍しく、それが月末の満月の頃になると、日中硝子越しの日照しが春の到来を覚えさせる。

毎年の正月のテレビ(NHK)は元旦が泰山府君(金剛殿、一昨年正月のラジオでもよく)。花の命の曲、明るく楽し、しめなわを飾る舞台(宝町)奥ゆかし。以下おなじ。二日は狂言二題で、三本柱(野村万之丞)と福部の神(茂山千五郎)。すがすがしくおもしろし。三日は声刈(野村四郎)。夫婦再会(三木)と三木柱と声刈の舞台(画面)は赤茶の色合いがよいと思つた。それと、朝七時の開始は早い。元旦の舞楽(雅楽)も早朝の六・一五から。毎年である。さて十五日の鉢木、当代の名入友枝喜久夫氏(喜)の芸にみ入る。右手が老体で終始ゆるが、謡しつかり動きに潤い。深い味わい。喜ぶ。ワキ(森茂好)佳。

ラジオ(同)の方は三日と十三日の二回で新作能。佐渡をきく(十一月四日)金春田満井金特別公演。作詞・作曲は金春信高氏。増田正造氏の解説がつく。視野広く懇切丁寧(三回あり)。開かたで重い。老女物や、構成はちがうが定家などが頭をかすめた。シテ、佐渡に流された晩年の世阿弥。作者信高氏が勧める。この老妻のシテを孫娘(ツレ、金春信高の子)が供(ツレ)を連れて訪ね、話にだけ聞いていた祖父にあう。ワキは出す。所の者(アイ)は出る。まず老妻(アイ)は出る。孫を問ひ、無事を喜ぶ。なつかしむ孫娘と孫の竹の子の弟子であらう供の者で夜を徹して語り合う。教(孫の兄の兄の兄)を授け、若い孫のあややかな舞の舞をみて、在りし京都をしのぶ。作中こたけが明るい。秋の夜は過ぎ朝を迎える。宙の景清とはちがひ、お互い相手の姿を目に焼きつけるようにして別れる。終つたかにみえて、今少し金鳥香の一句が口ずさ

まれる。このところがよきところである。これはたとえ「関寺小町」の終り方、巴の切りや西行様の終りのようでもある。装束のことは説明がなかった。能楽タイムズ(二月)の山崎有一郎氏担当の批評欄に載る写真で、老体のオモテは割合きびしく、水衣、着流しで頭巾をかぶる。女のソレは小面であらう。

これより先き、新作謡曲(金鳥香)も同氏放送できたが、これに次ぐ意欲の力作。機会あれば是非みたい。また近頃の新作・復曲の一篇でもある。

新作と言へば、二月の演能に臨死(心臓移植)をテーマにした新作能が披露される。七日、橋岡久馬・作曲、作詞は多田富雄(医師)東大教授、舞臺監督は橋岡主幸(昨年の社中能で定家の小鼓も打つ)、新生面、文芸宗教(哲学)・科学の交差する中で表現される現代の生と死(倫理)の活問題に大きな関心を寄せたい。昔の中国と日本を演能場所とする筋は省く。後に「なつたが曲名は「無明の井」」。

昨年、野村又三郎古稀・福井啓次郎還暦祝賀の乱能があつた。啓氏の卒都婆小町は珍しく、又氏安達原を。前曲は全体なかなか秀逸。シテは切りが殊のほか佳。ワキ千之丞氏がなかなかのもの。千五郎氏の石橋を見落した事返す返す残念。盛会で楽しかった。

年明け一月十七日京都でも乱能が催される。京都能楽会創立五十周年を祝して。八名古屋Vは、東西錦連の面々を交え、こちらは八京都Vの方々の様子。五十一年の歴史は戦争と軍隊、戦後の立ち直り、そして復興と色々の姿をしのばせたであらう。将来に多望を。

さて東京に戻って、庵の梅(茂山千五郎)・狸腹鼓(和泉元秀)が一月にでる。眼福の大きな東京である。

それにつけても名古屋の三月には狂言共同社結成百周年記念の狂言会を開く。二十一日名・市民会館で二部制。東西の狂言師の参加を得て大きな狂言会のはず(当日の八熱田Vは猶限会)。百年で五

代続く家もある(井上松次郎家)その百年の狂言記録集を松次郎氏がこつこつとまとめ、完成が間近いと伝え聞く。完成の時は名古屋の貴重この上ない資料とならう。

三宅庄市(先代三宅藤九郎)氏昨年十二月十九日逝去。八十九歳。亡兄野村万蔵氏ともども人間国宝で、兄は重厚、弟は繊細。軽味また深味は双方共十分。若い頃は「二ツ金の飯」を食べた仲、狂言芸を勤め合う。NHKの謡曲・狂言の時間創設に努力された一人。名古屋へは随分前から来ておられるはず。戦後でも愛文講堂舞台技師の三番更替掛りノ舞が思い出深い。木六歌・宗論(無布施経もか)・枕物狂・花子・水汲(藤・保之入のち元秀V)・くじ罪人(万・藤・保・腰折(藤・右近・又三郎)など秀箱の一端。年賀状には自作の干支小舞謡を添えられた。

千作(二代)・忠三郎(先)・弥五郎・東次郎(先)・万蔵・藤九郎(先)諸氏のよき時代は語り草と記録の輝かしい中に入る。(野村広二)

極月の舞台から

「歳末助け合い運動・協賛能」と「野村又三郎古稀・福井啓次郎還暦・祝賀乱能」

竹尾 邦太郎

「清経」ワキ淡津三郎・元、初同で気持整えるかに直して扇を開き首に掛けた髪髷ゆくり外してそこに載せ、ツレに遊上する辺りのしめじみとした感懐は上々。シテ雅章。ツレ(里翠)との絡みは少々懸隔が過ぎ、気分を変えての床几での合戦譚も辛気臭い。鉢巻が眉の上に滑り、中將の眉間の皺が殊更目立つ面の表情にも抱えうか(途中で後見が直したが結局滑ってしまった)。

クセの型どころは、ハ侍つことありや眺め、と扇カザして斜に見上げるところ、ハ腰より横笛、と開いた扇と笛に擬するところ、ハ西に傾く月を、見るところなどなど、感傷的な公達のナルシズムの世界を垣間見せ、邦久・修一以下の甘美な地がこれを支えた。(57分)

「碁」当地では稀な喜多流の「碁」とあって流儀上げての意気がひしひしと感ぜられ、期待に応えシテ長田藤の好演。

他流と異なりワキ(飲也)は後場に出る。そのためツレ(松井彬)とシテとの関わりがより密になる。

西下するツレの、道中を急ぐ何がなし細心の漂う風情を形がしつとり見せて導入部から緊張する。静まり返る屋敷に案内を乞うツレに、無沙汰故の敷居の高さを感じさせる冷え冷えとした空間。そこへ憑かれたように出るシテ。孤獨を託つ憂愁の想いが一入深くなる。思ひの丈は静みと感懐になり、やがて静感となつて、ハ感かの心や、と正中下層に収束する。そして東の間ののりやが暗れると、今迄聞えなかつた碁の音までが耳に届き、するとそれが唐の蘇武の愛情譚を想い出させることになつて再びシテの心を掻き乱す。面は深井・襟白・白摺袴・秋草文様無

「養上」シテ正宜。ハ様の弓の音は何処ぞ、と附せ加減に面遣い、或かれて来た所以を探り、ハ姿なければ、とたじくんと退つてシオル辺りの猶疑と失望の均交せになつた心持や、養上(出小袖)を打たんと居立ちはしても、気分萎えて下居シオル邊巡の心持、など旨い。また、ハその面影も恥かしや、と扇で面を蔽い、唐織引き被るとき、髪帯がはらりと面前に垂れて鬼女の角にも見えたのが後シテを暗示するようで面白かつた。

後シテは何となくせかせかして居り、ワキ・雅介も急ぎ立てられてくるようで、折からシテ・ワキの攻防も精彩が感じられなかつた。(49分、平成2年12月2日、歳末助け合い運動・協賛能)

(蛇足)いくら女の時代とは言へ、女の怨みや妬心が三番続けば、男の気も滅入るのではなからうか。

舞臺子「養老・水汲ノ伝」シテ府二。悠揚迫らぬずかすかとした運びは大人(たいじん)の風格で、これぞ家元芸の面目。

舞臺子「安宅」シテ義太郎。ハ手まつ通る、で地が遮られての苦笑。大兵ながら必細気な弁慶は伏目がちで男舞も柔らかく静か。

「卒都婆小町」シテ啓次郎。花ノ丸文様を散した鶯色の縫綴腹巻の残んの色香。面は老女。重いが上に重々しく、幕内に姿現わしてから幕放れまでが少々じれったい位。二ノ松で胸杖のつもの杖に縮つてのクツロギ。千鳥掛に一ノ松に出で直すと勾欄に寄り、壁に向きを変えて一足踏めると、ハ身は浮草を、と果敢な気にかき、か細い笛(栄夫)がムード(?)を出す。舞台に入り、ハ月の桂の、とワキ正に向いて笠に手をやり、二足踏めて、ハ漕ぎゆく人は、と退つて返しに胸杖するまで、描写的確で次第に調子が出てくる。笠を脱ぎ、髪桶もびたり決まって中々のももの。ワキは千之丞と真音、着流儀である。卒都婆に坐るシテを見始め、教化して退けうの意気込みは激しかったが、見事に一本取られ、ハ頭を地につけて、と文字通り頭擦りつけ兩掌上に向けて深々と叩頭する果敢なき。そして、

後シテは一旦三ノ松に姿見せて退くと加速をつけて一ノ松に走る。キツと面切るシテにアツと驚くワキに見所の笑い一頻。黒頭の猛々しきを見せつけて又三郎、幕に退くのが何となく未練気にもう一暴れの気配を醸して三ノ松で拍子踏むと、ワキは意気揚々と正先近く出て拍子二つ踏んでトメた。(1時間9分)

「泉山伏」シテ山伏・源次郎。「一折り折って頂かうと存じます」とやって来た巨漢の太郎冠者六郎兵衛に圧倒され、たじたとたつて尻餅をつくのもさもありなん。弱々な山伏との対照が妙。しかし、舞台の展開は、売れっ子(?)の家元と若家とあつて稽古不足は否めず、短を外し放しの茶番狂言。

「石橋・大獅子」前シテ老翁・千五郎。アクセントを利かせた大きなゼスタチャが白髪三千丈式のこの唐物の詞章によくマッチして説得力がある。「雲より落ちて数干丈」と、のけ反らんばかりに滝を見上げたり、いかにかな渡れるもんですかとばかり、ハ虚空を渡る如くなり、と大きく首を横に振るやうで、威風凛々を払う堂々たる風采のワキ寂照・忠三郎も些かびりり気味。それにしても、面(阿古父尉か)と直面とが渾然一体となつた千五郎の融通無碍の境地は将に仙人の化身。

後シテは又三郎(白)、赤三郎に万作・信行・武司の二組の親子競演が目出度い。幕放れでよろけとして元氣流瀾の四頭の獅子の乱舞は、映き誇る紅白の牡丹をバックに上々のフィナーレとなつた。(45分、平成2年12月27日、祝賀乱能)なお、大小笛の三拍子を助めた栄夫の力演と、徳三の笛の好演が印象に残る。

流元 剛行 金流 世宗 観宗

書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入

電話 2483-9200
3359-113
3291-3311
電報 231

観世流謡曲本

ちくさ正文館

ちくさ駅前
電話 1137

五月雅日記

(115)

空のアルバム

えと文 二井栄逸

金子戴園の作品の中に、次のような歌がある。
水無月の朝の心にひびくなり
教会堂の鐘なりしきる。――

私は、どういふわけか、この歌が好きで忘れることが出来ない。この歌には空のことばがうたわっているが、私にはひろびろとした大空の映像が浮かんでくる。

水無月になると、雨季の為、梅雨降れにまみれる空が水鏡に輝き、殊の外美しいのである。今朝、家を出る時、門の前で車を待っている間、空を見上げていた。

この程ずっと寒さが続いていたが、昨夜、夜半頃から気温が上がり、暖かくなったせいだ、今、眺めている空は、水無月の空のようにみずみずしく、私の目に入ってくる。



出、大空に連なる思い出のかずかずは、いつも水鏡にうつまわって、私の胸の中を去来する。私の創作活動の周辺には、執拗にこの水鏡の色がまつわりついているのであろうか。
× × ×
内乱の炎が、日本列島を包みつくしていった南北朝から室町の初め、世阿弥によって完成された能は、みがきぬかれた舞台と、豪華絢爛の織物美、洗練された能の風姿、省略された演出によって永い年月を生きてきた。

そして、今日、最も心強く思われることは、能はたしかに古典としてのもの珍しさからではなく、その象徴性に充ちた演劇性に内外から、高い関心を集め、現代に生きる演劇としての新しい光を浴びつつあるということである。
(平成三年三月四日記)

ツクマス公演

近鉄アート館狂言會

ツクマス公演として定着してきた近鉄アート館(近鉄百貨店阿倍野店九階)の公演は今回第三回目を迎え、三月二十九日(金)三十日(土)の二日間、狂言、素囃子を上演する。

狂言(大蔵流)「二人袴」(茂山千之丞、丸石やすし、茂山あきら、茂山千三郎)
ツクマス・素囃子(笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・大倉正之助、太鼓・上田悟)
狂言(大蔵流)「初舞」替装束(茂山正義、茂山真吾、松本薫、茂山重司、地謡・茂山千之丞、丸石やすし、茂山千三郎)
開演午後七時、指定席三千五百円、自由席二千八百円。
問い合わせ近鉄アート館(電話〇六二五二二二二)

重要無形文化財

中日名匠鑑賞能

四月六日(土)午後一時開演

愛知文化講堂

舞臺子絵

坂井音重 後藤孝一郎 小寺俊三 坂井喜之 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛 吉井順一

舞臺子絵

坂井音重 後藤孝一郎 小寺俊三 坂井喜之 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛 吉井順一

能松

武田 宗和 川ヶせ 岡 久広 坂 武田 志房 地謡 今村 喜男 藤田 大五郎 鏡木 崇男 河村 啓次郎 福井 啓次郎 藤田 大五郎 野村 又三郎

後見 武田 志房 地謡 本田 久広 加藤 保太郎 祖父 江修一 久田 徹二 角 寛次郎 藤田 大五郎 藤田 大五郎

梅田邦久師還暦祝賀記念会(二)

四月二十一日(日)午前八時半始

熱田神宮能楽殿

素囃子 高 砂 梅田 邦久 後藤孝一郎 岩田 時代 須部 甫 高橋 和成 後藤孝一郎 鹿取 希世

素囃子 三 山 箕浦美智代 都築 健二 安間 忠一 横江美貴子 吉川 睦美 小川 泰子

舞臺子 胡 蝶 加藤 千晴 後藤孝一郎 鹿取 希世 松 風 斎藤 繁 後藤孝一郎 鹿取 希世 仕舞半 藤 丸 飯島美津代 奥村 妙子 志水 芳子

舞臺子 田 川 佐藤 英生 都築正三郎 有瀬 元善 梅田 邦久 西川喜代子 橋本 磯道 種村とし江

舞臺子 梅 城 丸井 寿子 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 三村 律子 後藤孝一郎 藤田 六郎兵衛 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 大和舞 藤田 六郎兵衛

舞臺子 蓮吟 風 山 小林よね子 牧野あいつ 山下 松江 溝口 幾子 水野 山 野々山 藤田 六郎兵衛 山中たね子 岡田 春江

舞臺子 獨唱 班 女 梅田 邦久 深川 寿美子 船 井 慶 橋本 雅夫 高木 町子 法西矢 義雄 局若麻績 菊 若麻績 内竹内 英雄 河合六三郎 加藤 茂 田中 純一

舞臺子 獨唱 花 梅田 邦久 小林富美子 菊 小野 朗 三宅川 公香 半田 智子 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 西村 欽也 後藤孝一郎 藤田 六郎兵衛 美奈保之伝 松田 高義

舞臺子 女 西村 欽也 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

舞臺子 後見 武田 欣司 地謡 松山 幸親 橋本 邦久 久田 徹二 小片 山九郎 右衛門 朗

仕舞 春日 竜神 山口 謙介 獨 一角 仙人 梅田 邦久 平出 京子 舞臺子 養 老 高沢寿美子 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 水波之伝 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

卒都婆 小町 木村 ひで 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 西 行 波 長谷川 田鶴 坂野 嘉子 阿 漕 加藤 井知子 舞臺子 郁 耶 二木 卯子 上田 悟 潘シキ 寛 敏一 鹿取 希世

舞臺子 求 塚 田中 美子 水野 美代子 徳田 大尚 徳田 文代 飯富 雅介 寛 敏一 鹿取 希世 前後之替 杉江 元 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛 野村 又三郎

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

舞臺子 繪 馬 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 後見 片山 慶次郎 地謡 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 武田 邦久 須部 甫 橋本 邦久 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛 片山 慶次郎 河村 啓次郎 藤田 六郎兵衛

平成3年3月・4月放送予定

FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

〔3月〕	24日(日) 和泉流狂言「藤	三宅 藤九郎
	31日(日) 宝生流「葵	上 宝生 公 恵
		細野 ひろみ
〔4月〕	7日(日) 観世流「雲	院 観世 清 和
	14日(日) 宝生流「蟬	通 佐野 辰 助
	21日(日) 金春流「忠	度 桜 間 善
	28日(日) 観世流「碓	碓 奥
〔教育テレビ(午前9時~10時)〕	4月29日(祝) 新作能「無明の井」~観世流~	多田富雄作・橋岡久馬作曲・作舞
		シテ 橋岡久馬

(放送予定につき変更の節はご理解下さい)

〔御来場歓迎〕協賛青

上 梅 田 邦 久 会

如月の舞台から 「宝生会」「観世会」「九皇会」

竹尾 邦太郎

「通小町」シテ十喜雄、八十三翁という。運ばなど円滑味を欠くが、それが却って小町(克実)に寄せる四位ノ少将の恋着のまどかしさを巧まずに表現して、芸功がきらりと光る。決を取って引き留む。と、背後から小町の袖を取り肩に手を掛ける型の、じわりと圧迫してくるような暗い情念。闇夜を通う、思ひ結めたムードを、難波運に見せる立廻。キリ前へはずはや今日も、と正中で頭取り、笛柱見上げて付む逆の感懐、などなどウツテランの滋味だった。なお気になったのは揚舞のこと。ツレが出る時、舞が面にかかって文字通りお先真暗。幕放れの大事、慎重でありたい。(51分)

「舞」シテ童子。フラスのイナシの歌もあるのに何故にマイナス、イメージの歌を口ずさんだ。

紅梅記

一 身辺雑事

能三番、本一

二月下旬雪降る。梅・椿・福寿草の花が雪をかぶってつまし。空晴れて、西側の屋根から雪がドサツと落ちる。久方振りにさく雪。座敷の難(ひいな)が寒そうであった。

同日十四日NHK文化センター情報報が新作能・無明の井(先月母)で紹介する。十二分位。構成分り難し。心臓を刺した女性(ツレ)が後になって数回アイ語りは抜けると拒否されるところに感銘。の言は入る。なお当日配布のパンフ(受贈)に載る作詞者多田富雄氏の「作者ノート」(長文)佳。

四月NHK放送予定。

同十六日映画「十戒」を見る。(東海テレビ)。信仰対家の激突(モーゼ)最近モセウ対フツツオ。乳香と没薬豊かなカナンの地に入らず終るモーゼの一生を画

「車僧」ワキ車僧、勝久、性奇矯に遠く、むしろ幕情。一方、山伏に衰したシテ太郎坊正直も、喧嘩売る粗野より神問答する知的な面が勝る。アイ清越天狗、弘之。車僧の心の隙に付け込みはするが、見所の反応も少なく、その場が何となく白々しく、「お笑いやれ車僧」、も空しく聞えた。

後シテは、大徳見物の鈍重な尊大さといったものが感じられず、相手を指伏せんとする荒々しい威迫感が伝わらない嫌いがあった。ハ行較べせんと突っつけられたワキが、「いかに汝幼くとも」と受けず、シテ、ワキ問答一部省略して、「おう車を打たば……」と受けるには飛躍があり、省略の必然性があるのか不審。一曲を通じて何が何か急いでいたのもシテに影響したであろう。切地謡い終るや問答入れ付祝言というのも、余韻余情を染しむ能にあっては不可解だった。(31分、2月3日、宝生会)

「鶴亀」シテ元昭。悠悠と歩を進める儀容が辺りを払い、尊堂を求め、世河で通ったけれど、今は正籠を期するようになった。それと似たところがある。

するとワキ欽也の奏から鶴(芳宏)亀(芳伸)が驚を取って舞台に入る。連舞は暢達で爽やか。鶴が袖を被るとき、亀は頸と袖を巻き上げるなど、調和の中の変化も鮮やか。それでは予も、とばかり、ハ君も御感のあまりにや、と壇を下りたシテは、ハ舞楽を奏して舞ひ給ふ、とサシで大きくヒラキながら進歩すると楽。ゆつたりとした袖振き、重々しく踏む足拍子には威厳と鷹揚があり大夫芸の風格そのもの。楽を舞上げ、キリを舞い続けようちに隣なく目にうつすらと涙が滲んだ。毎春初回には兄左近宗家と勤めてきた超満員の熱田神宮能楽舞臺に、今年からは立派に成長したその遺児達と勤める感懐だろうか。その感懐をふつ切るように、ハ君の胸も、と胸強く巻き上げたが、常座に戻って踏む拍子には、亡兄への懐いの文が揺蕩するよう胸が熱くなった。(49分)

「宝生」主命で宝鏡への品を求め、シテ太郎冠者、祐一、はほんとした空懸気が如何にも隔を求め、シテ太郎冠者、祐一、はほんとした空懸気が如何にも隔

能は二月十日観世会。初番鶴亀。観世元昭。鶴と亀は観世芳宏、芳伸阿氏が仲よく、このあと田村を勤める新築元昭氏と三兄弟が来る。この曲当代のみもの。晴れ晴れとして古風ながら新春を祝うにふさわし。清和氏は田村(替装束)を強襲と舞う。悪者を打ち払う姿は威あつて佳。小さくまとまらぬように祈りたい。いよいよ清和(観)。安明(巻)。英照(宝)。永盛(ひさのり、剛)四氏の観演が楽しみとなる。

付、楽屋で左近氏奥よりしげらく故人の思い出を語る。ふといつもの席に笑う左近氏が座しておられるような幻想にとらわれた。元昭・九郎右衛門阿氏同席。

三月に入って今年も春の能を迎える。二日名・能楽鑑賞会。三回目。浅春の能は野宮。近藤乾之助氏。久々。冷えた装束と開けたる位に接する。金剛殿氏の句い、観世鎮之丞氏の軍陣としぶきにくら

されそうで危うい。一方、口辺に微笑浮かべながらもはしこそうな目配りのスッパ弘之は、この田舎者を籠絡せしめはかかない。慎重であればあるだけ相手の術中に陥り、よかれと思つてしたことが裏目に出る被害者タイプの太郎冠者の弱気と、それを意に介さない狭量の主。松次郎との絡みもまた可。(30分)

「田村・替装束」シテ清和。亡父左近の後を継ぎ、観世流の大屋台骨を支えてゆかんの氣迫と、溢れんばかりの能への情熱が感じられて嬉しかった。

小舞で前は面喰。浅黄地帯目梅花文様縮着流に藤色水衣、美しく品のよい姿に凛気がある。名所教えに氣を取られていたシテが、ふと氣付く、「やあ」は満月の大きさに驚き、臨右左を見つめる視線にそれと悟らぬ、ハ春宵一刻値千金のワキ茂子郎との連舞は、風流を解する人同士の共鳴。へげに千金に代へじとは、とワキを誘い、へ今この時かや、と互いに歩み寄って手を繋ぐ態に目付柱へ

閑室。私の好みの人を失う。小田原在任のS氏が観世誌に寄せる追悼の辞を篇首して待つ。

本。冬島・林東助。俳句集。受贈。昭和五五前句から平成二二まで。表紙に狂言の絵あり。狂言をよむように前に出ると、ハ雨散と降りかかって、と矢先避けるかに面切動機など、へげに、と下層平(た)てる姿とあわせて載り(三流長者と推す。まこと風雅な名古屋人。昨年米寿を記念して物す。輪飾りや圓れて久しき井戸ながら(初句)

○梅満開十方世界月の中
○切火して舞ふ高砂や能はじめ
○老いこむを恐れひたすら夏行かな(以上初めの方の句)
○いま光るものに螢火母の声
○能入りの鎖鑰の大小花の冷え
○能合ふ顔といはれは日蓮日向
○練行衆はとけ散れてはれし日蓮
○赤き来にたちまち老師拾頭巾
○ひき来てはひとり往くなり露
○けしや(平成元二、修二会の句多し)

夏折冬扇とは申せなかな可耳福眼福多し。(野村広二)

出るころなど、ホモセクシヤリテイ気味の親密さである。ハ地主権理の花の色も殊なり、と大小前での面連は佳く、ハ天も花に酔へりや、は頭を取らない。

中入は、ハ田村堂の、と一ノ松で月ノ願、更に扉を横に押開く型をして三ノ松に行く。且停ると、地(九郎右衛門・完治・邦久ら)の返しの型に半端で入ったのが珍しかった。アイ門前の者は友彦。緊張気味で居語りも少少硬い。

後シテは唐冠・黒頭・面大天神。亀甲片輪車飛雲文様黄厚板に白地狩衣の袖を折込み闘斗に着け、正繁雲文様縮半切を穿く。背に剣を負い、唐扇構えた姿はきらびやかな中に威厳を見せて堂々の風格を漂わす。床几に掛ったクセからキリの型は目覚しく、乗り熱(なら)した馬上の雄姿を彷彿とさせる。就中、ハ石山寺を、と微妙に会釈する辺の余韻緯々。ハ酒田の長橋、とサシ廻して拍子強強と踏むや、ハ駒も足並や、と腰を引き中腰に構えた姿は将に、ハ勇むらん、の人馬一体の逸る氣持を鮮やかに見せた。ハ程に、頭を取って谷底を覗き山を仰ぎ、ハ天に響き地に滴ちて、と再び下を見て、ハ木木青山、とサシ廻し、ハ動揺せり、と面切った姿はキリ迄衰えず、ハ一度放せば、と立ち、千の矢先の矢面に立ちはただかのように前に出ると、ハ雨散と降りかかって、と矢先避けるかに面切動機など、へげに、と下層平(た)てる姿とあわせて載り(三流長者と推す。まこと風雅な名古屋人。昨年米寿を記念して物す。輪飾りや圓れて久しき井戸ながら(初句)

出版紹介

松本 武氏 著
「ザインとソレン」

名古屋金春会の松本武氏は、昭和二十七年から約三十四年間裁判官としてつとめ、六十二年退官されたが、民事裁判官として歩んだ道を自著「ザインとソレン」にある戦中派裁判官の軌跡としてこのほど出版した。

著者は民事裁判、回想記、印象記とともに、第二篇には「金春流能楽修業」として六十頁にわたる「型より入って型より出るといふこと」。「金春流との出会い」。「巴」演能記。「葵上」演能記。「安宅」記。「勧進帳」。「秀吉」家康と金春流。観世流。「梅村平史朗先生を偲ぶ」の各章で、

伏するまで、息も吐かせなかつた。自信に満ちた意欲的な舞台だった。嗚呼、後見は徳三・芳宏。(1時間16分、2月10日、観世会)

「美盛」シテ一。枯れた地味な茶系の装束に野性味のある尉の面振りが、後シテの、剛直な所謂古武士の骨柄を窺わせて雰囲気がある。詞、語共に明晰で筆措に自信があり、味一好調。中入のハ聆かして、で立って常座へ行く居たたまれぬ氣持や、ハ池の辺、と直して、髪洗われた処へ二、三歩出て佇立する辺りの感懐などの確かな表現力。

後シテは紺地拾法被に萌黄地半切。クリに床几に掛り、篠原合戦に際と消えた有様語の語りは氣力横溢。「白きこそ不審」は勇み足だがそれを押し切る勢いがあつた。「申しもあへず首を持ち」た。「申しもあへず首を持ち」と立つとトシと右膝着き、開いた扇を平らに首の重味感させると両手で掛け持つところなど、充実感を見せる。首洗いの場、ハ壘は流れ落ちて、と扇で右へ流れる型をしたり、ハ皆感涙、と常座でワキ正常見て面通フのは少々どろいだが、ハ首掻き切つて、と左に押さえ込んでぐつと力を籠めて引くのは、合戦で刃割れた刀を握らせ、ハ捨ててんげり、と小さく鋭くサツと袖を返したのは、鮮やかに捨て去る所作。この対照がよかった。キリで、ハ風に絡めると、正先で背伸びするの象徴的。ワキ勝久、学生時代、伊勢金春時代の二回にわたる金春流の出会い、自ら演ずること、吾見を探り求める切ない心持を丁寧に見せていただけに、訴えかける対象の不在が何となく残念。ハかやうに恥をば曝さじもの念、あら恨めし、を別の意味に聞いた。(1時間7分、2月17日、九皇会)

住所移転

橋岡 久馬氏

観世流・橋岡久馬氏は、橋岡会舞台を能楽堂に建直すことになり、このほど千葉市に移転した。なお能楽堂建設には、二、三年の年月を要することである。

〔新住所〕千葉市大椎(おほし)町あすみが丘三丁目一六六番二号
電話〇四七二(九四)九九五三
FAX〇四七二(九四)九九五三

五月雅日記

(117)

葵 祭

えと文 二井栄逸

五月は新鮮な新茶の香りが薫晴らしい。新茶は走り茶ともいってみんなが珍重する。

五月十五日には、京都の葵祭が行われる。上鴨神社(賀茂別雷神社)と、下鴨神社(賀茂御祖神社)の祭りを一見葵祭という。

葵祭の意味は、当日、祭員の挿頭花(かざし)に葵を用い、家々の軒にも葵をかけるしきたりから生れた名称である。

葵を用いる理由は、祭神の別雷神(わけいかづち)の生れ給うた御形山(みあれやま)に二葉の葵が生じたという由来によるもので、雷、地震の厄除けになるという。

雅びやかな牛車(ぎししや)を中心に、行列には、勅使以下、平

安朝の文武官や、下人の装束をつけた者が参加する。御所を出て、まず、下鴨神社へ渡り、ここで神事をすませ、賀茂堤を通って、上賀茂神社にゆく。この絢爛たる王朝風俗絵巻は群をなして美しい。

行列の主役は帝王代である。昔は天皇の皇女が帝王であったが、現在では市民のなかから選ばれ

昔は物見車も参加したようだが。物見車といえは、紫式部の書いた源氏物語が思い出される。

賀茂の祭の車争い、主(ぬし)は誰とも白濁の、所狭きまで立て並ぶる、物見車(ものみ



ぐるま)の横々に殊に時めく葵の上の、御車とて人を払い立ち騒ぎたる其中に……

と、光源氏の正妻葵上と、一時は源氏の君との仲を公然の秘密として、その愛を得ていた六条御息所とが、賀茂の祭の御祭の供奉の行列(光源氏も参加)を一目見ようと、葵上の方は、今を時めく光源氏の正妻として華やかな物見車

長良河原新能

6月1日 能「賀茂」狂言「舟ふな」

きたる六月一日(土)伊勢大橋の下流の桑名市の河原で「長良河原新能」が催される。

主催は河原で能を観る会、後援NHK津放送局。今回の企画の趣旨について主催者は「川と河原が歴史の中でもっていた様々な文化的な意味合いを思いかえし、そのような視点から現代の私たちが長良川とのかかわりをもつめかえず契機とした」と語っており、能の創成期のように本舞台の直後に橋がかりをつけ、広々とした場所を得て、御客席を舞台に取り囲むように設営が企画されている。

またパンフレット(座席券つき)が発行され、能の解説のほか長良川流域に残る古い文化をとりあげ

た内容で編集される。第一部は午後二時から謡曲同好会出演。第二部は午後六時三十分始。狂言「舟ふな」(野村又三郎、野村信行) 仕舞「放下僧」(加賀敏彦)「輪之段」(泉嘉夫)「綱之段」(泉嘉孝)「天鼓」(山田義高) 能「賀茂」(シテ久田徹二、前ツレ松山幸親、後ツレ前野都子、ワキ西村欽也、ワキツレ飯沼雅介、杉江元、笛・鹿取希世、小鼓・柳原富司忠、大鼓・筑紫一、太鼓・鬼頭喜太郎、後見・中川雅章、須部市、地謡・泉嘉夫、泉嘉孝、山田義高、祖父江修一、加賀敏彦、清沢一政、馬場信至、玉木孝男。

さらに同氏主宰の也留舞会、借謡会は六月二十三日、熱田神宮能楽殿で中部はじめ能、能本の会員も参加して、古稀祝賀の記念狂

6月15日梅鑑会 第2回定期能

梅鑑会は六月十五日、大阪能楽会館で本年度第2回定期能を開催する。能「小督」(シテ谷口澄夫、ツレ新保徹夫、森勝子)「雲雀山」(シテ仲村勇、ツレ仲村美智子)「山姥」(シテ梅若善高、ツレ梅若善久)狂言「因幡堂」(茂山忠三郎)

古稀祝賀記念会 和泉流狂言方・野村又三郎氏による「やるまい会」は五月十九日同氏の古稀祝賀記念として熱田神宮能楽殿で公演、「花子」「呼声」「首引」を上演。

さらには同氏主宰の也留舞会、借謡会は六月二十三日、熱田神宮能楽殿で中部はじめ能、能本の会員も参加して、古稀祝賀の記念狂

本紙連載の辻安一氏による「尾張藩の能の歴史」八その四は六月号に掲載いたします。

〔お知らせ〕

熱田神宮大祭奉納能

六月五日(水)午後一時開演

熱田神宮能楽殿

能組 (観世流)

今沢 美和 清沢 一政

竹生島

飯沼 欽也 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎 大野 誠

間 佐藤 友彦

仕 舞(金剛流)

笠之段 竹市 幸司 大管 義信 小川 忠三

仕 舞(金剛流)

一 調(喜多流)

丸 長田 麟 福井啓次郎

仕 舞(和泉流)

柿山伏 松田 高義 井上礼之助

仕 舞(観世流)

網之段 三村 恵子 加藤 春江 近藤 幸三 瀬戸 三津子

仕 舞(金春流)

是 界 伊藤 雄二 渡部 道三 前田 茂樹 杉浦 尚三

梅若盛義「二」 国和、地謡池内幸三郎ほか、後見梅若修二

ろみの会公演 梅若盛義後援会主催による「第三回ころみの会」は六月二十九日(土)東京・渋谷松涛の観世能楽堂で盛義師の「隅田川」を上演する。午後一時開演、番組は次のとおり。

能「高砂」(シテ梅若盛義、ツレ梅若善久、ワキ村瀬純、間・高橋明、笛・一嶋仙幸、小鼓・亀井俊一、大鼓・国川純、太鼓・金春

入場料S席八千円、A席六千円、B席四千円、自由席三千円。問い合わせ先は梅若盛義後援会 電話〇三三三七〇三三七七八。

〔要員券〕 当日券 八千円

附祝言 主催名 古屋観世会

通小町 梅田 邦久 観世 喜之 谷田宗二朗 河村総一郎 藤田六郎 藤

雨 月中入前橋岡 慈観

水無月 井上 喜久 本田 敬二 久田 敬二

鉄 輪 浦田 保利 武田 邦正 武田 邦正

千 鳥 佐藤 友彦 井上礼之助 後見 井上松次郎

賀 茂 西村 欽也 河村真之介 鬼頭 好信 杉江 元 後藤孝一郎 鹿取 希世

名古屋観世会定式能(三回)

六月九日(日)十二時半始

熱田神宮能楽殿

能組

ツレ久田 徹二 河村真之介 鬼頭 好信 天女 中川 雅章 後藤孝一郎 鹿取 希世 梅若 盛義 飯沼 欽也 西村 欽也 杉江 元 後藤孝一郎 鹿取 希世

間 井上 祐一 今村 嘉男 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

仕 舞 小島 一英 地謡 須部 一政 浦田 保利 後見 井上松次郎

紅梅記

一三、四月のこと

三月下旬から五月始めまで風邪引きて家に籠り勝ち、中能(四六)も観世会(第二回)にも行けず、八熱山Vの秘も染めず、五月一日熱山さんの舞楽神事(破王・落舞入らくそん、納曾利・なそりの独り舞Vほか)も空の背を麻子越しに見上げるばかりであった。

X X X

今年の中日は観世清和氏が松風を舞う。観世とこの曲は名古屋にゆかり深く、それを新家元が勤めることに大層意義があった。その首途(かど)を明るくパスする船の一つもあり、みられぬことに切腹願いの思いをした。観世会(四月)は屋島(片山慶次郎)と杜若(忍ノ舞、観世鎮之丞)の二番。春の特筆の一つ、心残りが大。そこももってきて、本年前期は茂山千五郎氏が五回六番の来演で眼福の上たるもの。それが二番(観世と夜音曲)見落す。このあとを染しみにしている。なお千之丞氏が病氣養生中の由、静養に留意された。

X X X

付、長い放送の終わった「京、ふたり」(NHK)に町内会長が出演の千之丞氏が終りの結婚式で高砂を踊る。すばらしい。また千五郎氏孫の逸平君は毎回登場、画面の進行を豊かにしていた。朝日新聞

計

幸清流小鼓家

幸円次郎氏

幸清流小鼓十四世宗家、幸円次郎氏は四月十日午前三時二分、心不全のため小平市の学園西町病院で逝去された。享年八十歳。葬儀は長男幸次郎氏、東京・台東区下谷の真源寺で執り行われた。喪主は長男幸次郎氏。故幸円次郎氏は明治四十年、東京に生まれる。六歳の頃から名古屋の小鼓方・田鍋惣太郎氏に師事。東京上野音楽学校卒業、大正十五

現代人物誌(夕刊、写真入り)に八二世紀の狂言担う云々Vの見出しで紹介さる。うれし。

X X X

さて三月のこと。十七日武田宗治郎・太加志道善能。能主志房(ゆきよき)。宗治郎氏は大正八年一調一管小智を勤める(小田嶋惣太郎、幸清流次郎追善、呉服町)。私の中学(明倫)の友人四・五人に昭和十四年頃太加志氏門下の林原氏に九番習まで習いやがて入隊して行った。

X X X

当日はまず通小町・清和と宗和。切りでワキに向い並んで合掌する姿美し。真ん中田川・志房。充実。これまた切りで、塚を上から下へふれていかず、シテ常座近くから舞臺と立ちつくす横顔、いや全身に万の悲しみと諦めを汲みとる。子方よし。

X X X

三番目道成寺・祖父江修一。上背のある同氏、大きく足を出して乱拍子を踏む。二十分を越す。近頃道成寺は鮮烈さでなく甚まで圧して行く。鮮烈さは姿上が上。時代の傾向か。大きな舞臺であった。狂言は無布無経・山本末次郎で野郎調々が佳。これも以前は独特の超然と教化をしたが、この頃は分り易い。退席せず。

X X X

二十一日、名古屋狂言共同社成立百周年記念祝賀の狂言会。またと「山あり谷あり」の百年。そのうち私も五十年近く、いや戦前も少しくその狂言会に接する。おだやかで品がよい。当日は東西の録々たる狂言師による六番と共同

X X X

年、先代宗家義太郎の後をついで宗家となる。日本能楽会会員。能楽協会常議員、東京能楽子科養成会講師を歴任、昭和四十九年紫綬褒章受章。

X X X

梅若万三郎氏 観世流シテ方、重要無形文化財保持者、梅若万三郎氏は四月二十一日午後六時三十分、肺がんのため東京・新宿区の東京医科大学病院で逝去された。享年八十三歳。告別式は二十四日正午から東京都品川区南品川五十一一六一二の海受寺で執り行われた。喪主は長男・万紀夫氏。

社曾願・結びの二番の二部制であった。現在の狂言界の大勢を知るに足ることもできた。

X X X

怪妙の布無経(野村万之丞)・格調の鶴牛(大蔵弥右衛門)・天衣無経とおかしみの止助方角(茂山千五郎と茂山忠三郎、以上第一部)、著実な鶴八提(和泉元秀、元弥の水車さきい)、人情の機微をえぐる右近左近(八おとさこV忠三郎・千五郎)・活潑な棒縛(野村万作・野村又三郎、以上第二部)。現在の二極品を並べる。なかでも忠三郎の夫役特に佳。千五郎氏には最近枯淡の味がみられ、その持ち味に好印象を感ずる。そして、末広(松・祐一・弘)の風格、和の明るい花折(礼・友はか)が名古屋狂言界の百年の集積をみせた。

X X X

和を宗(むね)とする共同社将来の多幸を祈る。付、共同社の最初から昭和四十二年までの推移は、かつて共同社発行「狂言」百号記念特集号(四二年九月)にくわし、貴重。名市民会館にて、盛會。

X X X

さて四月二十七日、ようやく八熱田Vへ。杜の緑が目についた。復曲の「鶴羽」(うのは)をみる。シテ・大隈文蔵。世阿弥原作、後世後半に手が入った由。アイのことも新しく作られたとのこと。千五郎氏作・所演・風流のカタチをとる(かつての京都東本願寺の「親鸞」同様おもしろい)。これが長い間行われなかつたのか考えてみたが、うまく解けない。

X X X

故梅若万三郎氏は、明治四十一年三月、先代万三郎の四男に生まれる。昭和二十三年十三世万三郎を襲名。三十二年重要無形文化財保持者認定。四十二年デンマークなど欧州七カ国を歴訪し演能、海外での公演は五十六年までに合計七回、十七カ国におよび能の紹介につとめた。スウェーデンでは、同国演劇部門最高のカーネーション勲章を受章している。

X X X

梅若万三郎氏 観世流シテ方、重要無形文化財保持者、梅若万三郎氏は四月二十一日午後六時三十分、肺がんのため東京・新宿区の東京医科大学病院で逝去された。享年八十三歳。告別式は二十四日正午から東京都品川区南品川五十一一六一二の海受寺で執り行われた。喪主は長男・万紀夫氏。

X X X

桜間金太郎氏 金春流シテ方、桜間金太郎氏(本名龍馬)は、三月十七日午後

前半ワキ正へ一登台を出しその上に背の高い産屋を置く。其産屋は赤い布で(鳥の、鶴か、白いカタチを抜く)掩われるが、松の方はない。これがシテの動きを制約する。「山嵐」のあたりよし。後シテの出までみ、心をあとに残す。ところで満千の宝珠を踏える所で結んでは、そのあとの「上人ハワキ心僧都Vの直ぐなる心の真如の宝」の盛が気にかかる。ロマンの味ありわり易い調。立派なパンフが配られる。大阪・名古屋・福岡で。

X X X

この日ももう一つ馳走があった。初番の観世栄夫(シテ)・同鏡之丞(ツレ)出演の通小町である。まさに一期一会の能。シテはげしくまたふくらみあり、一ノ松の動かぬ姿佳。前ツレの面は美女(両氏より教わる)、後は若い女面で紅入り。定家と逆のようにも。同シテの感が強い。後ツレが短かい調の中で、立ってシテと並ぶゆとりまことに見事。ワキ生放哉君は大きな調にいろいろのしぐさを入れる。成長(櫻風子方)大般若(一当曲)を喜ぶ。

X X X

二九日「無明の井」(橋岡久馬、佳)・受贈の本のことは次号に。(野村正二)

X X X

七時五十分、心不全のため東京千代田区富士見二一四の自宅で逝去された。享年七十五歳。告別式は三月二十日午後一時から自宅で執り行われた。喪主は弟美子夫人。

X X X

故桜間氏は、先代金太郎(桜間弓川)の長男に生まれた。桜間家は能本・細川藩のお抱え能楽師で祖父は明治三名人とうたわれた桜間馬氏。六歳で初舞台、昭和三十六年重要無形文化財総合指定。四十六年金春流として初の海外公演団長としてアメリカ、カナダなどで上演、五十九年芸術祭優秀賞受賞。昭和六十二年勲五等双光旭日章受章。

X X X

桜間金太郎氏 金春流シテ方、桜間金太郎氏(本名龍馬)は、三月十七日午後

X X X

桜間金太郎氏 金春流シテ方、桜間金太郎氏(本名龍馬)は、三月十七日午後

叶石会・一謡会大会

六月十五日(土)午前十時始

Table listing performers and their roles for the Ueshi Kai and Ichuikai Festival. Columns include names like 吉野天人, 小袖曾我, 三井寺, etc., and their respective roles and supporting actors.

名古屋宝生会定式能(第35期)

六月十六日(日)午後一時始

Table listing performers and their roles for the Nagoya Hojukai Formal Noh (35th session). Columns include names like 能満, 能半, 能藤, etc., and their respective roles and supporting actors.

平成3年5月・6月放送予定 FM能楽鑑賞(午前8時~9時) (5月) 19日(日)宝生流「船橋」金井 章郎 26日(日)観世流「歌占」杉浦 元三 (6月) 2日(日)観世流「社若」佐藤 恭之助 9日(日)観世流「夜討」藤 乾之助 16日(日)宝生流「声討」西村 智万孝 23日(日)観世流「鳥追」大野 善 30日(日)狂言・和泉流「真流」大蔵流「宝の槌」善 教育テレビ(毎週土曜日午後7時) <<日本の伝統芸能>>能・狂言鑑賞入門Ⅱ 6月 1日 能「絵馬」ゲスト 喜多生 六平 8日 能「隅田川」ゲスト 宝生 之丞 15日 能「井筒」ゲスト 観世 万之丞 22日 狂言「茸」ゲスト 野山 千之丞 29日 狂言「二人大名」ゲスト 山中 玲子 (放送予定につき変更の節はご理解下さい)

野村又三郎師古稀祝賀記念
也留舞会大 会

六月二十三日(日)午前十一時始

三番叟

熊野道者 伊藤 菊枝
小舞 雪 丸山 ナツ
貝 尽 龍岩外喜恵
三宅 千代 高義
大坂河村松一郎
脇取 後藤孝一郎 笛 鹿取 希世
脇取 後藤孝一郎 脇取 福井 良治

千才松田 高義
大坂河村松一郎
脇取 後藤孝一郎
脇取 福井 良治

昆布亮

大名田馬 晴雄 昆布亮 山内 理至
鍛冶 方山崎 慎也 都 方 奥津健太郎

靑薬煉

鍛冶 方山崎 慎也 都 方 奥津健太郎
スッパ 加藤志津子 田舎者 松田 高義

小舞

鍛冶 方山崎 慎也 都 方 奥津健太郎
スッパ 加藤志津子 田舎者 松田 高義

雷

宇治の 雷 村手 桑 匠 師村手 塚史
よしの 葉 山田 良子
花の 袖 桜井 晴子
小舞 三人長者 桑原まつ江
名 取 川 高橋 貞
通 円 平山みよ子
祐 善 堀田 淑子
独吟 高 砂 桐谷 弘充
高 砂 水野 知子
草子 洗小町 山川 秀男

佐渡狐

佐渡ノ 庄司 武 越後ノ 富田 雅子
百姓 百姓 葵 野村 信行

仕舞

小 綴 治 柴田 鏡子
五 之 段 三宅 千生
之 之 段 林 袖加子
之 之 段 田中 芳子

千鳥

太郎冠者 種村とし江 主 富田 雅子
福之神 福之神 徳田 文三 参詣人 野口 隆行
福雷 之 神 地謡 野村又三郎
参詣人 奥津健太郎
松田 高義

祝言

主 信也 留 舞 会
主 信也 留 舞 会

御来場歓迎

特別参加 菊池 みのる 会
指導 野村 又三郎 会
指導 野村 又三郎 会

卯月の舞台から
観世会
能の会二十周年記念公演

竹尾 邦太郎

「墨島」シテ慶次郎。初同、
へ都と聞けば懐かしや、と面ヲラ
シ気味に思ひを遠く都へ馳せる風
情は、やがて涙に咽びシオルが、
一介の漁翁に似ぬ人品を窺わせる
のは慶次郎の資性である。そして
この気鬱な時を過るるに墨島の
願平合戦譚を所望するワキ旅僧の
気配りもさりげ無く、すつと気分
を交えて飲也器量を見せる。「易
き間の事」とすらすらと語りに入
るタイミングもよく、次第に己が
話に没入してゆく中、「着たる兜
の綴を掴んで」拳にぐつと力が入
る辺りや、地(九郎右衛門・邦久
ら)となつて引きちぎる型に並々
ならぬ闘志を見せるが、へ慶の波
松風ばかりの、とワキ正に出て薄
く面遣いとすると、我に返つたよ
うに、へ音淋しくぞ、とワキに向
き直つて、へなりにける、と下居
するところには何か虚脱感を漂わ
せ、慶次郎、シテの心象風景の在
り様を的確に描写する。中入は、
ワキにアシライ立立つと、居立つ
たまま、へ我が名や名宣らん、と
言い放つかの地で直シ、へたとひ、
と立つと、へ夢はし覚まし給ふな
よ、の返しに題を返して地切に橋
懸に入つた。

「アイは松本薫。垣々と涙みなく
一種無機質な印象の語り、修羅
の合戦譚にはいっそ好ましい。後
シテは紫地拾法被・紺地立派文様
の涼し気な品がある。床几ではは
とんど何もせず、僅かにサン地、
へ判官これを開し召し、とワキに
アシライ、直してクセ、へ無念の
次第なるべし、と微かにクモリ、
へさてその外の人までも、とワキ
にアシラウだけ。どしり構え、
威あつて揺からず、である。へ智
者は感はず、とすつと立つた姿
が美しく、拍子一つ強く踏んでの
カケリは、矢叫びの音の響動に勇
躍する気分。へ敵は誰ぞ、以下地

との掛合から切地へきびきびと歯
切れよく、清爽の一番だった。
(1時間41分)

「裏書曲」シテ太郎冠者・千
五郎。客のある度に謡を強要され
ては堪らん、と断る口裏の酒を、
謡聞きたさに勤めるアト主・千吉
固より好きな酒の誘惑についつい
相好を崩して、「これはまた例の
大盃が出ました」と舌舐りせん
ばかりの千五郎。小気味のよい飲
みっぷりにちよびり早いといつ
ても過言でない。挙句、妻の膝
枕を盾に逃げんとするが、主が代
ると言えはそれまで。醒めてい
ればいけない、と気を張つて横
臥のまま謡つた「小原木」も忘れ
ず、共に立居の分別つきかたて
「地主の桜」では興に乗りまか
つて小舞まで舞い出す傍若無人は千
五郎の独演場。和泉流では見ない
立ち上つて舞うところが珍しく、
「声もやう出て舞も面白かつた
は」、の千吉のほのほとした味
もよかつた。(16分)

「杜若・恋ノ舞」シテ鉄之丞。
面小面・襟白二・白摺袴(七宝繁
文様)。赤淡黄銀金段唐織(撫子
藤文様)。物着で唐織を脱ぐため
下に縫箔を腰巻に着込んでいたが
すつきりと着こなしてそれを感じ
させない。小舞「恋ノ舞」では地
次第から直ぐへ花冠に蝶舞片々
たる金、となる由であるが、常の
イロエが抜けるだけであつた。そ
れだけに鉄之丞の思ひの深さも知
れるが、「恋ノ舞」とは言ひ条、
宝生流の「沢辺ノ舞」を踏襲した
よう、物着の初冠にも心葉は梅
に非ず藤の花をかざしたり、舞の
後、へ昔男の名を留めて、の後で
イロエが入つたりした。

さて、前シテの呼掛は、既に幕
放れし幕を背にしてのもの、幕
内でないのが忽然と現れた趣で、
杜若の精を仄めかす。ワキ旅僧・
隆之亮との問答を進めながら二ノ
松に寄り、「色も一入濃紫の」、

と句懸しに眺めるところには杜
若の群生が見えるようである。初
同、へ在原の、と一足退き、へ
(沢辺の水の)浅からず、と右ウ
ケ、へ契りし人(も)、と直シ数
歩出るところにはシテの心の昂り
がある。

物着に浅黄長絹(花梨斗藤浦公
英文様)。白地縫箔(菊梅楓ノ丸
文様)。腰巻・初冠(巻老老懸日蔭
ノ糸心葉)。真ノ太刀を佩く。ク
セの中、へ沢辺に句へ杜若、と面
遣い、へ光も乱れて飛ぶ螢の、と
テラシて僅かに面遣フ嗅覚と視覚
の機微に妙味を見せ、舞の前、へ
御上に、と一足詰めて、へ鶯飛ぶ、
の面遣いは舞い立つ飛翔への憧れ
であろう。舞の途中一ノ松に抜け
て勾欄に寄り、右袖被いて腰子の
静まったところで水鏡しげしげと
見る辺りは葉平ナルシストの面目
躍如。キリ前、地の、へ色は何れ、
と面遣いながら正中から前に入る
と、へ花苗浦、と右、へ梢に、と
上、へ鳴くは、と下、を見て、へ
緋の唐衣、はあつきり左右打込ミ
で、さりと左袖返すとキリ地に
なつた。少々意外だったが抒情詩
の美しさを表現するのに、袖を抱
擁する濃艶な型は無用ということ
であろうか。(1時間30分・4月
14日・観世会)

「通小町・雨夜ノ伝」ツレ里
女・鉄之丞。襟白淡黄・白摺袴・
段替り無紅厚被・浅黄緋水衣(肩
上)。面は老女で「雨宿」の前ツ
レのような出立。左手に木ノ葉入
籠を、右手に扇を持つ。山里の老
女らしい元氣な足腰、振りのある
声と謙虚な舉措、これが本来の姿
であろう。舞合によく融けこんで
いること若い里女の比ではなく、
木ノ葉の知識も老女ならではの思
わせる。木ノ葉の講釈について口が
軽くなった老女の、虚を衝くかに、
とさうであなたは「如何なる人」
とさりげなく問うワキ僧・欣哉の
機微。返事を地(四郎・信之ら)
に強わす、へかき消すやうに、と
二度小廻りして返しを聞くと、送
り笛(六郎兵衛)で橋懸を退くあ
たり、冷えた余韻があつた。

後ツレは襟白赤・白摺袴・赤地
唐織。シテは柴夫。黒頭・瘦男、
濃い黒に紛う緑の大口に白緋水衣
薄色の被衣をかすく。被衣を取つ

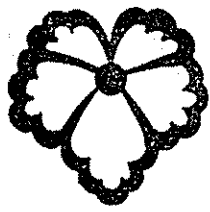
てからのシテの執念は強烈。へ煩
惱の犬、と後座に来ると、へ打た
ると離れ、と腰を入れて構え
た姿は肩に肩怒らした犬のそれに
見え、ツレの背後に寄つて右袖取
り、左手を肩に掛ける、へ袂を取
つて引き留むる、には荒い息遣い
が聞こえるかだった。立廻りは空
を両手に掲げ、それを押し潰さん
ばかりに目付柱に突き当たると、左
へ常座に廻り込み、笠を落して手
探りし、探し当てる右手で拾つ
て立ち、へあつた暗の夜や、と笠で
面を覆つた。暗濁とした雰囲気
の中、暗い情熱が風く伝わつてく
る。少々アクの強い柴夫の四位・少将
だった。(1時間15分)

「梅舞」太郎冠者・あきら、
次郎冠者・真吾、びつたり息の合
つた演技は悪さも正当化させてし
まう程。不自由な身体で酒を飲む
ところなど、思わず身を乗り出し
せる。三公演した「能の会」で太
郎冠者と三度自動めるとあつて、
あきらの関連自在な科白まわしが
特に印象に残る。内証にしていた
棒術のことを、主・千五郎に告げ
口されて咄める次郎冠者に、「で
も申し上げた」、とぬけぬけ言っ
て退ける涼し気な素振り、その
間(ま)が絶妙。しかし太郎冠者
も後ろ手に縛られてみれば、後は
退屈後ぎに考える事は酒を飲む事
だけ。二人の一念には主を虚仮
(こけ)にする気持はさらさら無
く、主の方も、へ月は一つ影は二
つ、と謡い興じる二人の背後から、
真剣味がよい。

後場は小宮を引き、高坪の二珠
は元の小宮際に置き直す。後シテ
は輪冠龍戴・泥顔・黒垂・金鱗箔
・赤地舞衣(金鱗散シ火燧太鼓文
様)・壺折・半切(金雲立派文様)
・紫地腰帯(雲文様)。一ノ松で
ワキを指し合撃してサシ謡。舞合
に出て地との掛合から宝珠に合撃
すると早舞になつた。舞上げ、地
(咲夫・文鏡ら)の裡に千珠率持
して台に上ると面切つて左足舞合
に下し、腰を屈めて千珠を舞合に
置くと前を見、へ千里、と立ち、
左右袖を返して台を下りると正中
で、左袖返すと面切つて球を見込
み、袖を捻ねると再び流し舞合に
入つて破ノ舞になつた。途中スミ
と膝を着くと千珠を拾ひ、再び高
坪に戻すと、へさてまた満珠を潮
干に置けば、と満珠の香になつ
た。

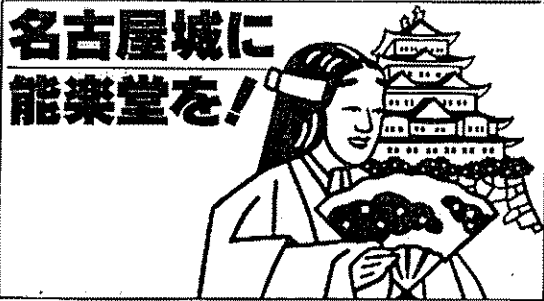
キリは正中下居してワキに合撃
すると、へ授け給へや、と立ち、
一ノ松に抜けて、へ願ひも深き、
と拍子踏んで左袖巻くと沈み、へ
入りける、と立つて拍子二つ踏
みトメた。

細部に神経がよく行き届き、確
りした手順と手順の良きには感
服。あのスミと一畳台の狭い空間
に、千珠を沈めたり拾つたり所
作に全く窮屈を感じさせず、のび
のびと流麗に舞つて爽快だった。
壺折は六郎兵衛・源次郎・孝・惣
右衛門、後見は鉄之丞・義滋。
(1時間34分・4月27日、能の会)



料理
あつた
菜
軒

本 店 熱田区神戸町五〇三 電話(671) 8686-18
神宮東門店 熱田区神宮一-1-1 電話(683) 5598-09
中 店 松坂屋本店10階 電話(284) 3825
売 店 松坂屋本店地下1階 電話(284) 3761



名古屋城に 能楽堂を!

能楽の友

発行 能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

一部 90円

名古屋城夏まつり新能

8月2日から能上演

能楽協会名古屋支部協力

名古屋城の天守閣を夜間に公開し、多彩なイベントがくりひろげられる「名古屋城夏まつり」は、本年八月二日から十四日まで開催、能楽界も積極的な参加で、伝統美の新能が催される。

毎年話題をよぶ能の上演は、八月二日の初日から十四日の最終日まで全期間にわたり上演、市民に能を楽しんでもらう機会として関心が高まっている。

主催は名古屋城夏まつり実行委員会、企画・能と狂言に親しむ会(梅田邦久師、藤田六郎兵衛師)協力・能楽協会名古屋支部。

前売りは大人五百円(当日六百)

演能日程は次のとおり。

八月二日(金) 能「楊貴妃」(シテ近藤幸江)

八月三日(土) 学生能楽連盟発表会

八月四日(日) 市民参加舞会

八月五日(月) 能「葵上」(シテ清沢一政、ツレ加賀敏彦)

八月六日(火) 能「三輪」

八月七日(水) 能「清経」(シテ松山幸親、ツレ瀬戸三津子)

八月八日(木) 能「半部」(シテ前野郁子)

八月九日(金) 能「杜若」(シテ今沢美和)

八月十日(土) 狂言世留舞会

八月十一日(日) 能「融」(シテ久田徹二)

八月十二日(月) 狂言の夕(佐藤友彦社中狂言会)

八月十三日(火) 能「安達原」(シテ高橋肇一)

八月十四日(水) 能「羽衣」(シテ須藤甫)

演能にあたって能面、稚子、装束などの解説が行われる。

入場料(自由席) 当日券四千円、前売券三千円(名古屋市瑞穂区州山町3-17 学生会舎「能を楽しむ会」名古屋事務局 TEL(052)701-0793 問合わせ「能を楽しむ会」名古屋事務局 (〒467) 名古屋瑞穂区州山町3-17 TEL(052)852-1334

青少年芸術劇場 8月3日 佐屋町で上演

能楽協会主催による平成三年度の「青少年芸術劇場」は、本年は宝生流と大蔵流で埼玉、富山、長野、愛知で開催される。

能は「黒塚」白頭(シテ高橋肇、ワキ野口敦弘)狂言「神鳴」(善竹十郎)の上演。

富山では八月二日(金) 砺波市文化会館、愛知は八月三日(土) 海部郡佐屋町中央公民館でいずれも午後二時開演。

喜多六平太氏は大正十三年十二

紫綬褒章受章

学園、芸術などの文化的分野ですぐれた業績のあった功労者に贈られる本年度の紫綬褒章が四月二十九日発表され、能楽界では喜多流十六世宗家・喜多六平太氏が受章された。

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

〔6月〕

23日(日) 狂言也留舞会 (来場歓迎)

29日(土) 能名古屋金 (有料)(番組①面)

30日(日) 能名古屋金 (有料)(番組①面)

〔7月〕

7日(日) 九曲会定期能 (有料)(番組②面)

12日(金) 妙かた能 (来場歓迎)

13日(土) 野村四郎名古屋公演 (有料)(番組②面)

14日(日) 朝日狂言会 (有料)(番組②面)

21日(日) 観世会 (有料)(番組②面)

〔8月〕

3日(土) 名古屋新能 (神楽殿前)(有料)

4日(日) 青陽能 (来場歓迎)

11日(日) 官庁楽団宝生会大会 (来場歓迎)

18日(日) 司宝大会 (来場歓迎)

24日(土) 衣奨正後援会 (有料)

〔9月〕

1日(日) 大衆能 (有料)

7日(土) 長生会能 (有料)

8日(日) 観世能 (有料)

14日(土) 能名古屋金 (有料)

15日(日) 能名古屋金 (有料)

21日(土) 能名古屋金 (有料)

22日(日) 能名古屋金 (来場歓迎)

23日(祝) 能名古屋金 (来場歓迎)

27日(金) 中日文化センター能発表会 (来場歓迎)

28日(土) 中日文化センター能発表会 (来場歓迎)

29日(日) 能名古屋金 (来場歓迎)

(演能変更の際はご了承下さい)

第8回能を楽しむ会名古屋公演

六月二十九日(土) 午後六時始

熱田神宮能楽殿

仕舞八島 松野共慈

仕舞若島 金剛永澄

仕舞鼓 豊嶋三千春

能小鍛冶 福王茂十郎

能小鍛冶 柳原富司志

能小鍛冶 藤田六郎兵衛

能小鍛冶 佐藤友彦

能小鍛冶 宇高通成

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

能小鍛冶 宇高通成後援会

名古屋金春流友会 番組

六月三十日(日) 九時始

熱田神宮能楽殿

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

仕舞高砂 柴田正治

名古屋金春能 特別公演

六月三十日(日) 午後二時始

熱田神宮能楽殿

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

仕舞丸川 松本弘子

入場券 六千円(自由席) 学生券 四千円

問い合わせ 申込先 熱田神宮能楽殿(052)216821(七五二)

名古屋金春会事務局(052)219351(二七二)

名古屋金春会事務局(052)219351(二七二)

名古屋金春会事務局(052)219351(二七二)

五月雅日記

(118)

玉簾

えと文 二井栄逸

去年の四月の日記に梨花一枝と題して揚貴妃をかいたことを覚えて

今年のはあつぱな花は散ってしまつたが、薄べにをさしたすき通るような若葉を見ていると、やはり揚貴妃のことが思い出されてくる。それというは、来年のカレンダーの中に揚貴妃を組み入れてみようと思つたからである。

私は写生帳を各曲別に整理しているのですが、昔からのスケッチをさがし出すのはいと簡単である。

中でも昭和五十二年十月、能に親しむ会で、久々に揚貴妃の小舞を

飯田町の喜多舞台が震災で焼失前、第十四世平太先生は、よくこの小舞をお舞いになつていられた。

この図は第十五世の家系であつた喜多先生のお舞いである。作り物の宮は、喜多では一畳台はなく、舞台直接に置かれる。

この小舞では、ワキのことは、「事の由をもうかがわばやと存じ候」が終ると同時に、後見によつて引返しを下ろされる。

宮の正面と両側には、美しい葛帯が各々十一本ずつ吊り下げられ、ギンシリと隙間なくすだれのように下る。

そのすだれの中からあら物様の宮中やな、昔は驪山の春の園に、共に眺めし花の色、と、シテの謡がきこえてくる。

シテは「梨花一枝、雨をおびたる粧」で、床几を立て、左右の両手ですだれを前へ押しつけて、少しかがみながら宮を出て、作り



宝生流の海外公演

欧州六カ国を訪問

宝生流は六月十日から二十七日まで欧州六カ国で公演、中部能楽界から福井啓次郎、寛敏一、鬼頭喜太郎の諸師が参加している。

後援：外務省、国際交流基金、東京都平和交流基金。

演目：狂言「柿山伏」能「羽衣」公演地は、オーストラリア(ウイン)、トルコ(イスタンブール、アンカラ)ハンガリー(ブダペスト)ブルガリア(ソフィア)ベルギー(ブリュッセル)ポーランド(ワルシャワ)

訪欧能楽団は、本團英孝(代表)金井章、三川淳雄、小林与志郎、辰巳孝門、福井啓次郎、寛敏一、鬼頭喜太郎、吉野晴明、敷俊彦、高橋右任、村瀬純、山本則俊、山本泰太郎、学術顧問、エドワード・サイデンステッカーの諸氏はか

総勢十九名。

八月三日(土)午後六時開演。会場：熱田神社神楽殿前。

八月四日(日)午後七時開演。会場：天王川公園特設舞台(雨天の場合は佐屋町中央公民館)

能・金春流「能」(本田光洋)

岩倉新能

七月二十七日(土)午後六時半開演。会場：岩倉市お祭広場(岩倉市下本町)、来場歓迎

狂言「蚊相撲」(井上松次郎)能「土蜘蛛」(梅田邦久)

問い合わせ先：岩倉市教育委員会社会教育課。

名古屋新能

八月三日(土)午後六時開演。会場：熱田神社神楽殿前。

能「嵐山」(須部甫)半能「井筒」(泉嘉夫)能「黒塚」(玉井博結)前売二千円(詳細次号)

問い合わせ先：四日市市文化会館(TEL0593-544501)

天王新能

八月四日(日)午後七時開演。会場：天王川公園特設舞台(雨天の場合は佐屋町中央公民館)

能・金春流「能」(本田光洋)

問い合わせ先：四日市市文化会館(TEL0593-544501)

東海各地の新能

狂言「昆布売」(佐藤友彦)

能・親世流「葵上」(泉嘉夫)前売二千円(当日二千五百円)

一宮新能 一宮新能実行委員会主催の第三回「一宮新能」は八月十八日(日)真清田神社境内で催される。今回は一宮市制七十周年記念としての演能で、愛知県教委、一宮市、一宮市教委、一宮市文化団体、中日新聞後援。

狂言「通盛」(泉嘉夫)「蟬丸」(久田徹三)

道行(加賀敏彦)「松虫」(キリ)

能「竹生島」(前シテ下田雄三、後シテ奥善助、ツレ瀬戸三津子)

舞臺子「松風」(梅田邦久)狂言「清水」(野村又三郎、野村信行)

半能「天鼓」(シテ橋岡慈観)

鑑賞券：前売一般二千円(当日)

問い合わせ先：四日市市文化会館(TEL0593-544501)

要整理券、問い合わせは岐阜市教委(058-2165141)

名古屋親世九臈会定期能(第三回)

七月七日(日)午前十一時始

素田井 簡 小林喜久 高橋 一

能女 加藤 保彦 西村 敏也 鬼頭 英二 福井啓次郎 鹿取 好信

能 後見 観世 喜久 地謡 高木美智子 坂中 真和久

狂言 伯母ヶ酒 野村又三郎 井上礼之助 後見 井上松次郎

仕舞 春日龍神 中所 宜夫 盛クセ 高木美智子

能 大 雨 班 女 月 前 五木田武計 地謡 坂中 真和久

能 安 達 原 高安 勝久 後藤 孝一 助川 龍夫

附 祝 言 457 名古屋南区元塩町一丁目一七(加藤保彦方) TEL052(六一)三六五九

〔要員券〕 当日券 四千元 主催事務所 名古屋親世九臈会

第8回野村四郎名古屋公演 能「自然居士」を観る会

七月十三日(土)午後二時開演

狂言 佐渡 狐 野村又三郎 松田 高義 後見 井上礼之助

仕舞 兼 平 藤井 完治

能 阿 錦 木クセ 山中 義滋 地謡 上野 朝久 杉浦 豊彦

能 自然居士 宝生 閑 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛

能 後見 井上 裕久 地謡 杉浦 保治 上野 朝久 藤田 六郎兵衛

能 山 中 雅志 野村 四郎

能 野 野 宮 大槻 文蔵 地謡 上野 朝久 杉浦 豊彦

能 阿 木クセ 山中 義滋 地謡 上野 朝久 杉浦 豊彦

能 大 雨 班 女 月 前 五木田武計 地謡 坂中 真和久

能 安 達 原 高安 勝久 後藤 孝一 助川 龍夫

能 大 雨 班 女 月 前 五木田武計 地謡 坂中 真和久

能 安 達 原 高安 勝久 後藤 孝一 助川 龍夫

能 大 雨 班 女 月 前 五木田武計 地謡 坂中 真和久

能 安 達 原 高安 勝久 後藤 孝一 助川 龍夫

能 大 雨 班 女 月 前 五木田武計 地謡 坂中 真和久

能 安 達 原 高安 勝久 後藤 孝一 助川 龍夫

平成3年6月・7月・8月放送予定

FM能楽鑑賞(午前8時~9時)	
〔6月〕	23日(日) 観世流「鳥追舟」大野善
30日(日) 狂言「和泉流」大蔵流「宝の箱」	
〔7月〕	7日(日) 観世流「通草紙」五今藤金
14日(日) 観世流「草紙」五今藤金	
21日(日) 観世流「玄流」	
28日(日) 観世流「流」	
〔8月〕	4日(日) 観世流「恋重荷」坂中 真和久
11日(日) 観世流「半流」	
18日(日) 観世流「流」	
25日(日) 観世流「流」	
31日(日) 観世流「流」	
教育テレビ(毎週土曜日午後7時)	6月22日 狂言「葺」ゲスト 野村 茂
29日 狂言「二人大名」ゲスト 野村 茂	

(放送予定につき変更の際はご理解下さい)

第33回朝日狂言会

七月十四日(日)午後一時三十分始

熱田 神 宮 能 楽 殿

文 蔵 大野 弘之 井上松次郎

地 蔵 大蔵 彌右衛門 大蔵 吉次郎

瘦 松 和泉 元秀 和泉 元彌

鳴 子 井上 祐一 井上禮之助

主催 朝日新聞 後援 名古屋テレビ

取扱所 各出演者事務所・朝日新聞企画部

事務所 名古屋市中区橋下町一丁目七十五井上 電話一四三〇

三代藩主綱誠(つなのぶ)の治世は、元禄六年(一六九三)から、元禄十二年(一六九九)までの九年間である。

この時期は、まだ、能狂と言われる五代將軍綱吉の時代が続いている。その影響からか、綱誠も二代藩主光友に劣らず、能に強い関心を持っていたようである。

元禄七年七月には、綱誠の家督を嗣いで、家中の諸士、町人までも見物することを許される盛大な能が演じられる。夏の暑い盛り、白州に並んで座って見物していた町人達は、暑い陽射しに、息も絶えしたような苦しみを感じて見物していたと、『綱誠日記』に記されている。

尾張藩の能の歴史(四)

辻 宏一

太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛半六

狂言 和泉 飛越 吉兵衛 末ひろ

御田 又三郎 こんくわい和泉

人の刀を間違えてきて掃り、騒動になったことが記されている。七月三日三回目は、次のようになっている。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

源三郎 庄六と云ったワキ役者が出演している。合計八名である。

夏の素謡会

七月二十一日(日)午後一時始

盛久 野村 四郎 武田 邦弘

松野 久田 徹二 梅田 邦久

小鍛治クセ 近藤 幸江

杜 若キリ 高木美智子

竜 田キリ 今村 嘉男

玉 葛 加賀 敏彦

鞍馬天狗 松山 幸親

山姥 中川 雅章 観世 喜之 小島 一英

附祝言 主催名 古屋 観世 会

全館自由席 入場券 四、〇〇〇円

入場券申込先 能楽殿及び出演者宅・チケットがらにて 取扱い。

◆皇月の舞台から◆ 「九皇会」と「又三郎古稀 祝賀やるまい会」

竹尾 邦太郎

「悪太郎」シテ松次郎。若気のバサラ(派手に見栄を張ること)振は、大躍進え衣裳短やかに長刀誇示する傍若無人。今も今とて濃厚な伯父・礼之助を助い、身に覚えの日常の不行跡を些かドスを利かせるつもりでひけらかし、「そしるるげなの」と凌む。この微妙なアクセントは、剃髪されて夢枕、俗名に代わる南無阿彌陀仏の名を与えられた後、鉢印の僧号(南無阿彌陀仏)に、怪訝ながらも地りかね、「なんぞいおう」と問い返すことと共に、如何にも和泉流発祥の地の郷土の味わいが味覚され、アド二人とのアンサンブルも上々。(38分)

「編劇」シテ喜正。当地初シテと思ふ。襟浅黄・紺無地髪目・茶水衣・白紺染分腰。面は朝倉尉か。松明振りたてという程ではないが、少々手首(のスナップ)が利き過ぎの感じと、老体の運びにしては膝から下がなよなよとして見えた。固より長身瘦弱、視覚から来る不利はあるが、今後の鬼畜物の克服願であらう。しかし謡の豊かさは力強さを生み、語りも説得力があった。眼目の輪ノ段は猛る輪を、へばりと放せば、や、へばりと放せば、とスミ近く、松明照して下に面通じ、焦点定まって凝視する辺り、月が上って篝火の光が失せ、首を横に振り絶望を表現して松明と照らすや、へばりさよ、と退って双シオリするところ、上半身の動きに比べ足捌きなどが良すぎで、卑賤の漁夫の粗野という荒々しさにそぐわぬ嫌があった。

後シテは赤頭・結黒い小ベシ見・唐冠・紺地狩衣(金で火焔太鼓立羽文様)・赤地半切(金襴妻宝輪文様)。へ千里が外も雲雨れられていた。その頃の京都・大阪、奈良なつかし。

片やのむらとしこさん。「春の雪」。俳句で始まる。「母も死に子も死に河が流れている」。高屋窓秋。窓秋昭和十二年の句集「河」に載る。これを「折々のうた・大岡信(朝日・平成三・二・八同欄)」でみられた。そしてご夫君・親世左近氏・森茂好氏三氏の急逝を哭(なげ)き、思いを新作能・無明の井に馳せ、「姑」にうつり筆を止める。生死と女(の業)にふれる。綿々かつ厚利な文章で、共にゆかし。

高屋窓秋こと高屋正国氏は私が文章を広く深く語り得た数少ない先輩である。昭和十四年大学(英文学)に在ることを辞し、放送局に入ったが、そこに失望し、内外ともに暗い時代の私をやさしく慰めてもらう。戦争が二人の仲を遠ざける。貴公子の風貌は今も失われていない。

「灰色」の段髪目目に扇面散シ文様の濃く萌黄の素袍袴、小サ刀。北白川に宿を取った花子からの便りにも妻を憐れ、「ただ一度ならで返事も致さぬ」痛恨をバネに、叱決して、「女共(妻)を呼び出し、たばかってみよう」と存する。決意の程が、あからさまに利己的なら、苦心修練の末に一夜の暇を手に入れるや、にこっ、として、「阿漕ながらもう一夜は成るまいか」と舌蹴りせんばかりに付け入る厚顔が更に功利的な印象を与え、花子を恋う一途な思いが少々純から遠退いたのは一種の抑れか。後見座へ退く妻・万之丞と離れ違つてワキ座にきたシテの、常座へ走つて妻の姿無きを確認した歡喜は浮き立つばかり。それだけに、寸刻を惜しむ気分は、太郎冠者。万作を慰し身替りとするなど、目まぐるしく動く頭の回転によく表現され、さればこそ浮遊し入りと称する中入も宙を飛ぶようである。

一方、正体見破られて怯怖する万作の、渡世を弁まえた小賢しさがしおらしく、その立場に同情する万之丞が、綺麗な端布で巾着などを作つてやる、というも生活くづくとみる。

五月三日テレビ能(NHKK、以下おなじ)屋島・粟谷菊生。喜多流同曲は始めて。後シテ珠におもしろし。シテ常座あたりから一ノ松の切りまで息もつかせぬ。喜多の強吟(修羅物)は音に高いがもう二・三番きいてみたい。本自力強し。地頭友枝照世のはず。

次の四日狂言二題。釣狐・和泉元弥。秘曲狸鼓・和泉元秀。この二番立付けは勿体ない。NHKの好意であろうが、少し気が重い。しかし味わいはちがうので楽しめる。この放送も時間が少し短縮。一文惜しみの百知らずの類か。また首が出るが、かつて藤田流先代家元六郎兵衛氏が「いつ理の笛を乞われても心の用意はできておらず」と語られた。今も忘れぬ。

三日目は六日に讀風(宝生英雄・宝生剛・敏哉八子方)ほか。再。ツレ日野賢朝親子の別れ、資朝のむくろを抱えるワキ閑のしぐさ、切り(シテの舞台)をつ

奥を透ませて巧妙。身替りの身替りになった妻は、「汝は目に見えぬ所へ行く休め」と促し、太郎冠者は切戸へ退く。入れ違つて後シテは、士鳥帽子は脱ぎ、襟浅黄・素袍袴(瓢箪文様)・右肩脱ぎ、左手に太刀の立出で、一ノ松に辿り着く。心ここにあらず、の風情は、所謂「夢心小歌」を、へ更けゆく鐘は、としみじみ吟じ、東の間の連瀬を眺みしきつた虚脱状態が浅ましい程。「さてもさても美しき女かな」の詠歌も徒事ならず、座禅念のまま聞かせる小歌がかりの惚気話の態の無さは、へよその女顔見て我が妻見れば、山の奥の山猿めが、と、憎々しさを倍加させるが、気分が赴くままに、へ鳥は月に鳴き、スミで月の扇する自己陶醉も、やがては現実に引き戻され、一ノ松に抜けて、へ名残惜しやの、とシオル。その対極には、ひたすら無気味な沈黙を守る妻が居て、圧倒的なサスペンス。

「誠に、思ふに別れ、思はぬに添ふと云ふは某が事ぢや」、の後の寸刻の静寂は吐息が聞かれる程。そして一転、登る言葉一語ずつ句切るかの、「や・い・わ・お・と・こ」の凄味。しかし、驚愕から本能的に体勢立て直さんとする又三郎は、口辺にひきつるような薄ら笑いを浮かべる強かきだった。その後がさぞ怖かろう、の余韻を残して追立てられた。

古稀記念と銘打つが、又三郎の年齢を超越した艶のある瑞々しい舞台だった。(1時間5分)

「首引」シテ親鬼・耕介が溺愛するアド姫鬼・健行。その甘つたれぶりが子方の扮する姫鬼とは異なり、お転婆娘のオーバー・アクション気味なのも楽しく、男女の機微心得、小アド為朝・良介に仄かな愛情寄せせるかの素振りが見えるのも微笑ましい。並居る戯態の鬼共を庄する直面の良介の存在も中々のももの。好配役で大型の「首引」となった。(28分。5月19日・第34回やるまい会)

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話01137

紅梅記

六月の雨
五月二十日高が鳴く。強くしかりした雨で。小庭に遊び、近所に移り、また訪れてどこかへ帰っていく。月末まで続く。その頃時を同じくしてがま(蛙)もなく、雨が近いのである。これからは雨の中の熱田行になるであろう。

次いで四・二九テレビでみた問題の新作能・無明の井について感想をのべて置きたい(NHK)。これも雨の日にしたためる。力作好演。悲しみも怒りも折れもあり押し付けがましい処もなく、立派な文芸作品となる。シテの美しいツレ(心臓をうける女)の悩みは十分にあらわれ、大事なアイ(大島寛治)風格あつて佳。新しく生死を扱う能の深遠に感銘。作者の知恵と表現の効果に敬意を。なお、放送はもう少し時間がほしい。能の作者・多田富雄(詞)、橋岡久馬(舞曲)。シテ久馬・ツレ橋岡佐喜男・ワキ鈴木岑男ほかの諸氏。笛は名古屋藤田六郎兵衛氏。貴重な諸資料を受く。十月京都で再演の予定。

本。始の話。堀田吉雄・水谷新左衛門両氏共著。狂言始(驚流)を始め、小舞員尽し・肩衣(始はかの模倣)載る。後者二つは井上祐一氏著者に紹介。佳書。発行・光出版印刷(松阪市)。受贈。

「ザインとソレン」。松本武氏著。金春流を好む。元裁判官、現在公証人。日本法律家協会会員は

か。前半法律の講義記録。後半愛する能の話。桜間金太郎(弓川)・梅村平史朗・本田秀男・三氏への恩慕深し。冒頭桜川はか舞姿の写真多数あり。私家版。朝日新聞社。受贈。

九月七日。朝長・佛法(せんぼ)う。親世鎖之丞・ワキ宝生剛・太催主鬼頭喜太郎)行わる。喜太郎氏は親世流太鼓方の家。岡氏祖父為太郎氏が曾祖父追善に佛法(大七)を勤めて以来名古屋で七十五年目の由。シテ親世元義・小田鍋惣太郎・太祖父。

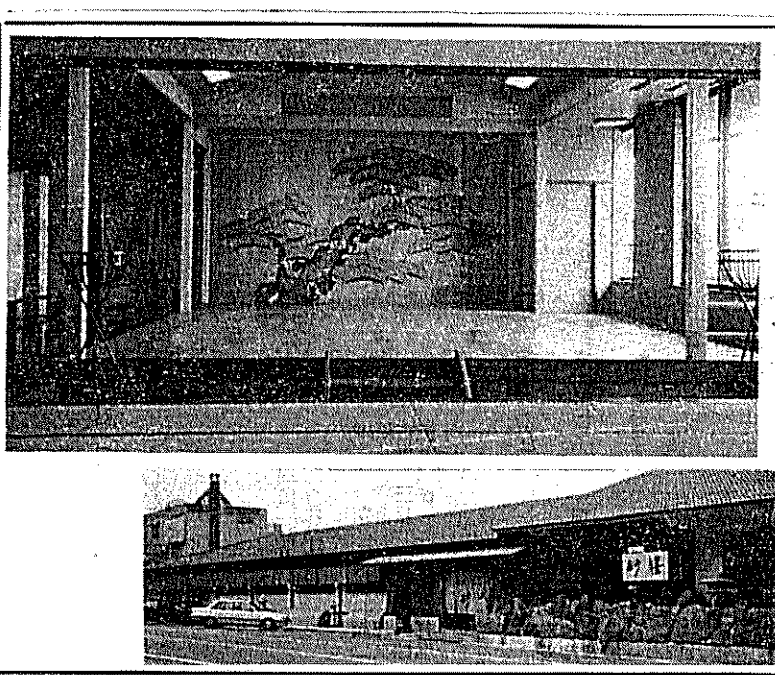
当日は親世元義(後左近、神歌と望月)・橋岡久太郎(羽衣)ほか八人へに寺田左門治(剛、阿漕)各氏出席。

狂言は枕物狂(外堀新太郎)ほか共同社。今回はシテ方五流家元出動(舞囃子)・大能。期待大。(泰山木切う日、野村広二)

「悪太郎」シテ松次郎。若気のバサラ(派手に見栄を張ること)振は、大躍進え衣裳短やかに長刀誇示する傍若無人。今も今とて濃厚な伯父・礼之助を助い、身に覚えの日常の不行跡を些かドスを利かせるつもりでひけらかし、「そしるるげなの」と凌む。この微妙なアクセントは、剃髪されて夢枕、俗名に代わる南無阿彌陀仏の名を与えられた後、鉢印の僧号(南無阿彌陀仏)に、怪訝ながらも地りかね、「なんぞいおう」と問い返すことと共に、如何にも和泉流発祥の地の郷土の味わいが味覚され、アド二人とのアンサンブルも上々。(38分)

「悪太郎」シテ松次郎。若気のバサラ(派手に見栄を張ること)振は、大躍進え衣裳短やかに長刀誇示する傍若無人。今も今とて濃厚な伯父・礼之助を助い、身に覚えの日常の不行跡を些かドスを利かせるつもりでひけらかし、「そしるるげなの」と凌む。この微妙なアクセントは、剃髪されて夢枕、俗名に代わる南無阿彌陀仏の名を与えられた後、鉢印の僧号(南無阿彌陀仏)に、怪訝ながらも地りかね、「なんぞいおう」と問い返すことと共に、如何にも和泉流発祥の地の郷土の味わいが味覚され、アド二人とのアンサンブルも上々。(38分)

「悪太郎」シテ松次郎。若気のバサラ(派手に見栄を張ること)振は、大躍進え衣裳短やかに長刀誇示する傍若無人。今も今とて濃厚な伯父・礼之助を助い、身に覚えの日常の不行跡を些かドスを利かせるつもりでひけらかし、「そしるるげなの」と凌む。この微妙なアクセントは、剃髪されて夢枕、俗名に代わる南無阿彌陀仏の名を与えられた後、鉢印の僧号(南無阿彌陀仏)に、怪訝ながらも地りかね、「なんぞいおう」と問い返すことと共に、如何にも和泉流発祥の地の郷土の味わいが味覚され、アド二人とのアンサンブルも上々。(38分)



幽玄の空間.....
大広間つき 能楽式舞台

知多半島の高峯山を背景に伊勢志摩を一望できる海辺に面し、純和風の趣きに満ちた「妙膳」に72畳の大広間をもつ能楽式舞台が完成しました。四季折々にまごころこめた海の幸のおもてなしとともに能会、ご社中会のご利用をお待ちしております。

知多半島 海 伊勢 味とる

妙膳

(シーサイドプリンス新館)
愛知県知多郡南知多町大字内海小榎40
TEL <0569> 62-1311(代)

平成3年7月・8月放送予定

FM能楽鑑賞(午前8時-9時)

[7月]

21日(日) 観世流「玄 象」藤波重満
28日(日) 金剛流「満 仲」金剛

[8月]

4日(日) 観世流「恋重 荷」坂井音重
11日(日) 喜多流「半 節」喜多節世
25日(日) 観世流「夕 願」山本真賀

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

一 部 90円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

[7月]

21日(日) 観世会 楽 会 (有料)

[8月]

3日(土) 名古屋新能 (有料)(番組①面)

4日(日) 宵 陽 会 (来場歓迎)(番組①面)

11日(日) 官庁楽団宝生会大会 (来場歓迎)

18日(日) 司 宝 会 (来場歓迎)

24日(土) 衣 斐 正 宜 後 援 会 (有料)

[9月]

1日(日) 大 衆 能 (有料)

7日(土) 鬼頭喜太郎舞台生活60周年記念能(有料)

8日(日) 観世会 定 式 能 (有料)

14日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)

15日(日) 宝 生 会 定 式 能 (有料)

21日(土) 九 草 会 定 期 能 (有料)

22日(日) 和 泉 会 (来場歓迎)

23日(祝) 鳳 鳴 会 大 会 (来場歓迎)(番組①面)

27日(金) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎)

28日(土) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎)

29日(日) 郁 風 会 大 会 (来場歓迎)

[10月]

5日(土) 幽 花 会 大 会 (来場歓迎)

6日(日) 幽 花 会 大 会 (来場歓迎)

10日(祝) 武 田 会 大 会 (来場歓迎)

12日(土) 武 田 会 大 会 (来場歓迎)

13日(日) 邦 楽 会 大 会 (来場歓迎)

(演能変更の際はご了解下さい)

観世流太鼓・鬼頭喜太郎の舞台生活六十周年記念能が今秋九月七日熱田神宮能楽殿で催される。

観世流太鼓・鬼頭喜太郎の舞台生活六十周年記念能が今秋九月七日熱田神宮能楽殿で催される。

観世流太鼓・鬼頭喜太郎の舞台生活六十周年記念能が今秋九月七日熱田神宮能楽殿で催される。

鬼頭喜太郎 60周年記念能

観世流太鼓・鬼頭喜太郎の舞台生活六十周年記念能が今秋九月七日熱田神宮能楽殿で催される。

名古屋新能 能3番・狂言・仕舞

「名古屋新能」はことし二十六回をむかえ、八月三日(土)熱田神宮神楽殿前・特設舞台上で催される。

「八月十一日」能「鶴亀」(小寺一郎)「頼政」(阪田力)「半節」(梅若春高)「紅葉狩」(波多野晋)「八月十二日」能「小春」(赤松慎友)「巴」(倉本雅)「百萬」(生一泰知)「鶴亀」(木内十三比呂)開演午後五時。

「いわむら城新能」八月十七日(土)岐阜県岩村町の歴史史料館前・藩主邸跡で第七回新能が催される。

「いわむら城新能」八月十七日(土)岐阜県岩村町の歴史史料館前・藩主邸跡で第七回新能が催される。

「はぎわら新能」七月二十八日(日)「船弁慶」岐阜県萩原町で初の新能上演。

「はぎわら新能」七月二十八日(日)「船弁慶」岐阜県萩原町で初の新能上演。

「はぎわら新能」七月二十八日(日)「船弁慶」岐阜県萩原町で初の新能上演。

「はぎわら新能」七月二十八日(日)「船弁慶」岐阜県萩原町で初の新能上演。

第26回名古屋新能

八月三日(土)午後五時半開演 熱田神宮神楽殿前・特設舞台

金春流仕舞 郁 前田 茂穂 地謡 加藤 幸一 藤 井 久徳 完楽 徳久 治人 三雄

火入式 熱田神宮神楽 西尾 武喜

井筒 杉江 元 藤田 六郎兵衛

茶壺 野村又三郎 井上礼之助

附祝言 主権能楽協会名古屋支部 後援名古屋新能・熱田神宮

幽花会 片山九郎右衛門

井上嘉久

幽花会 片山九郎右衛門 藤井久徳 完楽 徳久 治人 三雄

前面に続いて、今回も三代藩主綱誠の治世期の太鼓・小鼓・笛などの主なる役者について、ふれることにする。

綱誠の家督を嗣いで演じられた四日間には、演能の際の太鼓方として、諸井源右衛門、諸井源兵衛が、主に勤めており、それに長谷川与八郎が、加わっている。

諸井源兵衛は、親世流太鼓役者として、寛治元年(一六五八)二代藩主光友によって、召し抱えられ、切米五十石、扶持六口を与えられた。寛文十三年に亡くなり、その子吉右衛門が、二代目を継ぎ、源兵衛と改名する。

この諸井家は、七代目金太郎が活躍する江戸末期まで、芸系が続いている。なお、諸井源右衛門は、諸井家の一族であろうが、源兵衛との関係については、くわしいことは分らない。

諸井源兵衛の流派、太鼓方親世流は、流祖を、親世と四郎吉園(親世元重八音阿弥)の四男、一四四〇(一四九三)と云う。この親世と四郎吉園は、太鼓を、金春流太鼓の流祖、金春三郎豊氏(神竹伯父)に学んだ。それゆえ、当初は、親世流太鼓の芸系は、金春流太鼓の芸系と同じであったのである。

二世榎垣本(ひがもと)と、与五郎吉久、三世榎垣本(大田夫國忠、四世似我(じが)と左衛門田広と受け継がれた。似我と左衛門田広は、太鼓の名手であったばかりでなく、数種の太鼓の伝書をも書き

大阪城新能

7月30日 能3番上演
 夜空に浮かぶ大天守閣を背景に催される「大阪城新能」は七月三十日(火)大阪城二の丸庭園で催される。開演午後五時。
 主催・読売新聞大阪支社、読売テレビ。入場料一般三千円(前売二千三百円)
 能組は、金春流能「氷室」(金春晃美)親世流能「杜若」恋之舞(親世清和)大蔵流能「附子」(茂山忠三郎)親世流能「安宅」(勸進帳・酌掛(親世栄夫))
 問い合わせは読売新聞大阪本社大阪城新能係(電話〇六―三三六六)

尾張藩の能の歴史(五)

親世流太鼓の家元の名前は、左吉とか、与左衛門とか称する人が多し。太鼓方親世流として、現在も名古屋近辺に居住し、活躍しておられる鬼頭喜太郎氏、助川竜夫氏などがおられる。

小鼓方役者としては、親世流小鼓方高田九郎三郎、中地庄左衛門、中地喜右衛門、七右衛門、七十郎、七左衛門、庄右衛門、孫市、理右衛門、権十郎など、十人の名前が見える。

このうち、中地喜右衛門、七右衛門、中地庄左衛門、高田九郎三郎(一八四五)

松阪新能

(月見の宴)
 八月二十九日午後六時開演。
 会場・松阪公園特設舞台、主催・松阪能楽連盟。
 能「滑巻」(シテ和合衛市) 能子「高砂」(浜口幸成)
 佐藤耕司氏還暦 祝賀司宝会大会
 宝生流・佐藤耕司師主宰の司宝会は、八月十八日(日)師の還暦祝賀大会を熱田神宮能楽殿で開催

郎などが、主なる小鼓役者として勤めている。

親世流小鼓方高田氏は、初代を高田長左衛門と言ひ、慶安元年(一六四八)に、藩祖綱誠によって召し抱えられ、切米六十石を与えられていた。寛治二年に亡くなり、その二代目を九郎三郎が受け継いだのである。三代目は、伊右衛門と称し、その後、家督を継ぐ者は、伊右衛門と書われる者が多い。九代目で芸系は絶えたようである。江戸末期まで続いた家柄である。

小鼓親世流は、その芸系の祖を、宮増弥左衛門親賢においでしているが

飯富良人氏

飯富雅介氏蔵文
 高安流ワキ方・飯富良人氏(飯富雅介氏蔵文)は六月十八日午前十一時六分心不全のため逝去された。享年七十五歳。
 葬儀は二十日午後一時から熊本市・白川斎場で行われた。喪主は妻恵美さん。
 自宅は熊本市黒髪一六の二九(筆者は岐阜市立女子短期大学教授)

既して、めぐまれた環境にあつたためか、流勢拡張に力を注がず、地方諸藩に新九郎流の小鼓役者は少なかつたようである。現在も流勢は弱い。

笛方
 笛方の役者としては、藤田清三郎、横井庄助、藤田清兵衛、平岩加兵衛、半六など五人の名前が見える。藤田流については、すでにふれているので、平岩流について説明することにする。

平岩流は、仙台藩主伊達政宗の小姓であつた平岩勘七親好が流祖で、主命によって、笛を牛尾豊前(平岩流)と書つたようである。藩主の意向で、元和から慶安期に活躍して、初代は、元和から慶安期に活躍して、初代は、一噌流三代目、中村晴庵にも笛を学んでいる。仙台藩から百五十石の知行を得ている。初代の平岩勘七親好の弟平岩加兵衛が、寛永年中に、尾張藩祖綱誠によって、切米八十石、扶持七口を与えられ、召し抱えられる。これより幕末まで、尾張藩笛方として、芸系が続く。

この他、加賀藩にも牛尾流の弟子が召し抱えられて、江戸末期まで続いたようである。

ただし、四座の笛方になつたものは一人もない。

このように、三代藩主綱誠が家督を継いだ元禄七年頃の能役者は、かなりの人数に上るが、それでもまだ十分であつたようである。「羽鶴籠中記」では、元禄十年二月二十一日のところで、次のように記している。

「召玉ニ京ヨリ散衆ノ徒、福井四郎兵衛。…小鼓六十石安田義兵衛、狂言三十石伴治左衛門。地謡四十石植村十助。地謡三十石岩室金七。物着三十石吉川伊兵衛。作物師二十五石小沢庄七。五人扶持。」

次回は、福井四郎兵衛家についてふれることにする。もうしばらく、綱誠の治世期の能役者について、説明を加えてゆきたい。

参考文献「名古屋市史」「名古屋歴史」「岩波講座能・狂言」能楽の歴史「能・狂言事典」「能楽全書第二巻」

宝生英雄	金春信高	高安会
宝生英照	金春安明	西村欽也
名古屋巽会	金春欣三	飯富雅久
辰巳孝	金春三	杉江元
金剛永巖	春敲会	福王茂十郎
金剛永謹	金春晃実	京都・高安流
廣田後援会	廣瀬瑞弘	岡次郎右衛門
廣田陸一	本田光洋	宝生欣哉
廣田幸稔	喜多流十六世宗家	豊嶋十郎
菊扇会	喜多六平太	谷田宗二朗
後援会	和島富太郎	森田光春
廣田泰三	大阪喜多会	
廣田泰能	和島富太郎	
豊嶋能の会		
豊嶋春三		
金剛流		
松野恭憲		
松野洋樹		
二井栄逸		

青陽会式定能

八月四日(日)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

素阿竹生島 今村嘉男
馬場 信至 加藤 保彦

仕舞道 明 寺近藤 幸江 地謡
高橋 敏一 須部 敏彦
須部 敏彦 須部 敏彦
須部 敏彦 須部 敏彦

頼

梅田 邦久 河村真之介 鹿取 希世
政 杉江 元 柳原富司忠
佐藤 友彦

武田宗治郎 五十回忌 追善
武田太加志 七回忌 追善

鳳鳴会大会

九月二十三日(秋分の日)
午前九時三十分始

熱田神宮能楽殿

番外 仕舞道 正 三村 恵子
社 若 武田 文志
殺生 石 武田 友志

素阿采

女 高橋すゑの 村上 郁子
鶴 笹山 忠 伊藤 義郎
藤 戸 木本 仁之 小敷 義郎

求

塚 矢野 義章 村上 清
卒都婆小町 大坪 重選 武田 志房
小川 明宏

生田敦盛

山本 清 河村真之介 鹿取 希世
山崎 佐東子 柳原富司忠

後見 親世 清和 地謡 高橋 敏一
武田 宗和 新井 和明 藤井 久治
武田 宗和 新井 和明 藤井 久治

四方 箕浦さおり 友志
同山 武田 友志
同山 松木 千俊
新井 和明
小川 博久
小川 明宏
古橋 正三
藤井 徳三
山森 幸男
山本 則直

素阿安

山本 則直 木下 義国

楊貴妃

飯富 雅介 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
井上松次郎 松田 高義
後見 井上 祐一

狂言 師

野村又三郎 松田 高義

葵

高安 勝久 吉田 定男 鬼頭 好信
飯富 雅介 福井啓次郎 大野 誠

附祝言

井上礼之助 主催 青陽会

西行楼

西村 欽也 河村総一郎 鬼頭喜太郎
福井啓次郎 藤田六郎兵衛

雜子花

笹田 孝子 寛 敏一 鹿取 希世
長谷川京子 河村総一郎 藤田六郎兵衛

雜子砧

後 長谷川京子 河村総一郎 藤田六郎兵衛

葵

小島 博久 吉田 明 寛 敏一 鹿取 希世
上 西村 欽也 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

素阿石

浅井 一元 武田 宗和
觀世 清和 武田 志房

後見

小島 一英 武田 友志 松木 千冬
武田 志房 久保慎一郎 藤井 徳三
新井 和明 藤井 徳三 郭太郎

素阿江

口 觀世 清和 武田 志房

主催

武田 鳴志 房会

〔入場無料・御来場歓迎〕

〒500-11 豊明市間米町敷田三三三
連絡先 松井 井 〇五六二一九二一〇三三五



龍吟会

藤田六郎兵衛

名古屋市中区堀下二丁目一〇番九号
電話(〇五二)五七一五七六三

大倉源次郎

〒501 大阪府吹田市
江坂町五一七一二

谷口正喜

京都市上京区中立売通室町西入
室町スカイハイツ610号

瀬尾乃武

〒171 東京都豊島区西池袋1-30-10
〒920 金沢市香林坊2-8-17

亀井俊一

保雄 忠雄

前川光隆

前川光長

名古屋市右京区御室芝橋町一の六
名古屋種古場 名古屋市中区葵二-13-3
ツインクルガーデン(前野舞台)
電話九三二一八八〇六番

青春流太鼓

青耀会

〒500-02 和泉市光明台三丁目15-25
電話〇七二五(59)八五二一
名古屋市中区丸の内二-1-3
名古屋市中区丸の内二-1-3
電話(〇五二)二〇一四〇三五

大蔵狂言会

大蔵 彌右衛門
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

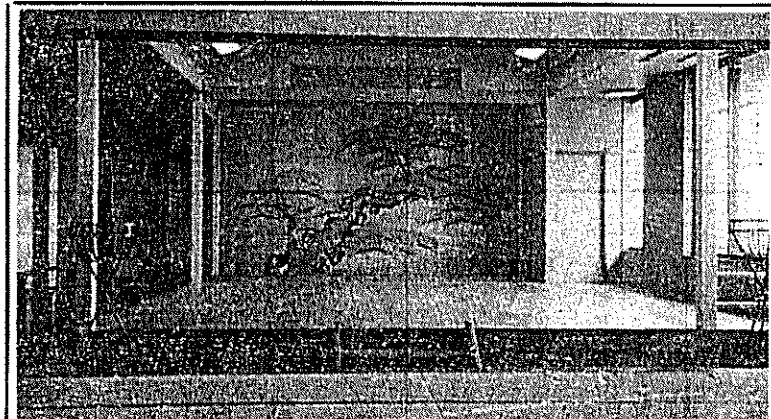
大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎

大蔵 彌太郎
大蔵 彌太郎
大蔵 吉次郎



幽玄の空間.....

大広間つき 能楽式舞台

知多半島の高峯山を背景に伊勢志摩を一望できる海辺に面し、純和風の趣きに満ちた「妙膳」に72畳の大広間をもつ能楽式舞台が完成しました。四季折々にまごころこめた海の幸のおもてなしとともに能会、ご社中会のご利用をお待ちしております。

知多半島 海 御宿 味はる



(シーサイドプリンス新館)

愛知県知多郡南知多町大字内海小樹40
TEL <0569> 62-1311(代)



観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話03(3291)2488-9 振替東京3-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替京都1-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

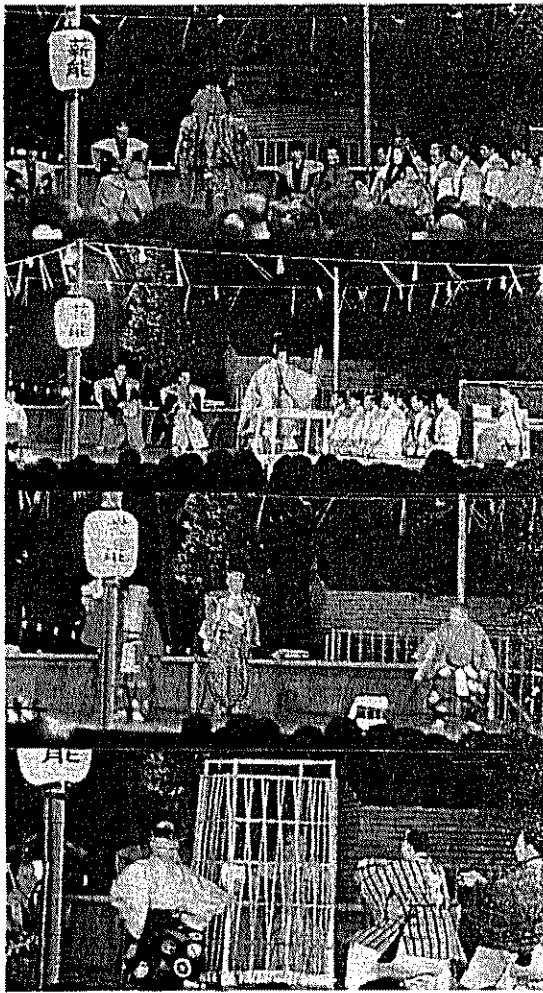
一部 90円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- 〔8月〕
24日(土) 衣斐正宜後援会 (有料)(番組⑥面)
- 〔9月〕
1日(日) 大衆能 (有料)(番組③面)
7日(土) 鬼頭喜太郎師舞台生活60周年記念能(有料)(番組⑥面)
8日(日) 観世会定式能 (有料)(番組⑥面)
14日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)(番組⑥面)
15日(日) 宝生会定式能 (有料)(番組⑥面)
21日(土) 九草会定期能 (有料)(番組④面)
22日(日) 和泉会 (来場歓迎)
23日(祝) 鳳鳴会大会 (来場歓迎)(番組⑥面)
27日(金) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎)
28日(土) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎)
29日(日) 郁風会大会 (来場歓迎)
- 〔10月〕
5日(土) 幽花会大会 (来場歓迎)
6日(日) 名古屋泉楽会 (来場歓迎)
10日(祝) 武田恵福会 (来場歓迎)
12日(土) 猫柳会 (来場歓迎)
13日(日) 邦楽会 (来場歓迎)
20日(日) 幸福会 (来場歓迎)
26日(土) 清溪会 (来場歓迎)
27日(日) 淡交会 (来場歓迎)
- 〔11月〕
2日(土) 重陽会20周年記念会 (来場歓迎)
3日(祝) 幸友会秋の会 (来場歓迎)
4日(休) 観修会大会 (来場歓迎)
9日(土) 濤華会 (有料)
10日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)

(演能変更の節はご了解下さい)



第26回 名古屋新能

④から能「嵐山」「井筒」
狂言「茶壺」能「安達原」

名古屋新能は、既報のように中部地区の能楽関係者、能楽愛好家の会を中心に、ことし四月から「建設諸願署名運動」が進められてきたが、幅広い各界の共鳴を得て、十万人署名の目標をはるかに超え、

八月十日現在で約十六万人の署名が集計され、能楽堂建設への期待のひろがりを見せている。署名運動は能楽協会名古屋支部、能楽愛好家の会はじめ邦舞、邦楽、洋舞、演劇など約三十団体、芸術話人会・北村利弥代表は「皆様のひとかたならぬご理解、ご後援を得て目標をはるかに上回るこ

名古屋城に能楽堂を！ 署名16万人超える 幅広い各界の熱意凝集

で展開され、名古屋市、愛知県下はもちろん、岐阜、三重の東海各県、さらに東京、関西地区にまでおよんでおり、「国際都市・名古屋に市立の能楽堂を」のアピールが広がっている。

署名は当初目標十万人が設定され、その達成は至難ではないかとの見方もあったが、わずか四カ月間に目標を大幅に上回り、十六万人を超える数字を達成したことに、能楽協会名古屋支部・西村欽也支部長、能楽愛好家の会世話人会・北村利弥代表は「皆様のひとかたならぬご理解、ご後援を得て目標をはるかに上回るこ

名古屋JC「ターグ」賞 藤田六郎兵衛氏が受賞

この「TARG賞」は昭和六十二年から設けられ、①文化芸術部門②グローバル部門③地域開発部門でそれぞれ一人が選ばれ、能楽関係の受賞は始めての受賞である。また藤田氏は日本青年商工会議所が行っている「TOYOP大賞」の候補者として指名推薦されたことにより賞状と盾が贈られている。なお「TARG賞」の表彰式は九月三十日に名古屋・中区の東急ホテルで行われる。

社団法人名古屋青年商工会議所(名古屋JC)所長藤田六郎兵衛氏(三七)を決定した。

名古屋JC「ターグ」賞は、名古屋青年商工会議所(名古屋JC)所長藤田六郎兵衛氏(三七)を決定した。藤田氏は、文化・芸術部門で、能楽師方・藤田流宗家・藤田六郎兵衛氏(三七)を決定した。

できたことを感謝致しております。皆様のお力添え、署名に参加願った方々のおかげであり、心からお礼申し上げます」と各界の熱意に感謝の言葉を述べた。なお能楽協会名古屋支部では、九月一日、熱田神宮能楽殿で支部臨時総会を開き、能楽愛好家の会世話人も出席して「市立能楽堂建設諸願運動中間報告と今後の方針」について協議する。

たつき新能

能「安達原」上演

岡崎竜城ライオンズクラブ主催の「岡崎たつき新能」は八月九日岡崎城二の丸能楽堂で午後六時半開演、酒席の盛会であった。演目は狂言「佐渡狐」(野村又三郎)能「安達原」(シテ泉喜夫、ワキ西村欽也)。後援岡崎市、岡崎教育委員会。演能の収益金は献眼、献賢運動の協力に当てられる。

伺

御

中

暑

熱田神宮能楽殿

運営委員会

熱田神宮福司
委員長 岡地 幸雄
委員 一同

名古屋観世会

山本 真賀
山本 章弘
豊中市本町六丁目一〇一六

誠交会

東京世田谷区三軒茶屋二一〇二二
電話(〇三)三四三二二一六三三七番

笙月会

中川 雅章
長浜市地福寺町八ノ二九
電話(〇五七)〇六三〇番

洗心会

奥村 富久子
〒808 京都市左京区永観堂西町二〇
電話(〇七五)〇七六七番

久田観正会

久田 徹二
大倉流小鼓
松月会
松野 郁子
松野 幸親
松野 幸親

松野会

松野 幸親
馬場 信至
玉木 孝男

〒482 名古屋市北区東水切町四ノ四三
電話(〇五三)九八一三三四三番

芳韻会 稻生 芳雄
半田市船入町三十一
電話(〇五九)〇八一五

観修会 祖父 江 修一
多治見市日ノ出町二丁目
電話(〇五七)〇三六五六

水雲会
水藤 元三

賀水会
加賀 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

賀水会
賀水 敏彦

夕顔日記

(120)

夕顔

えと文 二井栄逸

栃木県の南部地方では古くから夕顔栽培が盛んに行われていたようです。

七、八月頃、大きくなった果実を採取して回転させ、鉋(かんば)で皮をむき、細長いテープ状にしたものを、流のようにたらし、天日で乾燥するのです。私は若い頃より、巻きずしのしんにした干瓢(かんぴょう)が大変好きでした。

山々から吹き落ちてくる涼風にそよそよと、いかにも郷土色ゆたかな風景であったようです。

大分前になりましたが、門弟に栃木の人だったので、写生に連れていってもらったことがあります。

各地だより

第3回 明石新能

8月6日 明石公園で

ことし第三回を迎えた明石新能(主催明石新能の会)は、八月六日、明石公園特設能舞台で、能「那那」(シテ久田徹二)半能「石橋」(シテ上田貴弘、ツレ・赤羽子)上田拓司、笠田昭雄、浦田保徳、狂言「磁石」(茂山あきら)仕舞「菊慈童」(大西智久)「天鼓」(浦田保利)「龍虎」(笠田裕、木内十三比古)を上演。

また、明石伝統芸能文化協会主催の第十三回協会公演は八月二十五日(日)明石市民会館大ホールで開催。

能楽は独吟、連吟、仕舞、狂言が上演される。午前十一時開演。入場料千四百円。

名古屋新狂言

大垣狂言の会

和泉宗家後援会

和泉宗家・和泉宗家後援会は八月二十日、二十一日の両日、徳川公園特設能舞台で、「名古屋新狂言」を開催。ジャパンフェスティバル参加、シニクスピア狂言英国公演記念の上演。

さらに八月二十九日、大垣市文化会館で「第九回大垣狂言の会」を開催。和泉宗家の「釣狐」を上演。午後六時開始。前売券五千円。

鈴鹿新能

鈴鹿新能

8月23日 能「井筒」

鈴鹿新能は八月二十三日(金)神戸城跡特設会場で行われる。

能「土蜘蛛」(衣笠正直) 能「井筒」(宝生亮照) 狂言「清水」(山本則直) 仕舞「船坂」梅田邦久

主催 鈴鹿市新能実行委員会、鈴鹿市、鈴鹿市教育委員会。

源氏は其の後たびたびその女の許に通います。が、或夜、にわかにかに病み、夕顔の花のようにはかなく死んでしまふという凄絶な物語であります。



この夕顔とは別にもう一つの夕顔があります。これも門弟の家でのごとく、その日は気が楽な研修の日でエッセイ・トークとしてお話をしてみました。

夕空がすみれ色にかける頃、ひっそりと静まりかえった庭にポツカリと純白のおよぶりの花が咲きました。それは全く突然で、ほんとかすかな音さえるのです。

五条あたりの半部屋に咲いた夕顔、研修会の庭に咲いた夕顔は同じ名前ですが、四、五年前から、源氏物語の夕顔はつる性の夕顔、研修会の時の夕顔は夜顔というところになりました。私も此の頃はどのように区別しています。

(平成三年八月六日夜)

わかさ会公演

9月23日 観世会館で

わかさ会は、九月二十三日(祝)京都・観世会館で「哀調」「哀愁」を上演。京の哀三題をテーマに公演する。

人間国宝

後藤得三氏 逝去

喜多流シテ方・重要無形文化財保持者の後藤得三氏は七月二十二日午後五時二分、心不全のため逝去された。享年九十四歳。

葬儀・告別式は二十七日午前十一時から東京都練馬区高野台三の

東高野会館で執り行われた。喪主は長女長田美沙子さん。

氏は明治三十年一月生れ。大阪市出身。十二歳で喜多六平太入門。格調高い四熟の技に幽婉の情趣に切れ味を秘め、昭和三十七年芸術院賞受賞、昭和四十五年人間国宝に指定、五十七年芸術院会員となった。同年海外公演にはパリで羽衣を公演。自宅は東京都保谷市下保谷四一―一九。

謹んでご冥福をお祈りします。

近藤 乾之助 〒110 東京都豊島区巢鴨五―三三―八	正風 会 衣斐 正宜 〒465 名古屋市昭和区御器所3―23―19 御器所パークマンション802号 電話(052)882―5600番	衣斐 正宜 後援会 〒460 名古屋市中村区名駅三―二六―二六 平松昌彦 彦方 電話(052)586―1120番	佐野 由 於 〒114 東京都品川区大崎五丁目一―四 五反田南ハイム1―003 〒460 金沢市泉野町四丁目十二―二十四	倉本 雅 神戸市東灘区田中町一―13―26 本山アパマンイン 四〇一―一 電話(078)444―5465番	宝生 流 鬼頭 嘉 会 〒460 名古屋市昭和区川名本町二―五―一	吉田 俊彦	竹腰 勝一	司宝 会 佐藤 耕 司 〒460 名古屋市天白区島田二丁目三〇―一 島田橋住宅三三〇 電話(052)737―二二	金剛 流 名古屋周屋会 岐阜周屋会 吉川 周子 〒460 名古屋市千種区西崎町三―一六 電話(052)761―1225七	景雲 会 国際能楽研究会(I・N・I) インターナショナル能楽インスティテュート (日本・カナダ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・フランス・台湾)	宇高 通成 乃会 宇高 通成 後援会 宇高 通成 〒606 京都市左京区高野泉町四〇 TEL(075)701―0793 名古屋事務所 前組英安方 TEL(052)852―1232四	名古屋 金春 会 林 鉄 郎 近藤 修 彦 渡部 道 三 伊勢 金春 会 中 村 富 次 伊勢市宮町一―四一―一七 電話(0565)245―六番	長田 驥 後援会 津市高野町三三三―一四六 電話(059)697―七番	喜多流 山 本 才 〒460 名古屋市千種区北千種3―3―10 合同宿舎千種東住宅30号 電話(052)712―1574番	宝生 哲 〒270 松戸市牧ノ原2の1 市営住宅一の番号 電話(0476)851―190番	能楽 講座 能と狂言に親しむ会 梅田 邦久 藤田 六郎 兵衛	高安 流岡 同門 会 高清水 坂水 康利 森野 晴 三 北田 耕 三 塩川 山 中藤 久湖 伊水 利久 村久 雅利 村久 雅利 伊水 利久 谷清水 雅利	幸友 会 涛 華 能 福井 啓 次 郎 福井 良 久 福井 良 治 柳原 富 司 忠	桂 後藤 孝一 郎 会	富 耀 会 柳原 富 司 忠 〒466 名古屋市昭和区山里町七―四 八事パークマンション5―15 電話(053)833―1031番 小鼓教室 名古屋市中区栄 朝日社社内(丸善前)	河村 総一郎 河村 真之介 〒466 名古屋市昭和区前山町一丁目三三 電話(052)761―148八二 河村 大 〒602 京都市上京区仁和寺街道千本西入 コスモトピア四〇二号 電話(075)462―141一五	吉田 定 男
-------------------------------	--	---	---	--	---	-------	-------	---	---	--	--	---	---	--	--	---	--	---	-------------	---	--	--------

演 能 案 内

第7回衣斐正宜後援会能

八月二十四日(土)午後一時始
熱田 神宮 能楽殿
ご挨拶と講演 後援会長 神津善行

敦

衣斐 郷志
水上 優
小倉健太郎
衣斐 正宜
盛 飯留 雅介
河村真之介
藤井啓次郎
藤田六郎兵衛

空

狂 山本 則俊
山本東次郎 山本 則俊

放下僧

宝生 英雄
河村総一郎

葵

山内 崇生
亀井 保雄
上 西村 欽也
高安 勝久
寛 敏一
鬼頭喜太郎
鹿取 希世

第32回大衆能

九月一日(日)午前十時半始
熱田 神宮 能楽殿

観世流 龍
壬方 山田龍之介
久田 徹二
西村 欽也
高安 信広
松田 高義

邯鄲

後見 小島 三津子
今沢 美和
地謡 八神 孝博
加賀 敏彦
黒田 高橋 昭一
梅田 邦久
祖父江 修一

金春流 仕舞

松 虫 加藤富貴子
地謡 前田 茂正
伊藤 幸夫

喜多流 仕舞

藤 戸 長田 曉
地謡 松井 郷

金剛流 舞踊子

井 筒 吉川 周子
後藤孝一郎
藤田六郎兵衛

和泉流 狂言

栗 焼 井上松次郎
井上 靖浩
後見 佐藤 友彦

宝生流 能

竹内 澄子
葛 高安 勝久
河村総一郎
大野 誠

玉

後見 戸田 博和
玉井 祐一
加賀山 敬治
鬼頭 正宜

観世流 仕舞

杜 若 三村 恵子
地謡 加藤 幸枝
近藤 幸江

和泉流 狂言

天 鼓 前野 郁子
地謡 高木 美智子

酔 董

井上礼之助
佐藤 友彦
後見 井上 祐一

観世流 能

團三郎 中川 雅章
鬼 王今村 嘉男
十郎 加賀 敏彦
五郎 高橋 敏一

夜討曾我

古屋 松山 幸親
五郎 九本 博
立衆 黒田 博
立衆 八神 孝充

能 組

後見 梅田 邦久
前野 郁子
地謡 須藤 保彦
祖父江 修一
大野 弘之
加藤 幸枝
小島 芳雄
祖父江 修一

附 祝 言

主催 能楽協会名古屋支部
後援 愛知県・名古屋市
前券二、〇〇〇円(全自由席)・当日券三、五〇〇円
市内各ブレイカイド・能楽殿・出演各楽師宅

鬼頭喜太郎舞台生活六十周年

記 念 能

九月七日(土)午前十一時始
熱田 神宮 能楽殿

神

歌 観世 喜之 八神 孝充

高

砂 観世 清和 河村総一郎
八段ノ舞 藤井啓次郎 藤田六郎兵衛

熊

坂 宝生 英照 山本 孝
福井 良久 寺井 啓之

杜

若 前野 三津子
近藤 幸江 鬼頭 宗久

船

弁 豊嶋三千春 牧野繁次郎
慶 塩津 哲生 小寺 佐七

野

守 橋岡 慈観 助川 治

山

姥 金森 孝介 飯森 友春

葛

城 本田 光洋 表谷清一郎

龍

田 泉 嘉夫 徳田 与作

小

塩 舞 徳子 河村真之介
衣 金剛 巖 後藤嘉津幸 寺井 啓之

羽

衣 金剛 巖 後藤嘉津幸 寺井 啓之

岩

喜多六平太 鬼頭喜太郎 助川 啓之
船 金春 信高 吉田 定男 鬼頭 好信

乱

双ノ舞 金春 安明 後藤嘉津幸 鹿取 希世

桶

の 酒 井上松次郎 井上 祐一
井上礼之助 後見 佐藤 友彦

姨

捨 西村 欽也 観世 元信

唐

船 片山九郎右衛門 小寺 俊三
藤田六郎兵衛

朝

片山 清司
浅井 文義
観世 鏡之丞

長

宝生 閑 寛 敏一 鬼頭喜太郎
大倉源次郎 藤田六郎兵衛

呉竹会

寛 三 男
寛 鉦 一

葵心庵舞台

尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
電話 〇五六一五〇(旭市役所内)
電話 〇五六一五〇(二三四六番)
電話 〇五六一五〇(六九八番)

長生会

鬼頭喜太郎
好 信

彰 諷 閣

名古屋市天白区植田西二八〇二二
電話(〇五二)八〇五三三〇一
連絡先 名古屋市中区鳴海町有松裏409
電話(〇五二)六二二一四三三八

大般若 鬼頭英二

愛知県中島郡平和町城西
電話(三六六)一九六〇番

助川 龍夫

〒453 名古屋市中村区下米野町3-127
電話(〇五二)四五二一四九六二

朝日カルチャーセンター

唯子教室
小鼓 後藤嘉津幸 一郎
丸栄スカイル10階

栄能楽舞台

名古屋市中区栄五十六一四
電話(二六二)一一八三番

楽諷庵舞台

名古屋市中区滝川町四七七八三
電話(八三三)七〇〇一 番

演能写真

ウシマド写真工房
〒602 京都市上京区北野上七軒
電話(三三三)一三三一 番

ビデオ撮影

西川 企画
〒451 名古屋営業所 名古屋市中区名駅
2-20-13 輪の内 小坂方
電話(〇五二)五七一一五八二六
〒460 岐阜市北野町20-1-2
電話(〇五八)九八六九番

日本能面巧芸会

名古屋市中区東区一丁目15番23号
チサンマンション栄リバー
ハイク八〇一
電話(三三三)九五三二一〇九二

能楽の友社

同人一同

【お断り】

暑中広告の掲載は紙面の都合にて勝手
ながら七月号、八月号に分けて掲載させ
て頂きました。願不同と併せ何卒ご理解
賜りますようお願い申し上げます。

紅梅記

金剛、金春、能、朝日狂言会

今年もう半年が過ぎた。六月末の宵月(旧暦五・二〇前後)が低くかかる。松葉の花が咲く。

まず、六月二日の山姥・大槻文蔵はみられなかった。これは文蔵氏の真価を問う一番であったので、まことに残念。どんな出来であったろう。今関西のシテ方で、長老を指して、みたい面々を少しくあげれば、片山慶次郎・山本勝一・大槻文蔵・金剛永謙(あひさのり)・金春徳高(異美氏息)の諸氏である。時たまの花としばしばは(つか)む花とのちがいはあろうが、時々接してその内容充実を知ることにもまた楽しい。関西には東京とちがう楽しみと期待がある。その層はひろく厚く、尊重さるべきである。

六日観世会。賀茂・梅若盛義、運小町・観世喜之。どちらも結晶の固い美しさを展開して佳。賀茂は前シテ慶次郎、後きびきびと鮮か。父鶴義氏の鮮かさは鋭と柔とを含んだが、盛義氏のそれは結晶の固さにゆえをみせる。運小町は、詩の中に男が女に抱く怨念を強く表わす。と言っても粗くはな

高氏能面研究会(佳作)。効果的。翌三十日金春能。新旧二番。新作能。佐渡は金春信高作、ワキはなし。晩年の世阿弥を少し(孫娘、金春神竹の娘)が弟子小太郎(トモ)に付き添われて、秋の一日、運路はるばると訪ねる。寂しい佐渡に明るさが射す。(紅梅記二月号関連、NHK謡曲放送)。夜を徹して語り合ひ、舞もみせ合う。「弘誓のうみに/法のふね/こがねの島のはのほのと/朝(あした)の空は茜さす(八ヶ里返し)」で別れたあと、笛が入り、大小のの中を立ちつくす。金島書の小文「世々のしるしに」が謡われ、合掌で結ぶ。今日の二番は共に合掌で終るが、その意味は異なる。世阿弥は老妻寿椿への加護、福路の安全、めぐり合ひの感謝を折つたのであろう。格調のある佳篇。シテ本田光洋、娘は少年が扮し直面。後見信高氏。

金春徳高(あひさのり)の義上は、一ノ松まで出て謡いはじめる。立ち姿から大きな美上の曲趣を汲み取る。後は切りの動き殊にあざやか。あれだけ大きく舞って而も崩れず。結び合掌も見事。狂言。長光(祐・松・弘)佳。なお共同社の録音(祐・松・弘)観世会)もおもしろかったので申し添える。

平成3年8・9月放送予定

- FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
[8月] 25日(日) 観世流「夕顔」山本真賀
[9月] 1日(日) 故人をしのんで(1) 観世流「粘」梅若万三郎
8日(日) 故人をしのんで(2) 喜多流「船井」喜多実・後藤得三
15日(日) 宝生流「俊寛」松本恵雄
22日(日) 観世流「井筒」片山九郎右衛門
29日(日) 宝生流「遊行」大坪十喜
TV祝日能(午前9時より教育テレビ)
16日(月) 日光輪王寺新能「小僧」観世栄夫「石橋」梅若盛義
23日 故人をしのぶ「通小町」後藤得三 独吟「熊野」梅若万三郎「道成寺」桜間金太郎・森茂好

観世会定式能(四回)

- 九月八日(日) 十二時半開演
熱田神宮能楽殿
井筒 梅若六郎
指波雅之助 筑紫敏一
福井啓次郎 藤田六郎兵衛
間 井上礼之助
後見 武田邦弘 地謡 加藤保彦
山本勝一 高橋敏一 祖父江修一 小島一英

名古屋宝生会定式能(第35期)

- 九月十五日(日) 午後一時始
熱田神宮能楽殿
龍 玉井博祐
田 飯沼雅介 吉田定男
杉江元 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎
後見 竹内澄子 地謡 加藤保彦
平子 稲葉山 通夫 石黒孝
稲葉山 藤治 辰巳巳郎 石黒孝

名古屋観世九臈会定例能

- 九月二十一日(土) 午後一時始
熱田神宮能楽殿
丸 飯沼雅介 河村真之介
杉江元 佐藤友彦 柳原富司忠
後見 佐々木勝雄 地謡 高橋保彦
高橋保彦 高橋保彦 高橋保彦
塗 井上松次郎 後見 井上礼之助
丸 飯沼雅介 河村真之介
杉江元 佐藤友彦 柳原富司忠
後見 佐々木勝雄 地謡 高橋保彦
高橋保彦 高橋保彦 高橋保彦

名古屋能楽鑑賞会公演(第4回)

- 九月十四日(土) 午後二時始
熱田神宮能楽殿
狂言 大名 野村万之丞 野村良介
梅田邦久 野村又三郎
卒都婆小町 中村弥三郎 山本博明
中村和夫 曾和博明 杉市和

名古屋観世九臈会定例能

- 九月二十一日(土) 午後一時始
熱田神宮能楽殿
丸 飯沼雅介 河村真之介
杉江元 佐藤友彦 柳原富司忠
後見 佐々木勝雄 地謡 高橋保彦
高橋保彦 高橋保彦 高橋保彦

能盛

- 仕舞 大江山 衣斐正宣
丸 佐藤耕司 地謡 辰巳四夫
是 野南 辰巳潤次郎 吉田俊彦
久 飯沼雅介 筑紫敏一
西村勝久 福井啓次郎 鹿取希世
高安勝久 井上礼之助
後見 玉井博祐 地謡 石黒孝
戸田和 中島静男 辰巳正宣
佐々木博雄 久野幸三 馬場富四夫
佐藤友彦 井上礼之助 鬼頭喜太郎

能女郎

- 竹内澄子
高安勝久 鬼頭喜太郎
大野 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
後見 鬼頭喜太郎 地謡 高橋保彦
高橋保彦 高橋保彦 高橋保彦

能盛

- 菊 慈童 武田宗和
松 風 山本勝一
女 花 山本順之
阿 瀧 藤波重和
野村又三郎
高安勝久 河村大
野村四郎 柳原富司忠 鹿取希世

能盛

- 仕舞 大江山 衣斐正宣
丸 佐藤耕司 地謡 辰巳四夫
是 野南 辰巳潤次郎 吉田俊彦
久 飯沼雅介 筑紫敏一
西村勝久 福井啓次郎 鹿取希世
高安勝久 井上礼之助
後見 玉井博祐 地謡 石黒孝
戸田和 中島静男 辰巳正宣
佐々木博雄 久野幸三 馬場富四夫
佐藤友彦 井上礼之助 鬼頭喜太郎

能盛

- 仕舞 大江山 衣斐正宣
丸 佐藤耕司 地謡 辰巳四夫
是 野南 辰巳潤次郎 吉田俊彦
久 飯沼雅介 筑紫敏一
西村勝久 福井啓次郎 鹿取希世
高安勝久 井上礼之助
後見 玉井博祐 地謡 石黒孝
戸田和 中島静男 辰巳正宣
佐々木博雄 久野幸三 馬場富四夫
佐藤友彦 井上礼之助 鬼頭喜太郎

能盛

- 仕舞 大江山 衣斐正宣
丸 佐藤耕司 地謡 辰巳四夫
是 野南 辰巳潤次郎 吉田俊彦
久 飯沼雅介 筑紫敏一
西村勝久 福井啓次郎 鹿取希世
高安勝久 井上礼之助
後見 玉井博祐 地謡 石黒孝
戸田和 中島静男 辰巳正宣
佐々木博雄 久野幸三 馬場富四夫
佐藤友彦 井上礼之助 鬼頭喜太郎

TEL 052-611-3659

◆ 水無月の舞台から ◆

「観世会」「宝生会」「能を楽しむ会」 「名古屋金春会」へ「佐渡」特別公演会

竹尾邦太郎

「賀茂」シテ盛装・ツレ厳二。
濃い緑陰、清冽な流れを一セイから上歌にイメージする連舞が上々で、ハ神に歩みを進め身の、舞りのない心が如何にも満ち足りて、連舞によくあみがある。そして、神寂びた庭に鮮やかに映える白羽ノ矢、それが霞わたたすまいにけ、却って原始の力強さを印象づけてワキに畏敬の念を起させ、返り、シテ・ワキ(飲也)問答の神妙もよい。アハ一、立シハベリ・三段ノ舞の生真面目。

後場は先ず露払い役の天女・雅章が舞う。袖摺りや扇の扱い少々粗いが、舞上げて更に地(保利・邦久ら)の詞章に添って舞う型の中、はずみとる装束を潤す、と扇で袖に水を掛け、その袖掲げや滴りを真近に見るような型に涼気を見せた。後シテは唐冠・赤頭(四手附)・泥飛出。舞飾は雷鳴の家快味よりはむしろ稲妻の切れの良い鮮烈味。ハ光り稲妻の、稲葉の露にも、と跳び上りさまの粗落シヤ、キリ、天によび登る姿そのまま、ハ神も天路に、と三ノ松へ降り行くところなど、目覚しかった。(1時間24分)

「千鳥」馬に曳かせた米の到着が遅い、とアド酒屋・札之助の氣を持させるシテ太郎冠者・友蔭、何とか策略を凝らし、酒を手に入れようとする努力はみられるが、一樽を巡る駆け引きのゲームに自らのめり込んで来しむ、といった気分は少々不足。主・弘之との関係にゆとりが無い所為か。(38分)

「通小町・雨夜ノ伝」ツレ邦久。面深井・横浅黄・白摺箱(露芝)・茶地無紅(秋草文様)唐織に浅黄縷水衣を着た。木の奥返し(葛久・邦弘ら)との掛合はさらさらと進むが、夏安居のワキ僧・宗二朗に素性問われるや、一瞬時が停まり、視線外すかに直すと顔を伏せ、ハ恥かしや己が名、となるどころ、肩をすはめて消え

入らなばかり。背に昔の色香留めのような表情の中人が氣を惹く。後は小面・横赤・白摺箱・赤地(沢瀉桐花文様)唐織の色香芳々の小町。受戒を願う小町と呪詛をシテ喜之は幕内から除々と呪詛を投げかける。金縛りに合い幕を凝視するツレは、シテ器を全部開く、と解き放たれたように直すが、ハわれわれは登らじ心の月、とワキにアハシラツて、(ハ出てお前に)帛はれんと、と腰を振って薄押し分けるかに一・二歩出るところは挑発的。ハ包めども我も、と出るシテは、黒頭・瘦男・横白浅黄・白練・灰色指貫大口・褐色縷水衣(露白)肩。ツレを引き留めるところは右袖に手を添えるほどのこと、幕内の威勢はいさかえば心憂えて落魄ぶりが痛々しい。ハ涙の雨か、とスミで笠をかざすと立廻。舞台一巡、シテ柱に激しく突き当たると笠を取り落し、倒れて笠を探ると拾って安座。(近頃は笠をひしやける程に柱によつかるのが流行か。以下、氣息次第に整え、九十九夜と折り残した小指を目の前にかざして凝視するとき、暗い過去は消えて後一日と心弾む機微を、喜之さりと見せた。(60分)

6月9日・観世会

「清仲」一概に君には忠、親には孝、とは言え、命(子方幸壽)投げ出して主君(ツレ清仲)の子(子方幸女丸)の身替りとなり、父(シテ仲光)に斬られてその苦衷を救う、という大時代的なテーマが今の世に受け容れられる筈もないが、見所はそれ程白けもしなかった。見所の、平均年齢の高さから来る回顧的感傷もさることながら、「勉強しないと斬られる」ともあったのだよ」という、不勉強な現代の若者達へのメッセージとしての今日的意義があるのかもしれない。にしても、学園修業とて所詮は軟弱な所行、それを怠ったからとてあたり赤子を斬ると

は言葉道断、と第二次大戦中なら追扱し吸われ上演禁止もあつたのではなからうか。

さて、シテ幸・ツレ雷四夫のコンビは思ひっきり感情を押し殺し、芝居に置きぬ様式美の実現を目指してそれは或る程度成功したが、奈何せん直前物、子方(多田奈津子・早都子姉妹中々よくやつた)との年齢差言うのではないが若い父親仲光のもつ客気のようなもの感じられず、冷静な古武士の印象拭いきれなかった。なお、男の途中、唯子が鎮まり左袖返すとツレを見込み、正中へ出て一呼吸。そこで扇を落とす拾って正先へ膝行したが、吾子の首を刎ねた当て握りの皮肉のよう面白かった。(60分)

「鎌倉」鎌倉時代末、斯道中興の祖とされる鎌倉住の刀工、岡崎五郎正宗の鍛冶法になる刀剣は相州物と称し、弟子に名工数多輩出したという。されば息子子の元服の差利鍛つたため、鋼の値を聞きにシテ太郎冠者・祐一を鎌倉に遣るアド主・松次郎。怪しいと思ながらも早合点して鎌倉の寺々を鑑の音を聞きに行く太郎冠者は憎めない。

鎌倉は壽福寺が笛柱で「コトイシ」と堅く、円覚寺はワキ柱で「パアーン」と上調子。極楽寺は目付柱で「ジャン・ジャン・ジャン・モーン」の余韻細く上々。最後は建長寺で、広い境内を探すと、「つーつとあれに在る」通り、ハ松先の住。橋邊で頼くも珍らしく、音は破れ鐘の「ビシヤビシヤビシヤ」で、五山第一の面目が往々にみせる卑れた小賢しさが無く、だからこそ叱責はされても何れ主の覚え直ぐ戻るであろうと思わせるほのほの味があつた。(29分)

「半番」シテ和。前は何とならん半掛しくしやくと柔らか見えれず、はかなげな風情があつた。後シテは白長絹・緋大口・半番を押上げるのは、観世の逆でシテの左側。後見は任せて型だけける。観世と異なり、後見の持つ支竹にシテが左手添えて自分で開けるか具象であるが、支竹を探り、それに手をすべらせたあたり少々煩

い。ハ今も導き、とワキ雅介に向き、ハそぞろに、左袖でシオル刃の情感はクセ地(雅・博祐ら)と相俟って寂寥感があり、ハあの花折れと、と大小前から扇を開いて半部の下へ行き、花を受ける型は良かった。序ノ舞は、大輪の夕顔の花片、葉脈を透かせる葉を、涼風にそよがせるイメージ抽象化すると思うが、袖扱いに流麗さ不足の上、陰翳を表現する袖を抜くことも無く、舞を平板にしてた。袖を被いて後退りに半部の下に入る型も当然なかつた(宝生では無いのか)。キリは、ハ半部の、と作物に入り、出る時同様後見の助けで自分で閉めた。(1時間18分)

「藤戸」シテ実照。前シテは曲見を掛けた。吾子を殺された深い悲しみの虚ろな表情が、いさか殺した当事者のワキ佐々木盛綱・敏也と対面するや、次第に自決心を失い、シオリを重ねる度にな弱く、シオリを重なる度に心弱くなつてゆく過程が、一転狂気の激憤に昇りつめてワキに迫る描写が凄く、心うたれた。即ち、地(幸・富四夫ら)の、ハ海士この世を去りぬれば、とがつくり安坐すると双シオリ。シオリ解くと、ハとてもの愛身と、と左へ抱うように見、ハ亡き子と、と立つや、ハ同じ道になして賜はせ給へと、双手を掲げてワアアアというふうに棒のようにワキに倒れかかった。それを無情にも強く払い除けるワキの毅然とした態度もまた立派だった。後シテは瘦男。ハ千尋の底に、と静かに沈んで安座するところから、切地の具象的な型の連続にか、就中、ハ龍神の水神となつて恨みをなさんと、とワキに近づくと迫るところなど、英照手堅く見せて充実していた。(1時間11分。6月16日・宝生会)

「小鍛冶・白頭」「能を楽しむ会」も八回目。かつて、跡左衛門・幾三郎や当地の長老、仁三郎は金剛定期能があつたが、目下は今回のシテ高橋成俊が後援金組織に乗り孤軍奮闘である。舞金剛の伝統を守る一方、語学に堪能と聞く通成は、外国人の弟子も取り立てて能の国際化にも尽力する。さて、前シテは小書で尉。地(三千春・恭蔵ら)との掛合に草

確ノ劍の故事を説く仕方の繊細は型の一々によく表現されるが少々ケレン味が勝る。特に中入、地の詞章もそうだが如何にも思わせぶり、ハ通力の身を委ね、の返して立ち、ハ御力を添へ申すべし、とワキ宗近・茂十郎に見栄を切るかの所など、大向うから声が掛りそうである。

後シテは、ハ只今の宗近に、の地に裡に三ノ松に姿を現わし、ハ警備を捧げつつ、と頭を取ってワキを見込み、獣足で後向きに一旦幕に入る、と早急で千鳥掛にハ松キを見込んだところは、白拾衣の(袖折込)エモンに着け、白地摺箱の両袖ピンと張って獅子のようだった。泥小飛出は新面、劫を経た感はないが、神聖の雰囲気を出したの通成の力量。きびきびした舞動に舞金剛の本領を発揮し、キリは、ハまた霧雲に飛び乗りと、膝行して三ノ松に走る、と拍子踏み、両袖張つた姿で地を聞いてトめた。鮮烈な舞台だった。(58分。6月29日)

「佐渡」金春宗家の新作。初演は宗家自身が勤めた由だが今回は光洋。佐渡配流の世阿弥(光洋)を孫娘(鬼頭尚久)が供(高橋恵)と導き、舞を舞って慰めると、世阿弥は能の長久に思いを馳せて序ノ舞を舞う、という。世阿弥シテの能は、先に片山博通作「世阿弥傳」(昭和38年3月、世阿弥生誕六百年記念第八回中日五流能初演)があるが、何れもワキが出ないのも妙。

さて、「佐渡」、紺の引廻の菓屋が大小前に置かれ、ハメ尚久・トモ忍をアハ所ノ者・友蔭が案内してシテに引き合わせる。一見「景清」に似るが、老練個屈な武将を遇する里人をワキが演じる分「佐渡の方に優しい情趣がある。シテは面小町・唐帽子・白垂。祝斗目(中格子)・褐色縷水衣。その目。(50分。6月30日・金春会)

「葵上」シテ晃実。金地に杖垂桜風文様の豪華な唐織を並折り凄絶な姿。ハ華やかなりし身なれども、の詠嘆の深さは口唇をえらなく、「今は打たで、とすくと立つタイミンが絶妙だった。後シテは、「如何に行者」と右膝着いて睨め上げ威嚇するところ、ワキをたじたじとさせる迫力。全てにスケールの大きなシテ。(50分。6月30日・金春会)

第10回 日本能面巧芸会
日本能面巧芸会は、「第十回新作能面展」を八月二十八日から九月一日まで名古屋博物館で開催する。愛知県教委、名古屋市長、名古屋教委、名古屋十回を記

ういえば、先代桜間金太郎に贈つたという虚子作「與ノ細道」のシテも唐帽子だったが、入江美法の創作面、芭蕉を掛けて効果を上げたと聞く。そしてこれも、光洋亡父秀男が、昭和36年4月、第六回中日五流能で名古屋初演というのも因縁である。では、この曲のテーマは何か、と言えは、「景清」的人情味では決してなく、ヒメの舞や自身の序ノ舞もむしろ肉付けに過ぎず、猿楽の奥義究めんため求道の方法論だということである。されば、謡を客観的に心に聴き、舞を客観的に心で視ること、即ち「離見の見」をくどく言うのである。よりも直さずそれは世阿弥を過仰し、この道のパイブルとしたい作者の気持であるだろう。話が出来た。舞台は、真面の少年尚久君の達者なヒメの活躍が光り、ハ月に返す舞の袖、始まり、ハひたすら月に返す舞の袖、ハワキで終る序ノ舞に光洋陰翳の微妙を見せ、キリでは、ハいつしかに、と退つたシテが、ハ今宵限りの、と安坐して、ハ夜は更ける、感懐を反芻するところへ、鬨々と一管(六郎兵衛)がアハライ、実に効果的だった。トメは打切で目付柱に一足詰めて放心佇立。ハ黄金の鳥のはのほのほと、と微かにテラシ、ハ朝の空は茜さす、と一足引いて合掌しながら下居の後、返して立って唯子がトめた。余韻上々。(1時間18分)

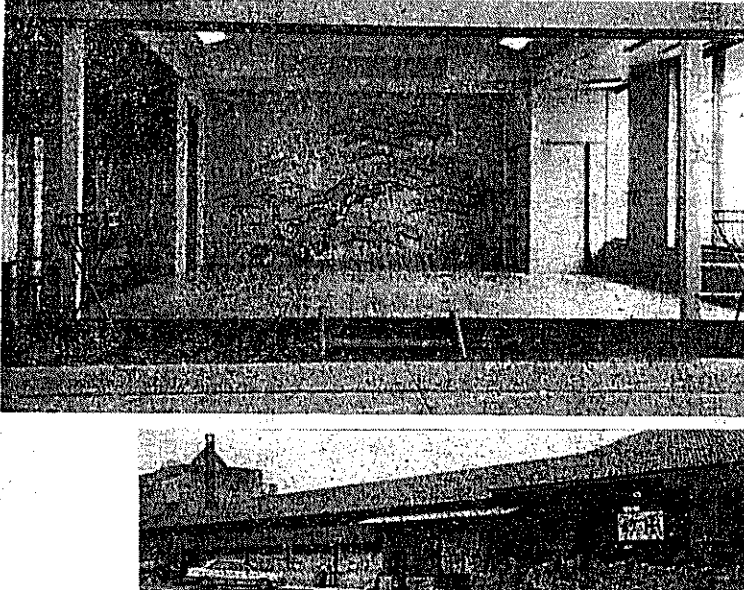
幽玄の空間.....

大広間つき 能楽式舞台

知多半島の高峯山を背景に伊勢志摩を一望できる海辺に面し、純和風の趣きに満ちた「妙膳」に72畳の大広間をもつ能楽式舞台が完成しました。四季折々にまごころこめた海の幸のおもてなしとともに能会、ご社中会のご利用をお待ちしております。

知多半島 海 内 宿 味 づ 3 軒 膳

(シーサイドプリンス新館)
愛知県知多郡南知多町大字内海小村40
TEL <0569> 62-1311 (代)



流元 剛行 金流 流宗 世本 観宗
檜書店
 〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
 電話 03(3291) 2488-9 振替東京3-3552
 〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
 電話075(231) 1990 振替京都1-113

能楽の友

発行 能楽の友社
 名古屋市中区千種区千種2丁目18-18
 (郵便番号 464)
 電話 (731) 7984
 振替口座 名古屋 0-36393
 送料 1年 1000円
 郵送の場合 1年 1500円
 印刷部 90円

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

(9月)	21日(土)	九草会定期能	(有料)
	22日(日)	和泉流狂言大会	(来場歓迎) (番組④面)
	23日(祝)	鳳鳴会大会	(来場歓迎)
	27日(金)	中日文化センター芸能発表会	(来場歓迎)
	28日(土)	中日文化センター芸能発表会	(来場歓迎)
	29日(日)	郁風会大会	(来場歓迎) (番組①面)
(10月)	5日(土)	花会大会	(来場歓迎) (番組①面)
	6日(日)	名古屋泉楽会	(来場歓迎) (番組②面)
	10日(祝)	武田会	(来場歓迎) (番組②面)
	12日(土)	猪俣会	(来場歓迎) (番組③面)
	13日(日)	邦幸会	(来場歓迎) (番組④面)
	20日(日)	清淵会	(来場歓迎)
	26日(土)	秋季淡交会	(有料)
(11月)	2日(土)	重福会20周年記念会	(来場歓迎)
	3日(祝)	奉文会秋の会	(来場歓迎)
	4日(休)	観修会大会	(来場歓迎)
	9日(土)	名古屋観世会	(有料)
	10日(日)	名古屋観世会	(来場歓迎)
	16日(土)	具生会	(有料)
	17日(日)	和泉正会	(有料)
	23日(日)	久田会	(来場歓迎)
	24日(日)	青陽会	(有料)
(12月)	1日(日)	歳末助け合い協賛能	(有料)
	8日(日)	登泉会	(有料)

(演能変更の節はご了承下さい)

名古屋市民芸術祭91協賛 伝統芸能鑑賞会

10月4、5日 能「景清」と狂言

名古屋市民芸術祭協賛(文化基金事業)の一「伝統芸能鑑賞会」が十月四日、五日の二日間、名古屋市東区英の名古屋市芸術創造センターで開催される。

この鑑賞会は、名古屋市民文化事業部と能と狂言に親しむ会が主催、市民文化の興隆と振興をめぐし、伝統芸能を一般の方々へ低料金で鑑賞してもらう機会を提供、能と狂言の会は観世流シテ方梅田邦久師、藤田流道方宗家、藤田六郎兵衛師が能楽の普及と幅広い能楽鑑賞の活動をこれまで多方面で活動している。今回もこうした企画として名古屋市民芸術祭に協賛第一夜は能「景清」、第二夜は狂言三番が上演される。演出・藤田六郎兵衛氏。

演能は次のとおり。

【第一夜】十月四日午後七時開始 解説「景清について」藤田六郎兵衛氏

能「景清」松門之出(シテ梅田邦久、ツレ味方玄、トモ久田徹二、ワキ西村欽也、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・柳原富司、大鼓・河村総一郎、後見・片山慶司郎、武田欣司、地謡・片山九郎右衛門、武田高・大生七郎。

狂言「景清」は、尾張徳川家に抱えられた狂言和泉流の伝統を受け継ぎ発展させるために今年より百年前の明治二十四年(一八九一年)に設立され、伝来の能楽や道具類を共同保管し、伝統芸能の発展と子弟の育成に大きな役割を担っている。

名古屋徳川美術館で開催 特別展と狂言の会

名古屋狂言共同社の創立百周年を記念して

名古屋徳川美術館の創立百周年を記念して、「狂言装束と狂言面」の特別展が八月三十一日から九月二十九日まで名古屋・東区徳川美術館で開催されている。

展示は狂言共同社所蔵の装束と狂言面、四君子文様肩衣、萩に琴文様肩衣、白紗綾形地重菊文様袴、向鶴文様直垂、紅紗綾形格子地に瑞雲と鞠巴文様厚板、狂言面では、黒色刷、伯藏主、乙、猿、武悪など。入館料一般千円、高・大生七円。

また創立百周年記念公演として「狂言の会」が九月二十三日(祝)午後一時半から徳川美術館講堂で開催される。曲目は「蚊相撲」ほか。会費は千五百円。(入館料は含まれていない)

名古屋狂言共同社は、尾張徳川家に抱えられた狂言和泉流の伝統を受け継ぎ発展させるために今年より百年前の明治二十四年(一八九一年)に設立され、伝来の能楽や道具類を共同保管し、伝統芸能の発展と子弟の育成に大きな役割を担っている。

和泉流狂言大会

九月二十二日(日) 十一時始
熱田神宮能楽殿

狂言組	足立米子	主人 林朝子
次郎冠者	能登香江	録倉万富田 智之
太郎冠者	北中宇多子	妻 佐藤友彦
中北宇多子	田 昭典	父 井上靖浩
小舞	道明寺 田辺 文彦	
魚説法	新発意小柳 保志	櫻 那小柳 悠志
雷	藤田 茂樹 医 者加藤 弘	
七ツ子	林 朝子	
宇治の音	中北宇多子	
名取川	鼓 三郎 石黒 生子	
盆山	男 せき 勝子	何 某 能登香江
茶壺	スッパ 鼓 まり	中国の者 石黒 生子
狐塚	太郎冠者 二村 敬勝	目代 鷺見 政行
素袍落	太郎冠者 長谷川寿美子	次郎冠者 富田 智之
仁王	博奕打 コラ・フオ	主 伯 浅野由記子
	ルクマル	人 中西 純子

(足不自由者 林朝子 文彦 藤田 茂樹 鷺見 政行 藤田 茂樹 鷺見 政行 藤田 茂樹 鷺見 政行)

郁風会大会

九月二十九日(日) 午前十時始
熱田神宮能楽殿

連吟菊 蓮 蓮	
吉野天人	福島 中子
小袖曾我	米田 真理 豊島 慎一 天野 到

名古屋幽花会秋季大会

十月五日(土) 午前十時始
熱田神宮能楽殿

番外 巻	絹片山慶次郎	河村真之介 助川 龍夫
熊坂	浜田 国松	林 光寿 帆足 正規
花籠	比江島孝子	杉浦健之祐
仕舞 下	野村 蘭子	藤原美哉子
高野物狂	伊藤やす子	
葛野 上	斎藤 昌平	
雲雀	山 具谷川宏之	河村真之介 助川 龍夫
仕舞 碓	林 光寿	帆足 正規
ナリ村木 玲子		
ヤス村川喜久子		
寛 宮崎 昌子		

富士太鼓

野口千鶴子	忍田チヨ子
鈴木 京子	石本 純子
盛クセ	水野 臣子
月ケセ	赤尾 正
足立 菅子	森田 玉恵
竹腰 英子	
丸 文	田畑 鞠子
小西 年子	
川島 えい	
岸本 菊枝	
星野 路子	小田切敏子
吉川宇良子	吉田 定男
清水 松子	福井啓次郎
輪 徳子	福井啓次郎
紅葉 狩	江川恵美子
渡辺 郁子	福垣つね子
大島寿美子	
上 門脇 千鶴	下川 直長
松山 幸親	
忍田チヨ子	吉田 定男
柳原富司忠	大野 誠
鬼頭英二	大野 誠
福井啓次郎	大野 誠
鬼頭富司忠	大野 誠
上田 貴弘	
久田 徹二	
佐藤 謙	
鬼頭英二	鬼頭喜太郎
鬼頭富司忠	大野 誠

秋月雅日記

(121)

秋茜に出逢うころ

えと文 二井栄逸

九月になると、白露(はくろ)はすぐ訪れて参ります。仲秋といふのは白露(九月七日頃)から寒露(十月八日頃)までの時期をいいますが、山の秋は里より早く、九月も末になると、冷えこんでまいります。霜が降りますと、たかとうだいが美しい照葉になつたり朝霧がそこはかとなく緑側にはいつてきたり、昔、鈴鹿の山に籠つたことが思い出されてなりません。

九月中ごろの高原は殊の外すがすがしく、青空は深く澄んで深い色を見せます。秋風を受けてそよぐ秋の七草はいつみても美しいものですし、又、

又、白露が過ぎる頃になると、もう一つ楽しいことがあります。それは澄んだ空にいかにも似合う赤とんぼが山から降りてくることです。赤とんぼにも種類は多いのですが、その中でも鮮紅色の装いで

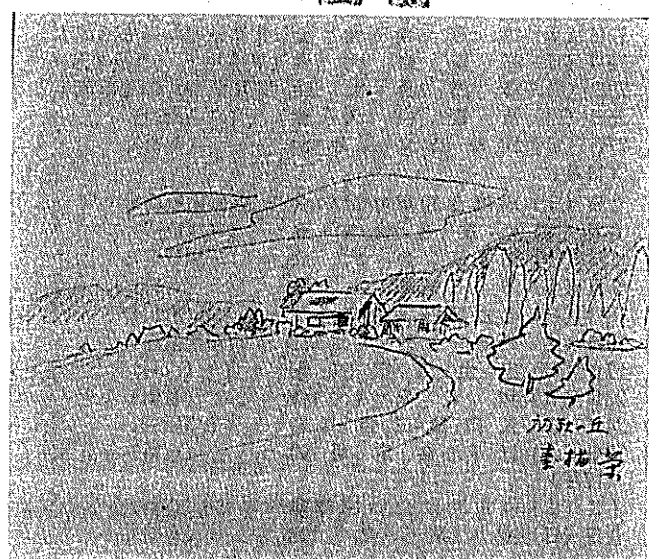
吉川周子師岐阜市立女子短期大学定年退職記念

金剛流能楽大会

11月10日 岐阜市中央青少年会館

金剛流シテ方・吉川周子師は、岐阜市立女子短期大学教授として多年にわたり教職にあつたが、このたび定年退職にあたり、これを記念して、錦秋十一月十日(日)岐阜市京町の岐阜市青少年会館大ホールで「金剛流能楽大会」を開催、吉川師は能「井筒」を所演する。吉川師は、短期大学の教職を三十五年間つとめ、そのほとんどを岐阜市立女子短期大学の教育に携わり、その間、能楽クラブをつくり、多くの教員を送り出している。定年退職記念の能楽大会が催されるにあたり「人間形成の一助にとただひたすらに指導に当たってきました。専門の学問と能楽の接点をいろいろとどうにか教育者として幸せであり感謝して

います」と語っている。能楽大会の演能は次のとおり。
〔第一部〕(午前九時開始)岐阜市立女子短期大学能楽クラブ員、李川会員(岐阜市立女子短期大学能楽クラブOG会)、周屋会会員、金剛流流友による舞臺子、仕舞、連吟。
〔第二部〕(午後一時開始)あいきつ、岐阜市立女子短期大学学長・小瀬洋喜氏。解説、岐阜市立女子短期大学教授・辻宏一氏。仕舞「田村」(廣田泰能)「杜若」(宇高通成)「班女」(アト)「重本昌三」(熊坂)「豊鶴三千春」(シテ吉川周子、ウキ高坂真弘、笛・大野誠、小鼓・



をこらすのは秋茜(アキアカネ)でしょう。六月下旬頃、池等で羽化して高地に移り、夏をやり過ぎて秋の訪れと共に山から群れをなして降りてきます。能の中にも秋草をあしらった謡曲文が随所にありまして、九月の後藤孝一郎、大鼓・吉田定男、間・野村信行)後見・広田泰三、広田泰能、地謡・豊嶋三千春、重本昌三、宇高通成、湧永健治、百々康治、小林忠三、指導・金剛流)主催、周屋会(名古屋・岐阜)李川会、岐阜市立女子短期大学能楽クラブ、吉川周子。後援、岐阜市立女子短期大学、岐阜市教育委員会、岐阜県芸術文化会議。

舞台からの名演技を名筆で描く……
二井栄逸師画抄集 ▶ 予約締切迫る ◀
92 能画カレンダー
ご好評を頂いております能画カレンダー1992年版。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の新作美麗カレンダーです。
◎ 予約特価 1部 1500円、郵送の場合送料とも1部1850円(2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律500円、例・3部の場合送料とも5000円)
◎ 予約申込み期限10月20日(それ以後は1部2000円、但し部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい)
◎ お申し込み方法 ハガキで部数明記のうえ当社へお申し込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。(電話での受け付けはいたしませんのでご理解下さい)
申し込み先 能楽の友社
〒464 名古屋市中区千種区千種2-18-18
振替口座 名古屋 0 - 36393

〔御来場歓迎〕
〔面園花会番組つき〕
素謡野 宮 波方 晃 三上 文夫
仕舞弓 八 福 岡本 耕蔵 数 盛クセ 小沢 宣子
半 藤キリ 和代 千代 浮 舟 中島 佳子
舞臺子 小 督 村木 玲子 河村真之介 帆足 正規
百 萬 村川喜久子 林光寿 帆足 正規
素謡弱法師 松枝真太郎 落野 正 帆足 正規
三井寺 子 津田 碩雄 宮崎 晃吉 長谷川宏之
舞臺子 玉 登 松久 祐子 河村総一郎 帆足 正規
松 虫 比江島孝子 河村総一郎 帆足 正規
仕舞六 浦キリ 石原 雅子 杜 林光寿 若キリ 富田 フク
阿 崎道行 小泉いく子 龍 太 鼓 清水チヅエ
村木 寛茂 東山 清和 帆足 正規
能天 鼓 西村 敏也 河村総一郎 帆足 正規
弄鼓 野村又三郎 林 光寿 帆足 正規
番外仕舞部 野村又三郎 片山 清司 帆足 正規
松 風 片山九郎右衛門 帆足 正規
野 守 片山 伸吾 帆足 正規
附祝言 主催 名古屋幽 片山 慶次郎 帆足 正規
〔御来場歓迎〕
〔終了予定 六時頃〕

名古屋泉楽会秋季大会
十月六日(日)午前十時始
熱田 神宮 能楽殿
素謡半 番 段 観世 喜正
深見 しげ 中野 宜夫
山 姥 岩井 比佐 外山 圭一
舞臺子 敦 盛 太田 正子 河村総一郎 帆足 正規
狸 々 後藤 新蔵 寛井 敏一 帆足 正規
素謡采 女 加藤けい子 五木田三郎 帆足 正規
粟田 純子 後藤孝一郎 鹿取 希世
能巴 問 西村 敏也 後藤孝一郎 鹿取 希世
井上 祐一
素謡木 池田 高橋 取一 観世 喜正
義伸 観世 喜正
定 曾 矢橋 浩吉
浅井 健二 五木田武計
舞臺子 藤 戸 深見 一枝 寛井 敏一 帆足 正規
野 守 外山 圭一 河村総一郎 帆足 正規
ツレ 観世 喜正 後藤孝一郎 鹿取 希世
奈倉 早苗
能蟬 丸 西村 敏也 河村総一郎 帆足 正規
福井啓次郎 藤田六郎兵衛
素謡実 盛 諸隈 良吉 山田 延恒 加藤 保彦

武田謳楽会秋季大会
十月十日(祝)午前九時十五分始
熱田 神宮 能楽殿
舞臺子 郡 橋本 とも 後藤孝一郎 鹿取 希世
パンシキ 姥 深見 しげ 河村総一郎 帆足 正規
立廻り 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
番外祝言仕舞部 慈 童 観世 喜之
〔終了六時頃〕
主催 名古屋泉楽会
主催事務所 名古屋観世九事会
〒470 名古屋市中区元塩町一丁目一七(加藤保彦宅)

〔御来場歓迎〕
素謡求 塚 花輪 一枝 武田 欣司
能安達原 西村 敏也 寛井 敏一 帆足 正規
飯富 雅介 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
野村又三郎
仕舞大江 山 梅田 弘子 祐 上野 典子
歌 占クセ 並河 益子
舞臺子 羽 衣 小牧 大助 寛井 敏一 帆足 正規
和合之舞 鬼頭 英二 鹿取 希世
絹 高木 宏子 柳原富司 鹿取 希世
吉井 順一 鹿取 希世
番外仕舞部 士 武田 邦弘 柳原富司 鹿取 希世
舞臺子 海 武田 邦弘 柳原富司 鹿取 希世
主催 武田 邦弘 鹿取 希世

〔御来場歓迎〕
素謡土 蜘蛛 村 中島 康夫 吉川 三郎
林 留三 坂 毛利喜久男
仕舞吉野 天人 小林 直子 東 毛利喜久男
三 精 太田ふみ子 輝 丸 九 鹿谷 民恵
舞臺子 敦 盛 大塚 幸二 河村総一郎 帆足 正規
雲 林 院 小林富美代 河村総一郎 帆足 正規
郡 耶 高橋 千紗 河村総一郎 帆足 正規
北田 尚子 野中 淳子 天 口キリ 松陰 真澄
能花 月 西村 敏也 河村総一郎 帆足 正規
後藤孝一郎 鹿取 希世
野村 信行
度 渡辺 一彦 鬼頭 英二 鹿取 希世
城 今村 香 柳原富司 鹿取 希世
大和舞 柳原富司 鹿取 希世
村主美知子 寛井 敏一 帆足 正規
笑 小瀬古喜代子 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
今沢 美和 栗 藤田六郎兵衛
花輪 一枝 武田 欣司

四代目尾張藩主徳川吉通は、綱吉の十番目の子供で、綱吉の死去にもなつて、家督を継ぐことになる。治政期は、元禄十二年七月十一日(一六九九)から正徳三年(一七一三)七月二十六日の十四年間である。この治政期の幕府將軍は、綱吉・家宣・家継にまたがっている。

綱吉の能狂いは、相変わらず続いており、元禄十四年九月十九日の「徳川実紀」には、猿楽者西村庄右衛門能重以下七名を、廊下番として召し抱え、城中の私的な演能を勧めさせている。

同じ元禄十四年の十二月にも、猿楽者秋岡勘兵衛某以下五名が廊下番として召し抱えられている。宝永三年四月十日には、「猿楽幸五郎兵衛某、倉谷武右衛門武正、和田安兵衛持義召出され廊下番に加へらる。幸五郎は、倉谷は福田と改む」とある。表面は、武士として取り立てるために、猿楽者の名前を武士らしく改めることもしたうえで、幸五郎兵衛某は、幸流小波方の先祖が、宇治猿楽の出自であることから、宇治と改名したのである。同年四月二三日にも「狂言師馬場弥一郎幸利、名女川六右衛門政章召出され廊下番に加へられ、馬場は平野、名女川(なめかわ)は近藤と改む」と記されている。

尾張藩の能の歴史(七)

網吉の宝生流好みも相変わらず続いており、その影響からか、加賀の前田家は、元来は、金春流が主流であったが、元禄五年(一六九二)に「宝生大夫九郎友春の次男、吉之助(後に幕内)を、加賀藩の江戸の大夫として召し抱えてから宝生の勢力が、次第に金春を圧倒するようになる。

尾張藩でも、始めは、金春流が主流であったが、四代尾張藩主吉通の治世期に入ったが、元禄十六年に、元来は、金春流シテ方であった田中半平を、主命によって宝生流に転じさせている。以後、尾張藩では、金春流と宝生流が同格になって演じられるようになる。

網吉の能狂いは、相変わらず続いており、元禄十四年九月十九日の「徳川実紀」には、猿楽者西村庄右衛門能重以下七名を、廊下番として召し抱え、城中の私的な演能を勧めさせている。

- 源太 土細 シテ山十郎左衛門 ヲ
 キ御(藩主吉通) 大鼓山村三太夫 小鼓問端主殿 太鼓野原与治之助 笛石川一学
 逆逆 シテ多羅尾又四郎 ヲ
 奥田頼母 大鼓山村三太夫 小鼓千村又作 大鼓八幡治郎
 花子 安田理斎 二人持小川忠治郎 赤宜山伏 富野登元
 と記している。藩主吉通自身、能の上手がいたのである。宝生流の勢力の強さを示す番組になつてくる。(「御勘書中記」)

猶惠会秋の大会

十月十二日(土) 午前十時始

舞臺	主演	脇	助
源太	土細	キ御	大鼓山村三太夫
杜若	安達	仕舞	池内光之助
松盛	久	中村	和男
舟舟	舟	池内三郎	梅本
芦	刈	後藤	希世
班	女	河村	希世
山	姥	河村	希世
養	老	河村	希世
融	戸	梅若	希世
遊	柳	宮崎	希世
雲	林	後藤	希世
葛	城	河村	希世
源	氏	河村	希世
難	波	河村	希世
附	祝	熊沢	希世

〔御來聴歓迎〕 熊沢恵美子 主催

祝賀記念会(六)

十月十三日(日) 午前九時始

熱田 神宮能楽殿

舞臺	主演	脇	助
源太	土細	キ御	大鼓山村三太夫
杜若	安達	仕舞	池内光之助
松盛	久	中村	和男
舟舟	舟	池内三郎	梅本
芦	刈	後藤	希世
班	女	河村	希世
山	姥	河村	希世
養	老	河村	希世
融	戸	梅若	希世
遊	柳	宮崎	希世
雲	林	後藤	希世
葛	城	河村	希世
源	氏	河村	希世
難	波	河村	希世
附	祝	熊沢	希世

平成3年9・10月放送予定

放送日	放送時間	番組名	出演
9月22日(日)	午前8時~9時	FM能楽鑑賞	門喜雄 右喜三 十喜三 大坪喜三 山柳喜三 片岡喜三 高木喜三 井流喜三 世生喜三 流生喜三
9月29日(日)	午前8時~9時	FM能楽鑑賞	門喜雄 右喜三 十喜三 大坪喜三 山柳喜三 片岡喜三 高木喜三 井流喜三 世生喜三 流生喜三
10月6日(日)	午前8時~9時	FM能楽鑑賞	門喜雄 右喜三 十喜三 大坪喜三 山柳喜三 片岡喜三 高木喜三 井流喜三 世生喜三 流生喜三
10月13日(日)	午前8時~9時	FM能楽鑑賞	門喜雄 右喜三 十喜三 大坪喜三 山柳喜三 片岡喜三 高木喜三 井流喜三 世生喜三 流生喜三
10月20日(日)	午前8時~9時	FM能楽鑑賞	門喜雄 右喜三 十喜三 大坪喜三 山柳喜三 片岡喜三 高木喜三 井流喜三 世生喜三 流生喜三
10月27日(日)	午前8時~9時	FM能楽鑑賞	門喜雄 右喜三 十喜三 大坪喜三 山柳喜三 片岡喜三 高木喜三 井流喜三 世生喜三 流生喜三

〔御來場歓迎〕 梅田邦久 主催

放送日	放送時間	番組名	出演
9月23日(日)	午前9時より	TV祝日能	門喜雄 右喜三 十喜三 大坪喜三 山柳喜三 片岡喜三 高木喜三 井流喜三 世生喜三 流生喜三
10月10日(日)	午前9時より	TV祝日能	門喜雄 右喜三 十喜三 大坪喜三 山柳喜三 片岡喜三 高木喜三 井流喜三 世生喜三 流生喜三

幸謡会大会

十月二十日(日) 午前十時始
熱田神宮能楽殿

Table listing participants for the '幸謡会大会' (Shinkyo Kai Taikai) event, including names like 藤原 清, 半 藤, 富士太鼓, etc., and their respective roles or affiliations.

盛夏の(文月・葉月)の能と
狂言あれこれ

竹尾邦太郎 (その1)

「女郎花」シテ胸踊直也。群生する女郎花の一本を土産に折り取るうとするワキ旅僧(敷也)を谷め立て、古歌の応酬のうちに素性探るかの問答に少々脚みがつき、しゃしゃりとした老体の印象だった。

紅梅記

NHKの太
平記、青佳
自伝下巻の
こと

八月十一日夜虫(こおるぎ)が鳴く。この前後立秋。夏の演能も盛ん。そして九月、秋の能(朝長・備法、卒都婆小町)を迎える。

観衛会秋の会

10月10日 栄能楽舞台

「半藤」(杉野伸江)、「田村」(石黒鏡子)、「藤戸」(水野たつ子)、「大原御幸」(足立奈々子)、「阿」(伊藤秀子)、「井筒」(山崎栄治)、「娘捨」(川久保彰礼)、「安宅」(勸進帳)、「山中節子」(山崎栄治)、「勤進帳」(山中節子)ほか。独断など十四番。名古屋正花会(山本博通)共催。

観衛会秋の会

10月10日 栄能楽舞台

「観衛会」観衛を楯に宿を斬られたシテ旅僧・弥右衛門。方便を以て宿を借るう、と先ず笠を預からせ、しかる後に断絶の借地権をその笠の下に主張して入り込むという稚気である。そこが亭主・吉次郎の氣に入られ、酒は飲まぬが問答は、互いの明晰な詞の応酬が

観衛会秋の会

10月10日 栄能楽舞台

「観衛会」観衛を楯に宿を斬られたシテ旅僧・弥右衛門。方便を以て宿を借るう、と先ず笠を預からせ、しかる後に断絶の借地権をその笠の下に主張して入り込むという稚気である。そこが亭主・吉次郎の氣に入られ、酒は飲まぬが問答は、互いの明晰な詞の応酬が

観衛会秋の会

10月10日 栄能楽舞台

「観衛会」観衛を楯に宿を斬られたシテ旅僧・弥右衛門。方便を以て宿を借るう、と先ず笠を預からせ、しかる後に断絶の借地権をその笠の下に主張して入り込むという稚気である。そこが亭主・吉次郎の氣に入られ、酒は飲まぬが問答は、互いの明晰な詞の応酬が

観衛会秋の会

10月10日 栄能楽舞台

「観衛会」観衛を楯に宿を斬られたシテ旅僧・弥右衛門。方便を以て宿を借るう、と先ず笠を預からせ、しかる後に断絶の借地権をその笠の下に主張して入り込むという稚気である。そこが亭主・吉次郎の氣に入られ、酒は飲まぬが問答は、互いの明晰な詞の応酬が

時間8分・7月7日・九草会) 「佐達狐」小アド奏者・又三郎が収束に見せる表情がよい。上目遣いのシテ佐達百姓・信行と目が合うや、共犯の親近感から笑い飛ばしてバツの悪さを一蹴するところなど親子舞頭の阿吡の呼吸の妙。キリにアド越後の百姓・高義に鳴き声を問われるところは、苦しい粉の「月曜日」(鶯の鳴き声)でも「東天紅」(鶯)でもなく、絶句のまま追いついてられた。

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464) 電話 (731) 7984 振替口座 名古屋 0-36393 購読料 1年1000円 郵送の場合 1年1500円 一 部 90円

能楽の友

若い御二人の門出に ふさわしい結婚式場 名古屋若宮八幡社 各種会合や宴会にも御利用下さい (駐車場完備) 名古屋市中区栄3丁目35-30 電話(241)0810

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- (10月) 20日(日) 幸 福 会 大 会 (来場歓迎) 26日(土) 清 韻 会 大 会 (来場歓迎) (番組①面) 27日(日) 秋 季 淡 交 会 別 会 (有料) (番組①面) (11月) 2日(土) 重陽会20周年記念会 (来場歓迎) (番組①面) 3日(祝) 幸 友 会 秋 の 会 (来場歓迎) 4日(休) 観 修 会 大 会 (来場歓迎) (番組②面) 9日(土) 清 韻 會 大 会 (有料) (番組③面) 10日(日) 名 古 屋 観 世 会 定 式 能 (有料) (番組③面) 16日(土) 興 竹 會 定 式 能 (来場歓迎) (番組③面) 17日(日) 宝 生 會 定 式 能 (有料) (番組④面) 23日(日) 和 泉 會 大 会 (有料) 24日(日) 久 田 銀 正 會 大 会 (来場歓迎) 30日(土) 青 陽 會 定 期 能 (有料) (12月) 1日(日) 歳 末 助 け 合 い 協 賛 能 (有料) 8日(日) 壺 泉 會 大 会 (有料) 14日(土) 久 田 徹 二 の 會 (有料) 21日(土) 名 古 屋 能 楽 鑑 賞 會 別 会 ・ 狂 言 (有料) [平成4年1月] 3日(金) 能 楽 協 会 名 古 屋 支 部 開 初 式 (関係者のみ) 11日(土) 学 生 能 の 會 (来場歓迎) 15日(祝) 名 古 屋 清 韻 會 大 会 (来場歓迎) 18日(土) 青 陽 會 定 期 能 (有料) (演能変更の節はご了解下さい)

能楽堂建設請願 署名19万人越える

名古屋城に市立の能楽堂をの要望を結集する建設請願署名運動は、八月下旬で十六万人に達したが、その後さらに愛好者各団体からも続々と集められ、十月十日現在で十九万九千八百人の署名に達し、当初の十万人目標の二倍におよぶ記録的な数字をあげている。

能偶田川上演

11月16日瀬戸市文化センターにて上演。日本に出るに親しむ会では、

金春宗家「翁」上演

福井家・名古屋三百年記念 11月9日 涛華能

小波方福井啓次郎師・幸友会主催の「涛華能」は、きたる十一月九日熱田神宮能楽殿で催されるが本年はとくに福井家初代の福井四郎兵衛友貞が元禄四年(一六九一年)十一月に、尾張徳川家二代藩主光友卿が大納言昇進の祝賀能に出動のため来名してから三百年に当り、これを記念するとともに、名古屋市民芸術祭の別協賛公演とし、金春流宗家・金春信高師による「翁」、本田光洋師の「船弁慶」

豊春会秋の能

10月20日 金剛能楽堂

豊春会(豊鶴三千春師主宰)の秋の能は十月二十日、金剛能楽堂で催される。能組は次のとおり。

- 一調「遊行柳」(根本昌三、前川光長) 舞囃子、笛、三(狂言「寝音曲」(茂山千之丞、松本茂) 能「松風」見留(シテ豊鶴三千春、ツレ植田恭三、ウキ西村欽也、笛・森田光春、小鼓・柳原富司忠、大鼓・河村大、地謡・松野恭憲、宇高通成ほか) 午後一時始、入場料一般五千円、学生二千円。

秋の清謡会

十月二十六日(土)午前十時始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers for 'Autumn Clear Song Meeting'. Columns include roles like 'Soloist', 'Dance', 'Musicians', and names of performers.

秋季淡交会別会

十月二十七日(日)開演一時 熱田神宮能楽殿

Table listing performers for 'Autumn Clear Exchange Meeting'. Columns include roles like 'Soloist', 'Dance', 'Musicians', and names of performers.

重陽会二十周年記念大会

十一月二日(土)十時始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers for 'Chūyōkai 20th Anniversary Memorial Concert'. Columns include roles like 'Soloist', 'Dance', 'Musicians', and names of performers.

十月雅日記

(122)

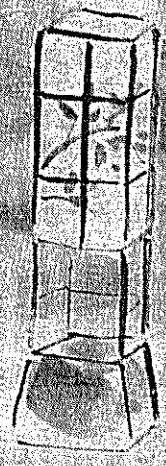
有り明け

えと文 二井栄逸

有り明けや 浅間の霧が 膳にはう

これは一茶が江戸から郷里の借州へかえる旅中の或日、早朝、宿の食膳につくと、部屋からまだ空に淡く残っている有り明けの月が眺められ、間近に見える浅間山の霧がすわっている食膳のあたりまで這うようにして流れてくる情景をよんだものであります。

旅の馳走に有り明かしおくと、いった風情は今の宿では味わえません。今の有り明け行燈は、ともしびではなく、電光でありますから、ゆらゆらとうすれゆく夜明けの情趣は出てまいりません。



茶

稽古を終えて、奥三河にある宿にいたのが夜の一時前、頼まれたのが夜明け前でした。私は夜を徹する事は、宗家に居る頃から徹す作業になれていきますのでさほど苦になりません。

新作「無明の井」

橋岡会特別公演

橋岡会特別公演として十月十八日京都都観世会館で新作能「無明の井」が上演。

シテ橋岡久馬、ツレ橋岡伸明、ワキ橋岡孝男、アヒ大島寛治、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・吉阪一郎、大鼓・中村喜彦、太鼓・三島元太郎、後見・観世栄夫、地謡橋岡佐喜男ほか。

広田後援会能

広田後援会主催「第七十七回後援会能」は、十月六日金剛能楽堂で開演。

能「通小町」(シテ広田一、ツレ広田泰能)能「殿」(シテ広田幸稔)

狂言「因幡堂」(茂山千五郎、松本茂) 次回七十八回は平成四年四月五日、能「花月」(広田一)能「山姥」(シテ広田幸稔、ツレ広田泰能) なお、当日は正午から、湧口能

能「望月」古式

梅若盛義、らみの会

平成三年度文化庁芸術祭参加として「第四回梅若盛義こころの会」で、十月五日東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂で能「望月」古式を上演。

出版紹介

「日月の庭」

丹羽征夫編曲詩集

三重県津市在住の詩人、丹羽征夫氏は、このたび「日月の庭」と題する丹羽征夫編曲詩集を刊行した。この「日月の庭」は新作能をモ

舞台からの名演技を名筆で描く……

二井栄逸師画抄集 ▶ 予約締切迫る ◀

92 能画カレンダー

- ◎ 好評を頂いております能画カレンダー-1992年版。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の新作美画カレンダーです。
- ◎ 予約特価 1部 1500円、郵送の場合送料とも1部1850円(2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律500円、例・3部の場合送料とも5000円)
- ◎ 予約申込み期限10月30日(それ以後は1部2000円、但し部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい)
- ◎ お申し込み方法 ハガキで部数明記のうえ当社へお申し込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。(電話での受付はいたしませんのでご理解下さい)

申し込み先 能楽の友社
〒464 名古屋市中区千種2-18-18
振替口座 名古屋 0 - 36393

田養村	船井	小若	杜若	吉野天人	羽衣	吉野天人	田養村	船井	小若	杜若	吉野天人	羽衣	吉野天人	田養村	船井	小若	杜若	吉野天人	羽衣	吉野天人	
有賀 欣哉	加納 富昭	高石 梅代	中村 時子	加藤 国子	金田 和	加藤 国子	有賀 欣哉	加納 富昭	高石 梅代	中村 時子	加藤 国子	金田 和	加藤 国子	有賀 欣哉	加納 富昭	高石 梅代	中村 時子	加藤 国子	金田 和	加藤 国子	
河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介	河村真之介
大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠

平成3年10月・11月放送予定

FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

〔10月〕
20日(日)宝生流「鉄輪」「通小町」武田 喜永
27日(日)観世流「梅枝」「菊慈童」藤井 徳三

〔11月〕
3日(日)特別番組にて中止
10日(日)金春流「籠田」「経政」本田 光洋
17日(日)宝生流「松虫」「大金」渡辺 三郎
24日(日)観世流「富士太鼓」「紅葉狩」藤井 徳三

テレビ放送(教育テレビ)
11月4日(振替休日)(12時~午後1時15分)
能「紅葉狩」鬼柳 観世流・観世清和ほか
11月23日(祝)(午前9時~10時20分)
復曲能「鶴羽」観世流・大槻文蔵ほか
日本の伝統芸能 能・狂言鑑賞入門Ⅱ(再放送)
(教育テレビ午後6時~6時30分)
11月6日(水)第3回「井筒」
11月13日(水)第4回「茸」
11月20日(水)第5回「二人大名」
(放送予定につき変更の際はご理解下さい)

観修会秋の会

十一月三日(祝)午前十一時始

熱田 神宮 能楽 殿

幸友会秋の会

十一月三日(祝)午前十一時始

熱田 神宮 能楽 殿

観修会秋の会

十一月四日(振替)九時半始

熱田 神宮 能楽 殿

尾張藩主の能楽愛好熱は、尾張領内の能楽興行を盛んにし、勸進能が、しばしば演じられるようになった。

『名古屋市史』によると、貞享五年九月六日から五日間興行された、熱田神宮境内での勸進能が、史書に見る最初と云っている。その後、元禄二年正月の若宮神社境内での川勝治右衛門の興行、元禄十七年一月二日の橋町にての勸進能がある。この時のことを『勸進能中記』では、次のように記している。

尾張藩の能の歴史(八)

辻 宏一

つたのであろう。同じ元禄十七年二月七日にも、勸進能があり、次のように記されている。(『勸進能中記』)
「七日、今日道成寺の能あり。札紙二刀の儀也。奈良より道成寺の大夫一人呼寄、今日も此大夫と唯方も有り。及暮。」
道成寺の能の興行には、鐘を吊るなどの手間がかかることもあろうが、普通の興行の倍も、見物料

奈良から大夫を一人呼んでの興行であるからこの大夫の役料はかなり高かったであろう。この大夫と、唯方とのめも、なんであるのか、記していないが、出演料との関係もあるのかも知れない。当時の勸進能の能役者の構成を宝永元年(一七〇四)九月の勸進能の役者付によって示すと次のようになる。(『勸進能中記』)
「二日今日よりあめや町にて、

謡十人外に作物師後見衣裳させ、総勢四十人弱の人数で、勸進能を興行していることになる。こうした勸進能は、必ずしも四座の役者に限定されたわけではなく、手猿楽者の一座も興行しており、武士ばかりでなく、町人もまた自由に観能したのである。
今回は、勸進能について、もう少し詳しい内容を付け加えたい。又家系についても、その時代の能の特徴についてふれたい。
参考文献『名古屋市史』『岩波講座 能狂言』『能楽の歴史』
〔訂正〕前回福井四郎兵衛の元禄三年八月の第二代藩主光友の、大納言昇進の際の祝能参加は、翌年元禄四年十一月十三日の下屋敷の祝能の方でしたので、その年月を訂正します。光友の大納言の昇進の祝能は、二度行われたことになり、それ故、福井四郎兵衛の元禄四年十一月十三日という点になります。この点につきましては、『名古屋市史』に記載されています。筆者の誤記ですので、訂正します。(筆者は岐阜市立女子短期大学教授)

「橋町裏にて勸進能。今日より始。大夫小松六郎左衛門、ワキ三宅十郎左衛門。六郎左衛門本願寺門跡の大夫と云。今日野々宮の鼓を兼而地役者打んとす。然る處に京役者来り打んとす。彼是争論あり。依之三番めの野々宮半分にて舞足を出す。残りは不致之。」
土地の役者と京都からやってきた役者とが、野々宮の鼓の役を争っていることが記されている。勸進能は、役料も良かったのであろうが、地元の能役者と京都からやってきた能役者とは反りが合わなかつたのであろう。

が取られたようである。それだけ人気が高かったのであろう。当時一日の日当が一匁から三匁位の間であるから、現在の日当を、五千円から一万五千円の間とすると、一夜の見物料は、五千円位ということになる。この日は、いつもの倍ということになると、一万円位の料金であったものと思われる。現在と、ほとんど変わらない金額と言えよう。

勸進能有之。
役者付
大夫川勝権六 ツレ植佐兵衛
北村小太郎 子役品村浅之丞
勝三郎 ワキ山本伝左衛門 吉田十郎右衛門 笛藤田三右衛門
勝山弥平次 小鼓福見喜左衛門
三上勘助 坂井右兵衛 竹山平七
大鼓橋本丹七 福井右衛門八 山本平之丞 太鼓小寺与惣治郎弟子
一人狂言三宅藤九郎弟子六人地

六郎・山本勝一(三輪)白式神楽(観世能之丞)「道成寺」赤頭(武田宗和)の能三番は狂言、舞臺子、一調。
入場料指定席一万二千円(前売のみ)自由席一万円、学生券五千円。
番組次のとおり。

太鼓方・助川龍夫師
斯道40年記念能
観世流太鼓方・助川龍夫師は、斯道四十年をむかえ、明年二月十一日(祝)熱田神宮能楽殿で記念能が催される。

能組は「狸々乱」双之舞(梅若)番組次のとおり。

井上松次郎
清沢一政 武田尚浩
祖父江修一 浅見真州
浅見重好 武田志房
岡根祥人 岡久広

狂言桶の酒 井上祐一 大野弘之
後見井上礼之助
舞臺子 唐 船 梅田邦久 鬼頭英二 鹿取好信
福井良治 武田邦弘 希世英夫

助川龍夫斯道四十年記念能
平成四年二月十一日(祝)午前十一時始

熱田神宮能楽殿
山本勝一 吉田定男 鬼頭喜太郎
梅若六郎 後藤孝一郎 鹿取希世
双之舞 高安勝久

一調 松山鏡 観世喜之 観世元信
武田宗和 飯富雅介 寛鉢一 助川治
赤頭 杉江元 柳原富司忠 藤田六郎兵衛

能道成寺 野村又三郎
後見 観世能之丞 高橋 須部 小島一英
武田志房 地謡 高橋 浅見重好 高橋 弘
観世 野村 久広 祖父江修一 武田邦弘
後見 野村 久広 祖父江修一 武田邦弘
(終了予定 五時半頃)

能三
観世能之丞
白式神楽
輪 森 常好 河村総一郎 助川龍夫
能三 白式神楽

獨鼓 鞍馬天狗 観世 武田 志房 池田 茂
一調 葛 城 野村 四郎 小寺 俊三

能花
後見 久田 敬二 地謡 高橋 孝親
片山慶次郎 祖父江修一 梅田志和 邦久

能俊
宝源氏供養 足立 知子 伊藤 温通
鶴 亀 中西やす子 山本とよ子 後藤 誠

名古屋市民芸術祭引協賛
福井家 名古屋三百年記念
華能
十一月九日(日)午後一時半始
熱田神宮能楽殿

翁
金春 安明 野村又三郎
横山 紳一 井上祐一
十二月往来 父尉 延命冠者
鳥帽子之祝儀 橋掛之舞
後見 金春 晃実 忍
金春 穂高 地謡 上田 利英
伏原 靖二 高橋 八郎
林 鉄 郎

狂言福之神 井上松次郎
大野 弘之
居屋 鞍馬天狗 吉田 定男
福井 聡介 藤田 六郎兵衛
舞臺子 熊 野 梅田 邦久 幸 正昭
地謡 水 上 輝和
高橋 敬二

能船弁慶 飯富 雅介
幸 義太郎 鬼頭 喜太郎
遊女ノ舞 替ノ出 佐藤 友彦

能観世会定式能(五回)
十一月十日(日)十二時半開演
熱田神宮能楽殿

能花
後見 久田 敬二 地謡 高橋 孝親
片山慶次郎 祖父江修一 梅田志和 邦久

狂言 大野 弘之 井上松次郎
任舞 江 口ケセ 片山慶次郎
船弁慶 武田 志房
片山九郎右衛門 河村総一郎
助川 龍夫
中川 雅和

能天
後見 中川 雅和 地謡 加賀 敏彦
武田 志房 清沢 一政 梅田 邦久
古橋 正邦 片山慶次郎 武田 邦弘

翁
石原 進 面 緒野 北 稔
神楽 吉川 寛治 石原 清蔵
三番更喜多 芳夫 吉川 久蔵

能船弁慶 飯富 雅介
幸 義太郎 鬼頭 喜太郎
遊女ノ舞 替ノ出 佐藤 友彦

能観世会定式能(五回)
十一月十日(日)十二時半開演
熱田神宮能楽殿

能花
後見 久田 敬二 地謡 高橋 孝親
片山慶次郎 祖父江修一 梅田志和 邦久

附祝言
主催名古屋観世会
(当日券)八千円(自由席)

能天
後見 中川 雅和 地謡 加賀 敏彦
武田 志房 清沢 一政 梅田 邦久
古橋 正邦 片山慶次郎 武田 邦弘

翁
石原 進 面 緒野 北 稔
神楽 吉川 寛治 石原 清蔵
三番更喜多 芳夫 吉川 久蔵

能船弁慶 飯富 雅介
幸 義太郎 鬼頭 喜太郎
遊女ノ舞 替ノ出 佐藤 友彦

能観世会定式能(五回)
十一月十日(日)十二時半開演
熱田神宮能楽殿

能花
後見 久田 敬二 地謡 高橋 孝親
片山慶次郎 祖父江修一 梅田志和 邦久

能天
後見 中川 雅和 地謡 加賀 敏彦
武田 志房 清沢 一政 梅田 邦久
古橋 正邦 片山慶次郎 武田 邦弘

翁
石原 進 面 緒野 北 稔
神楽 吉川 寛治 石原 清蔵
三番更喜多 芳夫 吉川 久蔵

能船弁慶 飯富 雅介
幸 義太郎 鬼頭 喜太郎
遊女ノ舞 替ノ出 佐藤 友彦

能観世会定式能(五回)
十一月十日(日)十二時半開演
熱田神宮能楽殿

能花
後見 久田 敬二 地謡 高橋 孝親
片山慶次郎 祖父江修一 梅田志和 邦久

能俊
宝源氏供養 足立 知子 伊藤 温通
鶴 亀 中西やす子 山本とよ子 後藤 誠

〔面長竹会番組つづき〕

羽衣	祖父江修一	猪瀬孝	助川龍夫
和合	猪瀬孝	猪瀬孝	猪瀬孝
連管中之舞	猪瀬孝	猪瀬孝	猪瀬孝
桜川	高橋一	猪瀬孝	猪瀬孝
賀茂	石川英実	猪瀬孝	猪瀬孝
駒之段	清沢一政	猪瀬孝	猪瀬孝
連調羽	衣大鼓	猪瀬孝	猪瀬孝
狂言謀生種	野村信行	猪瀬孝	猪瀬孝
附祝言	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝
〔御來場歓迎〕	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝

名古屋宝生会定式能(第435期)

十一月十七日(日)午後一時始 熱田神宮能楽殿

能葛	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝
能百	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝
能萬	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝
能大	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝
能龍	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝
能鶴	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝
附祝言	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝

「名古屋新狂言」

「鬼頭喜太郎舞台生活六十周年記念能」

竹尾邦太郎

「第三回名古屋新狂言」は、今秋英国で開かれるジャパン・フェスティバルの一環に公演されるシエイクスピア狂言と銘打った新作の二番を披露した。

「じゃじゃ馬喧嘩」沙扇の作を先代藤九郎が脚案脚色(「藤九郎新作狂言集」昭和56年能楽書林刊)に所収したものに手を入れ、元秀は妹娘と馬(止動方角の馬同断)を登場させたが無くもがなと思えた。じゃじゃ馬の姉妹に淳子、野志郎のシテ馬喧嘩に元秀、じゃじゃ馬がシテの圧倒的に自己本位な言葉の綾に翻弄され、意に反してのまでせせられ馴致される辺りは元秀演出が冴えるが、シテにはもう少し垣野な雰囲気を感じ、いし、ぞろりと長持たし込んだ姿より舞物本来の掛素姿を良く

紅梅記

台風、朝長、都婆小町

九月は台風が多かった。十九号はあの伊勢湾台風並み。夜通し安眠できず、反転した反転である。能楽神社の貴重な能舞台は屋根が崩れた山(NHK)。大被害、大変なことである。九月の八熱田Vはみるべき能が多いのに、週末になると、台風におびやかされた。

主権長生会

主権長生会。主権長生会(観世喜之)からはじまる。シテ方は五流給出、それは五流の家元(宝生流は家元息)が舞臺で祝う感儀。この後一調(横槍、謡書之、太鼓世元信八観世流太鼓方家元V)。一調一管(唐松、片山九郎右衛門・苗藤田大五郎・太鼓小寺俊三)が大きな花を添える。もう一つ、家元の舞臺子と並ぶ眼玉が朝長・横法であつた。家元たちが清新・地味・匂い・堅固・古拙の舞の中に能の深い心を示すに對し、「横法」は、普通の演出以上に、能芸の高いわざを通して哀傷・勇・追慕の詩情を万遍なくみせた。

朝長の墓所に詣でるシテ音器ノ

朝長の墓所に詣でるシテ音器ノ夜声、までワキツレ(松男・鶴)と連呼し、ハ懸渡も、とメラして独吟するシテは半幕を上げさせ、ハ気色かな、と鎮まると、やがて笛(六郎兵衛)に次いで太鼓(喜太郎)の「デン」という低い音。ワキツレは想像のように微動もせず、半幕が下りて元に戻った。大小(鉦一・源次郎)が加わり幕が上ると、低い太鼓のキザミで後シテがそらりと幕を放れる。面は紅を刷いたような初々しい十六・黒垂・七宝繁厚板・白地半切(破レ青海渡文様)。萌黄単法被(竹屋町か)。横法の太鼓に惹かれて二ノ松に立つとワキツレが立ち、時時立。笛が加わり再び幕が下り、半幕の音を聞かせて、平伏して再び幕が下り、先づ幕が下り、緊張のうちに鳴れやかな鬼頭喜太郎の面影が印象的だった。太鼓後見は元信・俊三、後見は清和・九郎右衛門・徹三。

二ノ松に立つとワキツレが立ち、時時立。

二ノ松に立つとワキツレが立ち、時時立。笛が加わり再び幕が下り、半幕の音を聞かせて、平伏して再び幕が下り、緊張のうちに鳴れやかな鬼頭喜太郎の面影が印象的だった。太鼓後見は元信・俊三、後見は清和・九郎右衛門・徹三。

緊張のうちに鳴れやかな鬼頭喜太郎の面影が印象的だった。

緊張のうちに鳴れやかな鬼頭喜太郎の面影が印象的だった。太鼓後見は元信・俊三、後見は清和・九郎右衛門・徹三。

太鼓後見が見せ掛けの太鼓を紫の風呂敷に包んで引くと、代りに萌黄の風呂敷に包んだ本番用の太鼓を出す。アイ居語りには又三郎、神妙に動いた後は常に無ワキツレになる。何となく重々しく莊重な気配となり、語り終るとアイとの問答から徐に懐中の経巻を取り出し、ワキツレ従えて正

太鼓後見が見せ掛けの太鼓を紫の風呂敷に包んで引くと、代りに萌黄の風呂敷に包んだ本番用の太鼓を出す。アイ居語りには又三郎、神妙に動いた後は常に無ワキツレになる。何となく重々しく莊重な気配となり、語り終るとアイとの問答から徐に懐中の経巻を取り出し、ワキツレ従えて正

とらうまい、味わい深し。シテが話し終えてすつと立つ姿佳。アイの語り、ワキツレの語り、ワキツレを頂点にツレと三角形をつくる。次第に小書への趣をまじり、く。「観音横法」を無出する。この前後まことに上々。いやここで息を緩めてはいけない。いよいよ横法の太鼓が打たれる。即ち後シテの出である。シテ落際(幕内)の所作はみえない。「デン」と一つ打つ。「横法」太鼓の音である。私が始めてこれを聞いたのは三十年も前である(金剛能楽堂)。

とらうまい、味わい深し。シテが話し終えてすつと立つ姿佳。アイの語り、ワキツレの語り、ワキツレを頂点にツレと三角形をつくる。次第に小書への趣をまじり、く。「観音横法」を無出する。この前後まことに上々。いやここで息を緩めてはいけない。いよいよ横法の太鼓が打たれる。即ち後シテの出である。シテ落際(幕内)の所作はみえない。「デン」と一つ打つ。「横法」太鼓の音である。私が始めてこれを聞いたのは三十年も前である(金剛能楽堂)。

朝長は、シテ観世喜之の丞、ワキ宝生閉(二人のツレの黒目勝ち八瀬い藍かVの水衣印象的)、四拍子は六・大倉源次郎・鉦一・喜太郎の四氏。アイ又三郎・地頭野村四郎(佳)。後見清和、太鼓後見(正)元信・(副)小寺俊三。この四拍子の顔触れに苦心のあとがみえるが、全体十分。

朝長は、シテ観世喜之の丞、ワキ宝生閉(二人のツレの黒目勝ち八瀬い藍かVの水衣印象的)、四拍子は六・大倉源次郎・鉦一・喜太郎の四氏。アイ又三郎・地頭野村四郎(佳)。後見清和、太鼓後見(正)元信・(副)小寺俊三。この四拍子の顔触れに苦心のあとがみえるが、全体十分。

前シテの出よし。ワキとのやり

前シテの出よし。ワキとのやり

この辺り、曲の盛りがよく元秀も

この辺り、曲の盛りがよく元秀も

この辺り、曲の盛りがよく元秀も

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ!
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ!
 当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きつとご満足いただける自信があります。
ビデオプロダクション 西川企画
 名古屋事務所(〒451)名古屋市西區名駅2-20-3輪の内荘 小塚方 ☎(052) 571-5816
 (〒500)岐阜市北野町20-2 TEL (0582) 63-9869

掛る。クセハやみやみと討たれ、とワキにアシラウ。ハ、更にも、と語いながら直シ、ハ喜び申すなり、の地でワキにアシラウと打切に直ス。膝を射られる所は、扇を左に取って左袖きりと高く巻き上げ、右に少し体を開き一閃のも左膝にさりと突き立てた。その鮮烈な型は、馬が暴れ出すのも気付かせない程だった。床几を立ち、腹を切る所は、如何にも腹極き切の気が横溢、目の離せない気力充実の舞台だった。シテがトメ拍子踏み、各役全員が退くと、改めて太鼓方が本幕で三ノ松に出た。正ウケで坐り、先の横法の太鼓の調を締めたもので、平伏して六度笛の音を聞かせて、平伏して再び本幕が入ると、一曲が終った。緊張のうちに鳴れやかな鬼頭喜太郎の面影が印象的だった。太鼓後見は元信・俊三、後見は清和・九郎右衛門・徹三。
 (2時間15分・9月7日・鬼頭喜太郎舞台生活六十周年記念能)

青月雅日記

(123)

貴船菊

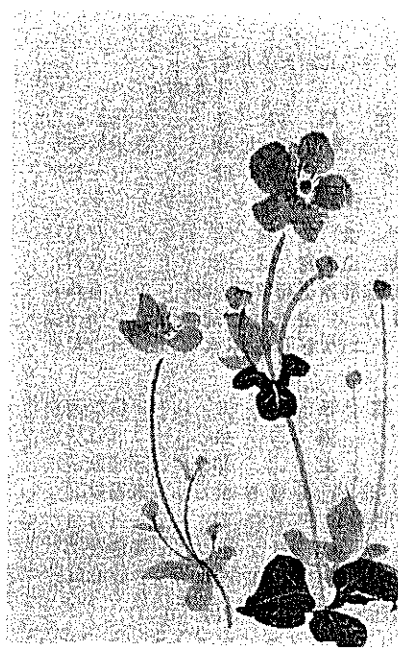
えと文 二井栄逸

美しく咲き続いた貴船菊も終りに近づきました。大体花期は九月、十月が見ごろですが、陽がまりに咲く貴船菊はまだまだ元気です。この貴船菊は菊の名で呼ばれていますが、まったく菊の類ではなく、キンポウゲ科の多年草なのです。花の形がいかに菊に似ているので菊の名をつけられたのでしよう。

四番目能の鉄輪の前半の舞台は、山城の國貴船、今の京都市左京区鞍馬貴船町にある貴船神社の境内であります。この貴船から

鞍馬山にかけてこの花が群生したため、貴船の名前をつけられたのです。本州から九州、中国にも分布していますが、特に群生している、白根菜等のようにその土地の名前がつくものです。

大分前のことになりますが、群生地を見たかったので貴船神社に出かけたことがあります。鞍馬山と、貴船山の谷あいを通る貴船川の清流に影をうつして咲く風趣をはるかに眺めながら、鉄輪の能を連想したりしました。



鉄輪は、能としては珍らしく現代的で、女性の慎しみを忘れて、はげしくうらみの情をあらわす特異の能として鬼気が迫ります。貴船の神に「丑の刻まじり」をする泥眼の女、鬼と化した生成(なまなり)の女とは、まったく似つかわしくないな、と思いがから眺めていました。貴船菊は別名を秋明菊とも呼ばれていますが、秋を明るく花として、本当はこの名前の方が適切であるかも知れません。(平成3・11・1)

財団法人 観世文庫が3事業

「講演会」「文献資料公開」など

昨年急逝された観世流二十五世宗家観世左近師の遺志を継承して観世宗家伝来の能楽資料の保全・活用と能楽の振興を主な目的とする財団法人観世文庫が今春設立されたことは本紙既報のとおりであるが、本年度の事業として「観世文庫研究会」と「観世文庫講演会」「文献資料公開」の三つのイベントが催される。同文庫では能楽を愛好される方々の多数の参加をのぞんでいる。各事業の概要は次のとおり。

〔観世文庫研究会〕

世阿弥の能楽論書、謡曲や古い型付を一緒に読む形の研究会を月に一度、五回を一区切として継続的に開催。

その第一回として「世阿弥の芸術を読む会」を実施。十一月から平成四年三月、申込み順に二十五名まで。

〔観世文庫講演会〕

十二月三日(火)午後六時～八時半、会場：国立能楽堂大講義室。演題と講演者

(1) 観世流の歴史 章氏

(2) 私の見た観世流の高手たち 山崎有一郎氏

入場無料(先着百六十名限り)

〔文献資料公開〕

一月十八日(土)十九日(日)

場所：東京都渋谷区恵比寿南一―二―一―四、観世文庫。

雑誌「観世」(昭和44年9月、51年11月号)掲載の「観世宗家所蔵文庫目録」の諸資料(一部貴重資料は除く)観世宗家所蔵の文献等の閲覧希望者は十二月二十日までに往復はがきで閲覧したい書名と希望日時を記入して申し込む。

公開は両日とも午前部は十時～午後一時、午後部は二時から五時まで。

平成4年度

観世会定式能 番組

平成4年度の名古屋観世会定式能は二月九日を初回として年五回開催される。とくに初回は二十五世観世左近追悼公演として上演される。予定番組次のとおり。

第一回 二月九日(日)十二時半始

廿五世観世左近追悼公演

舞臺子 海士 片山九郎右衛門

清 経之丞 観世徳之丞

葵 上 観世 芳宏

第二回 四月十二日(日)十二時半始

巻 絹 山本 勝一

仕 舞 山本 順之

善 知 鳥 梅若 六郎

第三回 六月十四日(日)十二時半始

楊 貴 妃 大槻 文蔵

仕 舞 梅若 盛義

第四回 九月十三日(日)十二時半始

班 女 武田 志房

仕 舞 武田 宗和

第五回 十一月八日(日)十二時半始

鉢 木 観世徳之丞

仕 舞 片山 慶次郎

附 祝 言 山本 勝一

〔有料〕当日券 三千元(普通席)

青陽会定式能

十一月三十日(土)十二時半始
熱田 神宮 能楽殿

能 組

龍 太 鼓 前野 郁子

山 姥 今沢 美和

能 組

俊 寛 高安 勝久

間 井上礼之助

雁 大名 井上 祐一

能 井上松次郎

井 筒 飯富 雅介

間 井上松次郎

高橋 藤一

後見 今沢 美和

仕 舞 飯富 雅介

巻 絹 中川 雅章

野 宮 武田 邦弘

車 僧 祖父江 修一

近藤 幸江

加賀 敬彦

須部 飯富 雅介

紅 葉 狩 飯富 雅介

間 飯富 雅介

後見 前野 郁子

附 祝 言 山本 勝一

主 催 青 日 新 聞 会

歳末助け合い運動

十二月一日(日)午前十時始
熱田 神宮 能楽殿

能 組

鶴 龜 飯富 雅介

間 井上礼之助

後見 竹内 澄子

仕 舞 飯富 雅介

仕 舞(金剛流) 松 風 近藤 修彦

仕 舞(金剛流) 枕 慈 童 百々 康治

間 井上松次郎

雁 大名 井上 祐一

能 井上松次郎

井 筒 飯富 雅介

間 井上松次郎

高橋 藤一

後見 前野 郁子

仕 舞 飯富 雅介

巻 絹 中川 雅章

野 宮 武田 邦弘

車 僧 祖父江 修一

近藤 幸江

加賀 敬彦

須部 飯富 雅介

紅 葉 狩 飯富 雅介

間 飯富 雅介

後見 前野 郁子

附 祝 言 山本 勝一

主 催 能 楽 協 会 名 古 屋 支 部

入 場 料 千 五 百 円 (全 館 自 由 席)

前 売 券 各 出 演 楽 師 宅

お 問 合 せ 熱 田 神 宮 能 楽 殿 六 八 二 一 七 五 一

勸進能興行は、その後も引き続き盛んに行われている。
宝永二年(一七〇五)三月二十二日より長崎正徳寺の境内で、勸進能が興行されている。大夫は、川北八郎兵衛、ワキは、天谷新右衛門である。
二七日には、シテ役者は、同じ大夫川北八郎兵衛であるが、ワキ役者は、西村孫右衛門、長谷川左兵衛に代って演じられている。役者を一部入れ替えて、勸進能を演じている。
二八日にも「勸進能中記」には、「今日より願正寺にて勸進能有之。」と記されている。長期に渡って、願正寺で、勸進能が興行されているようである。
尾張藩表舞合では、宝永元年七月九日、生見(玉)の能が演じられていた。このように折りに、能が演じられていたようである。
玉の井 シテ貞之 ワキ合助
大鼓三郎右衛門 小鼓喜兵衛 太鼓源兵衛 笛忠三郎
頼政 シテ五郎 ワキ平三郎
大鼓五兵衛 小鼓喜兵衛 笛忠七
松風 シテ保生太夫 ワキ茂右衛門 大鼓一郎兵衛 小鼓清六
笛庄兵衛
羅生門 シテ権蔵 ワキ源七
大鼓五右衛門 小鼓九郎三郎
太鼓源右衛門 加兵衛
自然居士 シテ喜左衛門 ワキ三郎 大鼓三郎右衛門 小鼓九郎三郎 笛忠三郎
卒都婆小町 シテ保生 ワキ庄兵衛 大鼓七左衛門 小鼓庄左衛門 笛加兵衛
七騎落 シテ九郎 ワキ又三郎 大鼓五右衛門 小鼓清六 笛加兵衛
善知鳥 シテ喜左衛門 ワキ彦太郎 大鼓五兵衛 小鼓喜兵衛 笛忠治郎
唐船 シテ九郎 ワキ茂右衛門 大鼓三郎右衛門 小鼓九郎三郎 太鼓源兵衛 笛忠治郎
安宅 シテ保生 ワキ源七 大鼓七左衛門 小鼓喜兵衛 笛加兵衛
乱 シテ八左衛門 ワキ忠蔵 大鼓市郎兵衛 小鼓清六 太鼓又右衛門 笛庄兵衛

児やぶさめ 勘七、釣狐伝吉、花子 一郎右衛門、首引 源介、枕物狂 一郎右衛門、唐すまふ 伝右衛門、朝比奈 一郎右衛門、能十一番、狂言七番という盛況である。
同じ七月の十八日頃、江戸でも、三代藩主頼誠の十七男、岩之丞が、能を主催している。その時も、能が十番、狂言七番の番組である。こうした、能楽愛好の風潮は、謡講を武士の間に盛んに広め、浸透させることになった。
『勸進能中記』宝永三年三月二五日のところに、次のように記している。
「暮に忽左と同道にて、衣の揃ぬ久兵衛宅へ行。謡講を聞。久兵衛声よく上手也。所々に謡の師の講多けれども、廿五日講を人皆欲す。久兵衛親久兵衛は、福王茂兵衛が弟子にて、当流を謡出したる者也。忽て京都上下謡講はやり、童部迄仮初にも謡をす。
。西行様 シテ正田吉右衛門

尾張藩の能の歴史(九)

ワキ木村七左衛門 花見二郎兵衛
兼平 シテ平八 ワキ喜兵衛
仙原 シテ前田新七 みずの御用達也 ワキ永井七左衛門
角田川 シテ園久兵衛 ワキ三郎左衛門 男七 子役大助 久兵衛子也。七・八歳
親世邸付ワキ方の福王流の素謡が、当時、尾張藩内で盛んであったようである。福王茂兵衛は、親世黒黒(九世親世大夫)の弟服部福元の子供で、福王流四世盛厚に、跡継がないことから、養子となつて、五代目を継いだ人で、晩年京に隠居して服部宗巴と号し、素謡の教授に力を注いだ。以後、福王流は、京都の素謡界の主流となる。後に京親世と言われる岩井井上、林、園、浅野の家々も、福王流の高弟であった。この福王流高弟の南久兵衛の謡講に、『勸進能中記』の筆者、重章は出かけたようである。評判の高かったことが記されている。
謡講が盛んになれば、鼓なども習いたいという者が出て来るのも

当然の成り行きである。こうした習いごとが、きっかけとなって、鼓打と武士の妻との不倫騒動が持ち上がり、妻敵討ちとなつたのが、宝永三年六月のことである。この事件を題材としたのが、近松門左衛門作「堀川波鼓」で、宝永四年(一七〇七)二月一日に、大阪竹本座で初演されている。
当時、この事件を耳にした重章は、『勸進能中記』に、次のように記している。
「今月初比、京堀川にて女の敵打あり。遠近甚伝之。
因幡鳥取、松平右衛門大夫吉明台所人あり。在江戸也。妻子は鳥取にあり。子に鼓を稽古せしむ。鼓打此妻と通す。人多知之。本夫の妹京の紺屋の妻たりしが、此奸状を江戸の兄へ通す。兄大に憤り、強て暇をもらひ、帰国し、妻を一刀に切殺し、妹及び妻の妹ともに彼鼓打を狙ふ。本夫は見知らざるゆへ、女を以て物色し、当月二日・三日比にか、堀川にて見

の中にも浸透しているであろうか。それとも他の流行歌謡かも知れない。
宝永六年正月、能狂とまで言われるほどの愛好ぶりを見せた、第五代將軍綱吉が死去する。
宝永六年五月一日、第六代將軍家宣の將軍宣下の大札が行われる。この大札の儀式に、尾張中納言吉通が、参列している。
五月三日には、公卿聚席の猿樂がある。『徳川実紀』には、その様子が次のように記されている。
「長の御持めして、本多伯耆守永先導し、中根大剛守正利御刀の役し、大廣間に供給。三家拜謁せられ、伯耆守正永、大久保加賀守忠増御陣子開きて、公卿ならびに大名以下のともが拝し奉り、中興小姓御座の役し、少老大久保長門守教寛舞合にのほり、猿樂はじむべきよしを伝ふ。この日殿上人は公卿の後座、両局、告使、副使は御車寄に候す。能組は、翁、三番叟、八幡、風流、高砂、開口の詞に日、それ天長く地久に、うけつけ松のかけ廣く、おなじ緑の早苗月、ふるふ民さへはこらしめ、めでたかりける御代とかや。田村、東北、紅葉狩、祝言、異服、狂言二番、末廣がり、いくのみなり。この半に奏者番、鳥居播磨守忠英猿樂のともがらに唐織、時のふく、要脚を纏頭す。府内の市人もみな芝居して見ることゆるされしかば町奉行丹羽遠江守長守令して鳥目菓子、酒を下さる。人数五千百人、ひとりごとと鳥目一貫文づゝなり。」
將軍宣下の能には、通常の祝賀の能の番組には、余り入らない、風流や、開口のワキの詞章も取り入れられている。その他、江戸の町人達も、見ることが許され、鳥目一貫文に、菓子、酒も与えられたようである。人数は、五千百人というところから想像しても、ほとんどよく舞台を見ることはできなかったのではないかとと思われる。費用も莫大であったであろう。次回は、家宣の能楽好みと、尾張藩の能楽の動向についてふれてゆきたい。
参考文獻 岩波講座「能・狂言」能楽の歴史「能・狂言事典」(筆者は岐阜市立女子短大教授)

付出し、先二女を家へ入れ、因幡よりの状を届と云間に、本夫等入て討留之也。……
又云、妻の妹、始鼓打に通じ、姉も通ずる故甚恨し、本夫に訴レ之云々。鼓打ゆへに吾姉殺したれば、姉の敵也と討レ之云々。実は、夫と女の敵を打也。
尾張藩の能とは、直接関係はないが、当時、能の謡や鼓を習うことが、広く全国的に及んでいたこと、子供までもが習いごとにしていたことが知られる。宝永初期の頃の風潮を知る手掛りともなる。その他、謡ごまという遊びが流行していたようである。
宝永三年十一月九日の「勸進能中記」に、「頃日、江戸謡ごまはやる。当地にても去比より、文七ごまとて勢敷流行す。文七文を重ね、穴へ木を入れて糸にて廻す也。京・大坂よりはやり来るよし。家々に三ツ四ツもたぬものなし。此舞間に小謡一番つゝ謡と云々。」と記されている。
能の小謡が、風俗として、遊び

壺泉会 能

十二月八日(日) 午後一時始
熱田 神宮 能楽 殿

謡曲「江口」と西行伝説
甲南女子大学非常勤講師 大森亮尚

仕舞 通小町 梅若万紀夫
船弁慶 泉 泰孝
狂言 吃り 男野村又三郎 妻 松野村 信行 後見 井上礼之助

龍江 加藤 春枝 近藤 幸江 泉 嘉夫
野見山光政 河村隆一郎 高橋 正光 福井啓次郎 鹿取 希世

井上礼之助
伊藤 嘉章 梅若万紀夫 地謡 鶴田 博 祖父江修一 泉 雅一郎 今村 嘉男 泉 泰孝 山本 正人 浅井 文義

後援 朝日新聞 新泉社

〔入場料〕一般券五千円、学生券二千円(全自由席)
取り扱い熱田神宮能楽殿(〇五二一六八二一七五)
泉嘉夫方(〇五二一八三二一三二八五)市内各プレイガイド

平成2年度名古屋芸術奨励賞 受賞記念

久田徹二「能」リサイタル
十二月十四日(土)午後二時半始
熱田 神宮 能楽 殿

独吟 勸進帳 久田 徹二
箏 采女 下川 直長
遊 行 柳 梅田 邦久
鞍馬天狗 笠田 稔
久田 徹二
笠田 昭雄
後見 前野 郁子 地謡 松山 幸親 上田 貴弘 中川 雅章 小島 一邦 英久

名古屋能楽鑑賞会別会

十二月二十一日(土)午後二時始
熱田 神宮 能楽 殿

主権 久田 徹二
共催 名古屋市教育委員会
後援 名古屋市

前席 三千五百円(当日券四千円)
学生 前席二千円(当日券二千五百円)
入場券取り扱いプレイガイドあり、熱田神宮能楽殿、出演楽師宅

主権 古屋 能楽 鑑賞会
主権 古屋 能楽 鑑賞会

〔和泉流〕墨 塗
〔和泉流〕節 分
〔和泉流〕灌 ぎ 川 上
〔大藏流〕濯 ぎ 川 上

主権 古屋 能楽 鑑賞会
入場券 指定席六千円、自由席四千円(会員指定席五千円、自由席三千円)
チケット申込みプレイガイドあり(〇五二一三三〇一九九九)
事務局 名古屋市中区大幸四一四一九二六、岩田方 電話 〇五二一七三二一四〇〇番

解説 武蔵野女子大学教授 小林 貴

狂言 流し
小鼓 福井啓次郎
大鼓 河村隆一郎

大名 井上 祐一
太郎冠者 井上 靖浩
女 佐藤 友彦
女 山本東次郎
女 山本恭太郎
女 野村 万作
女 野村 武司
女 茂山千三郎
女 茂山 正義

〔和泉流〕濯 ぎ 川 上
〔和泉流〕節 分
〔和泉流〕墨 塗

主権 古屋 能楽 鑑賞会
入場券 指定席六千円、自由席四千円(会員指定席五千円、自由席三千円)
チケット申込みプレイガイドあり(〇五二一三三〇一九九九)
事務局 名古屋市中区大幸四一四一九二六、岩田方 電話 〇五二一七三二一四〇〇番

平成3年11月・12月放送予定

FM龍泉鑑賞(午前8時~9時)

〔11月〕
24日(日) 親世流「富士太鼓」「紅葉狩」藤井徳三

〔12月〕
1日(日) 親世流「野宮」梅三 若川 恭
8日(日) 親世流「錦流」宮木 若川 恭
15日(日) 親世流「美流」宮木 若川 恭
22日(日) 親世流「筑紫」梅三 若川 恭
29日(日) 大藏流「筑紫」梅三 若川 恭

テレビ放送(教育テレビ)
11月23日(祝) (午前9時~10時20分)
復曲能「編み」親世流・大蔵文蔵ほか
日本の伝統芸能 能・狂言鑑賞入門Ⅱ(再放送)
(教育テレビ)午後6時~6時30分
11月13日(水) 第4回「葺」
11月20日(水) 第5回「二人大名」
12月23日(祝) (午前9時~10時)
(1) 能楽界の話題
(2) 新作能「安土の聖母」梅若萬彦・泉 嘉夫ほか
(放送予定につき変更の節はご理解下さい)

長月の舞台から(その二) 観世会 第四回名古屋能楽鑑賞会 「宝生会」「九皇会」

竹尾邦太郎

「井筒」シテ六郎。小面・襟白赤・白指(七宝紫文様)・赤...

たためか、途中急調になる様子(六郎兵衛・啓次郎・鮎)と相俟ち...

紅梅記

一京都市、能 三番、金剛 巖氏の事

十月二十日は十三夜(旧の九月十三日)。中天近くきれいな月をみる。庭の菊ふくらむ。

十一月も演能が盛ん。

十月十八日京都へ。新作能「無明の井」の関西公演である。主治医のM博士(以下先生)と同道で...

(黒垂なし)に黒っぽい地味な装束付で、すでに脱俗の様子すら見せていた。枕の吟味にしても、微...

舞に稽古の跡が見られてうれしかつた。(1時間19分・9月8日。観世会 因に先回は1時間25分)...

また、祝賀的にも朽ちた卒都婆に腰を掛けるようではないので、少々損な演出だった。

「龍田」シテ博祐、小面・襟白浅黄。峯を見上げ、演音を聞く面の工合が繊細で優しい。後は天...

と大小前からワキ正へ隣行するの姿。目醒めた大名が、悪戯に興じて墨だらけの顔の女に形見の鏡を...

を明察する太郎冠者(祐一)の利発。目醒めた大名が、悪戯に興じて墨だらけの顔の女に形見の鏡を...

訪ねる。親切な案内で席を確かめ、楽屋へ。橋岡久馬氏に先生をお引き合わせする。文通はあつてもこれが初対面。一つ京都市の目的が...

見所のほぼ半数は外国人と見受けられた。ご夫婦同伴もあり、京都の医学会の出席者の方々らしく、多田博士と親しく話す方もいる。狂言(茂山正義)のあと「無明の井」。精神と肉体の死、肉体の死と脳死、脳死可否の深い問題を、日本古来の生死の考え方に由り、能の形で思索する。秀作である。シテは橋岡久馬氏(曲付)。「生き人か、死に人か」の後シテのことは胸をつく。「生

死の有様古より聞かれりも印象が強い。「朝には紅顔を、世路に誇れども夕べには白骨となりて、郊原に朽ちぬ」(クセ前)。「無明の森の深き間、鬼火に導かれて、道なき小径辿り行く。鉛色に光るは三瀬の川の渡しなるや。荒けなき渡守、生ける者は乗るまじ云々」(「生き人か」、カケリのこと)の文章あり。「生き人」の英訳は「アム・アイ・リヴィング・オア・デッド?」。ひとつ「胸を割き、臓を取る」のところ、ワキ座のツレ(心臓を提供された若い女性)がしずかにシテの行き過ぎであろうか。共に感動。多田博士の平明深高な「ノート」、英仏両語の解説と日英対照の謡曲文を配らる。これまでの三・四の資料と合わせて貴重。平安神宮の方に一礼して車中の人となる。京都駅ホームは静かであった。付、遅れたが、アイ狂言(大島寛治)の秀逸を忘れてはならない。

十月四・五日、名・市民芸術祭協賛の能・狂言の会。芸術Cで。四日は景清、シテは九月の好演(卒都婆小町)に続く梅田邦久氏。硬骨・武骨と言ふより、平曲を語り出したとも伝えられる鋭い心の持ち主で親子の情も厚い景清を演じて好演。別れて行くとき、ツレ(娘)がシテに(突き)当った。しばし止まってまた進む。大層効果的。よきパフォーマンス、偶然と言えようか。ひとつのカタにもなるうか。

五日、狂言三番。真中の月見座頭(シテ)を演じた茂山忠三郎氏がすばらしい佳演。しかし相手をする町の人・茂山正義氏の調子が高いので、少し噛み合わない。この正義氏が先に記した泉のときは、これでよかったことを付記。

訂正。紅梅記十月号で、鬼頭喜太郎氏次男は大鼓を打つが太鼓になつていました。お詫びして訂正します。(野村広三)

料理 葵軒 本店 熱田区神戸町五〇三 電話(051)868618

観世流謡曲本 ちくさ正文館 ちくさ駅前 電話01137

観世流・金剛流 宗家本元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488-9 振替東京3-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替京都1-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

一 部 90円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- 〔12月〕
- 21日(土) 名古屋能楽鑑賞会別会・狂言(有料)
 - (平成4年1月)
 - 3日(金) 能楽協会名古屋支部開初式(関係者のみ)
 - 11日(土) 学生能楽会(来場歓迎)
 - 15日(祝) 名古屋清韻会大会(来場歓迎)(番組②面)
 - 18日(土) 青陽会定期能(有料)(番組②面)
 - (2月)
 - 2日(日) 宝生会定式能(有料)
 - 9日(日) 観世会定式能(有料)
 - 11日(祝) 助川龍夫師道40周年記念能(有料)
 - 16日(日) 観世九事会定式能(有料)
 - 23日(日) 内藤泰二師をしのぶ会(有料)
 - (3月)
 - 1日(日) 大蔵狂言会(来場歓迎)
 - 8日(日) 梅嶺狂言会(有料)
 - 14日(土) 梅山大学能楽部30周年記念能(来場歓迎)
 - 15日(日) 藤田追善能楽吟会(来場歓迎)
 - 20日(祝) 日本能楽会名古屋公演(有料)
 - 22日(日) 臺泉會大舞台(来場歓迎)
 - 28日(土) 名古屋能楽鑑賞会(有料)
- (演能変更の節はご了解下さい)

西村市会議員に手渡される請願書



青少年や海外からの来訪者など幅広い人々が親しめる「伝統文化の拠点」として、また、音楽・演劇など様々な分野が新しい創造を

請願事項

請願事項および請願理由は次のとおり。
西村市会議員に手渡される請願書

名古屋に公立能楽堂を 市議会に建設請願

12月3日 20万人署名とともに

名古屋に公立の能楽堂を、の要望を結集する建設請願署名運動は、能楽愛好家の会(世話人代表北村利弥氏)、能楽協会名古屋支部(支部長西村欽也氏)が中心となり、ことし四月から各界への呼びかけとともに積極的な運動が行われてきたが、本紙既報(十月号)のようにより愛知、岐阜、三重を中心

請願理由

能楽堂は、国際都市にふさわしい文化施設です。街で外国の人々とすれ違うことが多くなってきました。国際交流をすすめる上では、最新の技術・文化を紹介する一方で、その基礎に伝統の技や文化が脈打っていることを知ってもらうことが重要で

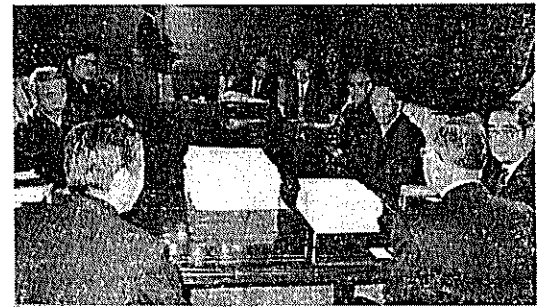
請願理由

能楽堂は、国際都市にふさわしい文化施設です。街で外国の人々とすれ違うことが多くなってきました。国際交流をすすめる上では、最新の技術・文化を紹介する一方で、その基礎に伝統の技や文化が脈打っていることを知ってもらうことが重要で

観世寿夫記念 法政大学能楽賞(第13回)

栗谷菊生氏 受賞

法政大学(阿利英二校長)は、昭和五十四年に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに十二回の授賞が行われてきているが、本年も各方面の識者により推薦された候補者について、選考委員(湯川佳一郎、吉越立雄、観世



議長と懇談する世話人、協会支部代表

六十一年以上の歳月の中で洗練されてきた能楽は、日本の様々な文化に影響を与え、伝統美を伝える上で欠かせないものの一つです。能楽に代表される伝統美を幅広い人々が気軽に楽しめる施設が、国

際都市には是非必要です。能楽は、いま内外の注目を集めています。

静寂の中の気迫と緊張感、そして象徴性ゆえの優れた現代性。そんな能楽は、今、内外の注目を集めています。

落政期以来能楽の盛んな当地区においても、ほぼ毎週能・狂言が

上演され、また新能・野外能を通して、これまで接する機会がなかった人々にも新たな感動を与えています。

海外においても、多くの舞踊家・演劇家が能楽の影響を受け、新たな創造の糧とするなど、関心が高まっています。世界の共有財産としての能楽を次代に継承してゆくことは、現代日本の重要な課題の一つといえます。

能楽は、自由で新しい創造空間です。

近年、能楽は他の分野からも注目を集め、日本舞踊や邦楽はもとより演劇・オペラ・現代舞踊などによっても、新しい創造の場として活用されつつあります。簡素で独特の様式と雰囲気を持つ能楽は、他の舞台芸術にとっても自由で刺激的な空間なのです。

東海地区唯一の能楽堂として熱田神宮能楽殿がありますが、その容量は限界にきています。伝統を核に多様な分野の交流をはかるといふ時代の要求にこたえるためには新しい能楽堂が是非とも必要です。

谷能の会」での入卒都堅小町Vをはじめ、近年の氏の舞台には芸力・気力の充実を示す好演が多い。

〔受賞者〕

栗谷 菊生氏

〔授賞理由〕喜多流の重鎮として氏の演技の重厚さには定評があったが、平成三年三月三日の「栗

〔受賞者〕

栗谷 菊生氏

〔授賞理由〕喜多流の重鎮として氏の演技の重厚さには定評があったが、平成三年三月三日の「栗

〔受賞者〕

栗谷 菊生氏

〔授賞理由〕喜多流の重鎮として氏の演技の重厚さには定評があったが、平成三年三月三日の「栗

〔受賞者〕

栗谷 菊生氏

〔授賞理由〕喜多流の重鎮として氏の演技の重厚さには定評があったが、平成三年三月三日の「栗

〔受賞者〕

栗谷 菊生氏

〔授賞理由〕喜多流の重鎮として氏の演技の重厚さには定評があったが、平成三年三月三日の「栗

〔受賞者〕

栗谷 菊生氏

〔授賞理由〕喜多流の重鎮として氏の演技の重厚さには定評があったが、平成三年三月三日の「栗

〔受賞者〕

栗谷 菊生氏

無限表情

重要文化財・重要美術品など、幻の三井文庫の能面「の全貌を、原寸大で初めて一挙に紹介。

三井家旧蔵 豪華コレクション



三井文庫蔵



清水眞澄(成城国際大学教授)

三井文庫の能面は、重要文化財4点、重要美術品40点を含む。最も第一級コレクションでありながら、現在までほとんど知られていません。今回、その凄絶な美の全貌を、全55点すべて新規撮影の道力ある原寸大写真で余すところなく紹介しました。

1面に1つ原則として2点以上の写真を収録。特に主要な能面は、舞台上での能面の多様な変化がうかがえるよう正面・斜め・横などさまざまな角度から多面的に、また、能面の作者や由緒を証明するものとして大変興味深い裏面の写真も全点掲載しました。

●女―(能面作品15面) ●日本の能面

●男―(能面作品12面) ●能の宗教性

●翁―(能面作品5面) ●能面の表情と美

●劇―(能面作品8面) ●作品解説―三井文庫の能面

●鬼神―(能面作品15面) ●オモカケと花能面の写と修復

●一変型別(内入り、トドカシ、トドカシ、トドカシ、トドカシ)

定価25,000円(税込)

1月下旬発売・予約受付中

学習研究社・販売局

〒115 東京都大田区上池台4-40-5 ☎03(3726)8159

1月下旬発売・予約受付中

学習研究社・販売局

〒115 東京都大田区上池台4-40-5 ☎03(3726)8159

1月下旬発売・予約受付中

学習研究社・販売局

〒115 東京都大田区上池台4-40-5 ☎03(3726)8159

1月下旬発売・予約受付中

宝永元年(一七〇四)に、甲府宰相であった綱豊(家宣)は、将軍綱吉の養子となつて、宝永二年に江戸城西丸に移つた。家宣は、甲府宰相の頃から、能楽の愛好家であつたが、西丸に入った後も、綱吉に劣らず演能に熱中し、宝永五年の西丸での能の催しのシテを百二三番も舞つてゐるようである。

家宣の能楽愛好の一因には、側衆の間部越前守詮房が、喜多流の能役者出身であつたことによると思われ。

宝永三年九月十二日の「徳川実紀」には、「西城猿楽平田彦兵衛尚信、処士土田源六郎某、坂本五郎兵衛某、松平大膳大輔吉広猿楽杉本勘七郎為利、松平伊予守綱政猿楽田中忠右衛門某、金春座長命助三郎某召出され、西城土圭間番御付らる」とある。

宝永七年二月に家宣が舞つた能を、「徳川実紀」によつて上げると、次のようになる。「二月朔日、御みづから松風をかんで給ふ。二月十三日、奥にて申樂あり。頼政、頼朝をまはせ給ふ。二月十五日、又奥能あり。湯谷、鶴鶴をあそばさる。二月十八日、奥にて申樂あり。御みづからは梅枝、野守御所作あり。二月十九日、又奥能あり。葵上あそばさる。二月二十一日、又奥能あり。三輪、橋弁慶をかんで給ふ。二月二十三日、また散樂あり。黒塚、柏崎を御所作なり。二月二十五日、奥にて猿楽あり。けふの御所作は野宮、鶴鶴、橋弁慶なり。二月二十九日、けふ奥にて猿楽あり。江口、船弁慶をあそばさる。」

三月、また散樂あり。黒塚、柏崎を御所作なり。二月二十五日、奥にて猿楽あり。けふの御所作は野宮、鶴鶴、橋弁慶なり。二月二十九日、けふ奥にて猿楽あり。江口、船弁慶をあそばさる。」

狂言「能楽の歴史」と言われる。相当数の稀曲が演じられてゐる。こうした稀曲上演の風潮は、將軍のお膝元江戸ばかりでなく、名古屋・京都・大阪においても波及してゐる。

正徳六丙申年五月吉日藤田清竹與齋の藤田流留の宗家所蔵の「古今稀曲集」によると、次のように記されてゐる。「尾張名護屋御城にて稀曲あり。田中源之丞 傳七 六之助 清水源三郎 四郎兵衛 宝永三年三月三日稀曲北畑にて、川北八郎左衛門勲進能に候あり。源之丞 庄八 小七 儀(イケニハ) 下村森右衛門 多七 新助 元禄十一年三月十日三日 仙洞様にて、孫思ばくあり。平半 石井弥三郎 金子甚助 孫思ばく 平三郎 福井四郎兵衛 林新兵衛

尾張藩の能の歴史(十)

辻 宏 一

西行様、桜川などが演じられてゐる。家宣は、月に十番以上の能を舞つてゐるようである。年間にすると、百二十番以上ということになる。こんなに番数が多くなると、通常演じられる能では、満足はいかず、次第に稀曲上演の機運が盛んになっていく。

宮城県立図書館伊達文庫所蔵の「御内証御能組」(岩波講座能・狂言「能楽の歴史」)によると、宝永二年から五年の間に西丸で演じられた稀曲は、四十六曲になる。さらに、將軍家宣の時代は、これに四三曲が加わる。曲目としては愛宕空也・生貴・一采法師・殿島・稲荷・河水・神有月・掃雁・清時・現在七面・現在巴・花車・常陸帯・守屋・柳・八幡などが上げられてゐる。

この他に、貞享・元禄期の綱吉時代の稀曲にさかのぼつて拾ひ出すと、鶴岡田・行家・楽天竜神・竜頭大夫・追掛鈴木・郭巨など、四十一番にも及ぶ(岩波講座能・

原御幸有。本多佐兵衛 山田忠右衛門 小原御幸 下村作太夫 来助 須磨三郎 宝永元年三月四月二五日江戸尾張様一がい(や)の御屋敷にて候あり。保生三郎右衛門 三郎左衛門 忠次郎 合助 新九郎 忠次郎 正徳元年三月九日丸山の下にて柴田忠七勲進能に候あり。源之丞 孫三郎 平次郎 又三郎 四郎兵衛 喜十郎 正徳四年三月十二日初日尾張名護(屋)古渡にて、田中源之丞勲進能に候あり。四か目あり。源之丞 孫三郎 伊左衛門 碓 尾上新右衛門 右兵衛 六郎兵衛 以上、ほんの一部ではあるが、当時稀曲と思はれてゐた能を、抜き出して見た。これらの曲の中には、今日では、現行曲として見なれてゐる能もある。住吉清・小原御幸・碓などであるが、これらの曲は、一時上演が、中絶してゐたのを、元禄・宝永の頃に復活したのである。綱吉・家宣の能楽好みによつて、埋もれてゐた名曲を復活させたとも言えよう。

この傾向が、綱吉・家宣の江戸城奥能に限らず、江戸の諸藩の藩邸、地方の諸藩の能、禁裏能、勲進能などにも影響を与えてゐることが、藤田家所蔵の「古今稀曲集」の碓の例や、その他の番組の上演の説明文によつて知ることができるのである。

尾張藩においても、多くの稀曲が、この時期に集中して上演されてゐるのである。「古今稀曲集」によつて、二、三付け加えておきたい。

保生 権左衛門 觀世佐吉 浦嶋 喜太郎 大蔵六蔵 徳井忠次郎 元禄十一年四月十日一がい(や)尾張様御やしきにて現在七面あり。田中半平 弥市 源兵衛 現在七面 九郎三郎 加兵衛 松井合助 尾張藩江戸屋敷の市ヶ谷の藩邸でも、稀曲が、しばしば演じられてゐた。

尾張藩江戸屋敷の市ヶ谷の藩邸でも、稀曲が、しばしば演じられてゐた。

尾張藩江戸屋敷の市ヶ谷の藩邸でも、稀曲が、しばしば演じられてゐた。

尾張藩江戸屋敷の市ヶ谷の藩邸でも、稀曲が、しばしば演じられてゐた。

平成3年12月・平成4年1月放送予定

(12月) FM能楽鑑賞(午前8時~9時)	29日 狂言・大蔵流「筑紫奥流」	蔵流「筑紫奥流」	大蔵流「筑紫奥流」	蔵流「筑紫奥流」	大蔵流「筑紫奥流」
(12月) NHK FM能楽鑑賞(午前8時~9時)	1月5日(日) 金春流「春日龍」	金春流「春日龍」	金春流「春日龍」	金春流「春日龍」	金春流「春日龍」
1月12日(日) 金春流「老神松」	金春流「老神松」	金春流「老神松」	金春流「老神松」	金春流「老神松」	金春流「老神松」
1月19日(日) 金春流「竹松」	金春流「竹松」	金春流「竹松」	金春流「竹松」	金春流「竹松」	金春流「竹松」
1月26日(日) 金春流「竹松」	金春流「竹松」	金春流「竹松」	金春流「竹松」	金春流「竹松」	金春流「竹松」
1月1日 喜多流能「狸千」	喜多流能「狸千」	喜多流能「狸千」	喜多流能「狸千」	喜多流能「狸千」	喜多流能「狸千」
1月2日 大蔵流狂言「金東」	大蔵流狂言「金東」	大蔵流狂言「金東」	大蔵流狂言「金東」	大蔵流狂言「金東」	大蔵流狂言「金東」
1月3日 金春流能「高千」	金春流能「高千」	金春流能「高千」	金春流能「高千」	金春流能「高千」	金春流能「高千」
1月1日 狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」
1月2日 狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」
1月3日 狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」	狂言・大蔵流「空」

(放送予定につき変更の際はご理解下さい)

青陽会定式能(第136期)

平成四年一月十八日(土)十二時半始

熱田 神宮能楽殿

仕舞玉之段 今沢美和

祖父江修一 杉江元 鬼頭英二 大野誠

後見 瀬戸三津子 地謡 三村恵子 近藤幸江 瀬戸三津子

後見 小島一英 地謡 今沢美和 清沢雅彦 中川雅彦 正邦

仕舞 波 古橋正邦 地謡 加藤信彦 高橋信彦 高橋信彦

東 北ヶ 須部甫 地謡 加藤信彦 高橋信彦 高橋信彦

野 守 武田邦弘 地謡 加藤信彦 高橋信彦 高橋信彦

子方石橋 佑太 梅田邦久 河村真之介 藤田大郎兵衛

隅田川 飯富雅介 近藤幸江 祖父江修一 中川雅彦 正邦

後見 今沢美和 地謡 加藤信彦 高橋信彦 高橋信彦

後見 武田邦弘 地謡 加藤信彦 高橋信彦 高橋信彦

狂言 素袍 井上松次郎 井上祐一 後見佐藤友彦

子方松山 昇之 松山幸親 河村真之介 藤田大郎兵衛

船井慶 高安勝久 後藤孝一郎 大野誠

間 飯富雅介 河村真之介 藤田大郎兵衛

夜見 前野郁子 地謡 生駒里翠 高橋信彦 高橋信彦

後見 梅田邦久 地謡 加藤信彦 高橋信彦 高橋信彦

附祝言 主催 青陽会

(当日券三千円)

豪華コレクション 「三井家旧蔵能面」

学習研究社 来春から発売

来春早々、学習研究社から能面コレクションとして、質・量ともに国内最高のものとして知られる三井家旧蔵の能面全五十五点が、一冊の豪華本になり紹介される。

三井家の能面はその大部分が金剛家伝来の本面で「孫次郎」や「不動」など四点が重要文化財に指定されている。しかし、現在までその全体像が紹介される機会はない。本誌は、一般の能楽愛好家、美術愛好家にもより専門の能楽研究家の間でも、五十五点の全面的な紹介が許可され、その神秘的で圧倒的な美の世界が迫力ある原寸大の写真で紹介、これらの作品は室

町時代から江戸時代にかけて制作された貴重なものは、このたびの出版は能楽研究のみならず美術史研究の上からも画期的な意義をもつものである。

内容次のとおり

- 書名 豪華コレクション「三井家旧蔵能面」三井文庫蔵(全一巻)
- 発行 発売 学習研究社
- 定価 二万五千円(税込み)
- 造本 体裁 B4変形判/函入り・ハードカバー/百九十二頁(6色)百四十四頁・2色百四十八頁)
- 発売 平成四年一月二十二日

予定

(1) 三井家伝来の能面(五十五面)を能の五番立て(神・男

(2) 能面の写真は原則として原寸で、判型はB4変形として二点以上の写真を掲載。特に主要な能面は正面・斜め・横など多様な角度的写真を掲載。舞台上での複雑な変化が窺われる。

(3) 能面の作者や由緒を証明するものとして、能楽愛好家にとつて関心の深い能面の裏面の写真が掲載される。

(4) 能面の作者や由緒を証明するものとして、能楽愛好家にとつて関心の深い能面の裏面の写真が掲載される。

(5) 五番立ての各ジャンルごとに代表的な能面写真を掲載し、能舞台を直接見ているような臨場感を持たせる。

◇解説テーマ

(1) 日本の能面 田辺三郎助(武蔵野美術大学教授)

(2) 能の宗教性 清水実(三井文庫学芸員)

(3) 能面の美と表情 清水実澄(名城短期大学教授)

(4) 「おもかげと花」能面の写し方(能面作家)

(5) 作品解説「三井家旧蔵の能面」清水実澄・清水実

尾張藩江戸屋敷の市ヶ谷の藩邸でも、稀曲が、しばしば演じられてゐた。

尾張藩江戸屋敷の市ヶ谷の藩邸でも、稀曲が、しばしば演じられてゐた。

神無月・霜月の舞台から

「淡交会別会」「濤華能」「宝生会」

「和泉会」

竹尾邦太郎

「恋重荷」シテ善助。昨今話題を提供している所謂妙法型の、天祥に二個の重荷ではなく、徒前通り。地(四郎・私・彼三)との掛合に、老体を鼓舞させて重荷に挑む力のある様から頓挫する迄、描写が細かい。即ち、へげに持ちかゝる、の細を握り締める指が痺れ、感覚失なっている様。へたに頼り、と左右一足ずつ退いた腰の揺れ具合。見てをれ、と捨て科白吐きかねぬ程の、凄まじい憤怒が足裏に滲む様な中入、など痛恨如矣。

後シテは、彩色剣落の生(シ)の地肌を見せるや小振りの慰謝。立廻にツレ・祖父江修一を背負杖で押え付ける所や、へまき苦しみと鹿背杖に縋ってじりじり沈むと右膝着き、へまき熱い給へや、とツレを睨めつける所など、生々しい。キリで、へ思ひの煙立ち別れ、

「緇擧」擧の形とは露知らず隣家に遣られたシテ太郎冠者。又三郎。その憤懣が爆発するとこ「もはやさうく」囃される事で「御座らん」の語氣の鋭さには主高義も思わずさざめんばかり。問答には凄みすらあった。それが、隣家の主・礼之助が粗取ると分ったとき、その臨機の応対ははしく、一筋縄では行かない。「それ、疎(すか)してはかん」と、巻振り上げ御座る辺りは強かた簡単に追いつかれない。先刻の怒気も芝居だったか、と悟られる。(26分)

「船井慶」シテ三津子。面若女。都に戻されるのは舟渡・勝久の一存と思いきや、子方・加奈子直々宮で御社上りの儀。舞台の演出が珍しけれどこれは省く。なお二日間とも夜は南大門の儀(新能)がある。夜の冷気がきびしかった。朝は「どうどうたりたり」、日中は奈良公園のわらび餅、夜ははら貝の音または「ナムカン」の音の声であった。俗氣を忘れた。

因みにお社頭では八熱田Vの鏡板と地裏の側から拝観した。今記値に残るのは三人の翁の古風な姿である。さて九日の当日。一時半始まり。幕内の切火の音が響く。三十五分干歳(面箱)を先頭にしすしと。三人の翁はワキ座寄りからシテ翁(左翁)ツレ翁と正先に並び、平伏(お社頭でも鏡板が正面に向う)。ワキ座よりから笛座にシテの翁、ツレの翁と座す。干歳が舞い始める。爽やかに。いよいよ三人の翁さんが、面をつけたシテ翁は笛柱を背に、ツレ翁は目付柱の方からシテ翁さんに対して立つ。

十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來、父尉・延命冠者の小書が、三番叟には烏帽子ノ祝儀・橋掛ノ舞と打掛り(大鼓)の三つがつく。五つ。翁・金巻高はか、三番叟・野村又三郎、干歳・面箱は井上祐一。笛・藤田六郎兵衛・小鼓福井啓次郎(催主)ほか、大鼓河村総一郎。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

紅梅記

— 濤華能の翁 —

— 受賞 —

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來、父尉・延命冠者の小書が、三番叟には烏帽子ノ祝儀・橋掛ノ舞と打掛り(大鼓)の三つがつく。五つ。翁・金巻高はか、三番叟・野村又三郎、干歳・面箱は井上祐一。笛・藤田六郎兵衛・小鼓福井啓次郎(催主)ほか、大鼓河村総一郎。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。

観世流謡曲本

ちくさ正文館

ちくさ駅前 電話01137

宇高六兵衛

喜大夫追善能

十二月三日 松山・県民文化会館 金剛流・宇高通成師は、十二月二十三日、松山市の愛媛県民文化会館で「宇高六兵衛喜大夫追善能」を開催する。

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の翁さんは三人で、十二月往來が行われる。すむとシテの翁さんは大小前(中央)へ。ツレの翁さんは太鼓座前に座す。いよいよ翁の舞が。「万歳楽」と唱え、三人の翁さんは元の座に。今度は父尉(シテ翁)・延命冠者(干歳)が舞台に立つ。父尉は翁の方で冠者は正先に。問答が終ると二人は元へ。三人の翁は再び正面で平伏し、翁降りとなる。干歳は三番叟に備える。三番叟がきやかにすむ。めでたく明るく豊かな気分になる。一時間二十分前後か。奈良と二重写しになったことを重ねて告げた。